

剣崎稻荷塚遺跡4

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2016

高崎市教育委員会
有限会社毛野考古学研究所

剣崎稻荷塚遺跡4

－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

2016

高崎市教育委員会
有限会社毛野考古学研究所

例　　言

1. 本書は、宅地造成に伴う剣崎稻荷塚遺跡 4 の発掘調査報告書である。
2. 本調査および整理作業から本書作成に至る経費は、地権者の櫻井宏衛氏に負担して頂いた。
3. 本遺跡は、群馬県高崎市剣崎町字稻荷塚 766 番 1、766 番 2 に所在している。
4. 本調査及び整理作業は、事業主・高崎市・有限会社毛野考古学研究所による三者協定を締結し、高崎市教育委員会の指導・監督のもと、委託を受けた有限会社毛野考古学研究所が実施した。
5. 発掘調査は、南田法正（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
遺構測量は小出琢磨（有限会社毛野考古学研究所）がおこなった。
空撮は和久拓照（有限会社毛野考古学研究所）・小出がドローンを使用して実施した。
6. 発掘調査・整理作業は以下の期間で実施した。
【発掘調査】 平成 27 年 10 月 1 日～ 同年 11 月 11 日
【整理作業】 平成 27 年 11 月 12 日～ 平成 28 年 5 月 31 日
7. 本遺跡は、高崎市教育委員会の遺跡番号で 656 である。
8. 本書の執筆については、I 章を矢島 浩（高崎市教育委員会）、それ以外の執筆と編集を南田が行った。
本書作成に関わる分担を以下に記す。
遺物写真撮影 井上 太（有限会社毛野考古学研究所）
遺物実測・観察表作成 古墳時代以降：有山径世・小此木真理・李スルチヨロン（有限会社毛野考古学研究所）
縄文～弥生時代：浅間 陽（有限会社毛野考古学研究所）
縄文時代石器：日沖剛史（有限会社毛野考古学研究所）
9. 本書に関わる資料は、一括して高崎市教育委員会が保管している。
10. 発掘調査・整理作業に携わった方々は以下のとおりである。（順不同・敬称略）
【発掘調査】
森山孝男 小関泰洋 永井述史 岡庭秋男 松本幸男 橋元裕児 亀田浩子
【整理作業】
磯 洋子 小谷貴世美 関小百合 竹中美保子 真下弘美 亀田浩子 合田幸子 武士久美子
日沖奈美子 深谷道子 山口昌子 半澤利江 永井祐二 山下奈邦子
11. 発掘調査の実施から報告書の刊行に至る過程で下記の機関・諸氏のご協力を賜った。記して心より感謝申し上げます。
(順不同・敬称略)
櫻井宏衛 株式会社ハウスプランナー 株式会社コスマックス
鈴木徳雄 谷藤保彦 山口逸弘 関根慎二

凡　　例

1. 採図中の北方位は座標北を、断面水準線数値は海拔標高を示す。座標は世界測地系を用いた。
2. 遺構・遺物図の縮尺は以下の通りである。採図中にはスケールを付して表示してある。
遺構 全体図 1/120、1/200
　　竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝・土層断面図等：1/30、1/60、1/80、1/100
　　遺物 土器類・陶器類・金属製品・石器・石製品等：1/1、1/2、1/3、1/4
3. 遺構覆土および土器の色調觀察は
『新版 標準土色帖』（農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修 2006）に従っている。
4. 遺物番号は、遺物図版・実測図・観察表とともに共通である。
5. 遺構一覧表・遺物觀察表に示した計測値・形状などの（ ）は復元推定値・推定形状、〈 〉は残存値を表す。
6. 本書で使用する火山灰指標テフラの略称は以下のとおりである。
As - A : 浅間 A 軽石 (1783 年) As - B : 浅間 B 軽石 (1108 年)
As - C : 浅間 C 軽石 (3 世紀後葉～未葉) As - YP : 浅間一板鼻黄色軽石 (13000 - 14000y.B.P)
As - BP Group : 浅間一板鼻褐色軽石群 (19.000 - 24.000y.B.P)
Hr - FA : 森名山二ツ岳渋川テフラ (Hr - S・6 世紀初頭)
Hr - FP : 森名山二ツ岳伊香保テフラ (Hr - I・6 世紀中葉)
B 混土 : As - B 混入土 A 混土 : As - A 混入土
7. 本書掲載の第 1 図は高崎市発行 1/2,500 「高崎市都市計画基本図」、
第 2 図は国土交通省国土地理院発行 1/25,000 「下室田」「富岡」を使用した。

目 次

例 言
凡 例
目 次

I	調査に至る経緯	1	IV	基本層序	5
II	地理的・歴史的環境	1	V	遺構と遺物	7
	1. 地理的環境	1		1. 遺跡の概要	7
	2. 歴史的環境	3			
III	調査の方法と経過	5	VI	まとめ	38
	1. 調査の方法	5			
	2. 調査の経過	5			

写真図版
抄 錄
奥 付

挿 図 目 次

第 1 図	調査区域図	1	第 14 図	遺構図 (6) 土坑・ピット [中近世・古代]	23
第 2 図	遺跡の位置	2	第 15 図	遺構図 (7) 土坑・ピット [古代・縄文]	24
第 3 図	周辺の遺跡	3	第 16 図	遺構図 (8) 土坑・ピット [縄文]	25
第 4 図	基本層序	6	第 17 図	遺物図 (1) SI - 1・SI - 2	26
第 5 図	遺構全体図 (1)	6	第 18 図	遺物図 (2) SI - 3・SI - 4・SI - 5 / SK - 1・SK - 3	27
第 6 図	遺構全体図 (2) 時期別 [1]	9	第 19 図	遺物図 (3) SK - 8・9・14・16・17・18・23・ 25・26・27・28・36・37・39	28
第 7 図	遺構全体図 (3) 時期別 [2]、 道路拡張区 [北部・中央部・南部]	10	第 20 図	遺物図 (4) SK - 53・56・59・71・75・76・ 78・81・82	29
第 8 図	遺構全体図 (4) 土坑・ピット	11	第 21 図	遺物図 (5) SK - 86・87 (P - 300) / P - 45・56・ 91・118・121・188・222・229・ 235・246・256・266・267・286	30
第 9 図	遺構図 (1) SI - 1	18	第 22 図	遺物図 (6) 遺構外出土遺物 (1~23)	31
第 10 図	遺構図 (2) SI - 2・3・4	19	第 23 図	詳細遺跡分布図	39
第 11 図	遺構図 (3) SI - 5・6・7・掘立柱建物跡・ 柱穴列 [中近世]	20			
第 12 図	遺構図 (4) 掘立柱建物跡・柱穴列 [古代]	21			
第 13 図	遺構図 (5) 掘立柱建物跡 [古代]・柱穴列 [縄文]	22			

挿 表 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧	4	第 13 表	SI - 3出土遺物観察表①	32
第 2 表	住居跡・竪穴状遺構一覧表	12	第 14 表	SI - 3出土遺物観察表②	33
第 3 表	掘立柱建物跡・柱穴列一覧表	12	第 15 表	SI - 4出土遺物観察表	33
第 4 表	土坑一覧表①	13	第 16 表	SI - 5出土遺物観察表	33
第 5 表	土坑一覧表②	14	第 17 表	土坑出土遺物観察表①	33
第 6 表	ピット一覧表①	14	第 18 表	土坑出土遺物観察表②	34
第 7 表	ピット一覧表②	15	第 19 表	土坑出土遺物観察表③	35
第 8 表	ピット一覧表③	16	第 20 表	土坑出土遺物観察表④	36
第 9 表	ピット一覧表④	17	第 21 表	ピット出土遺物観察表①	36
第 10 表	溝跡一覧表	17	第 22 表	ピット出土遺物観察表②	37
第 11 表	SI - 1出土遺物観察表	32	第 23 表	遺構外出土遺物観察表	37
第 12 表	SI - 2出土遺物観察表	32			

写真図版目次

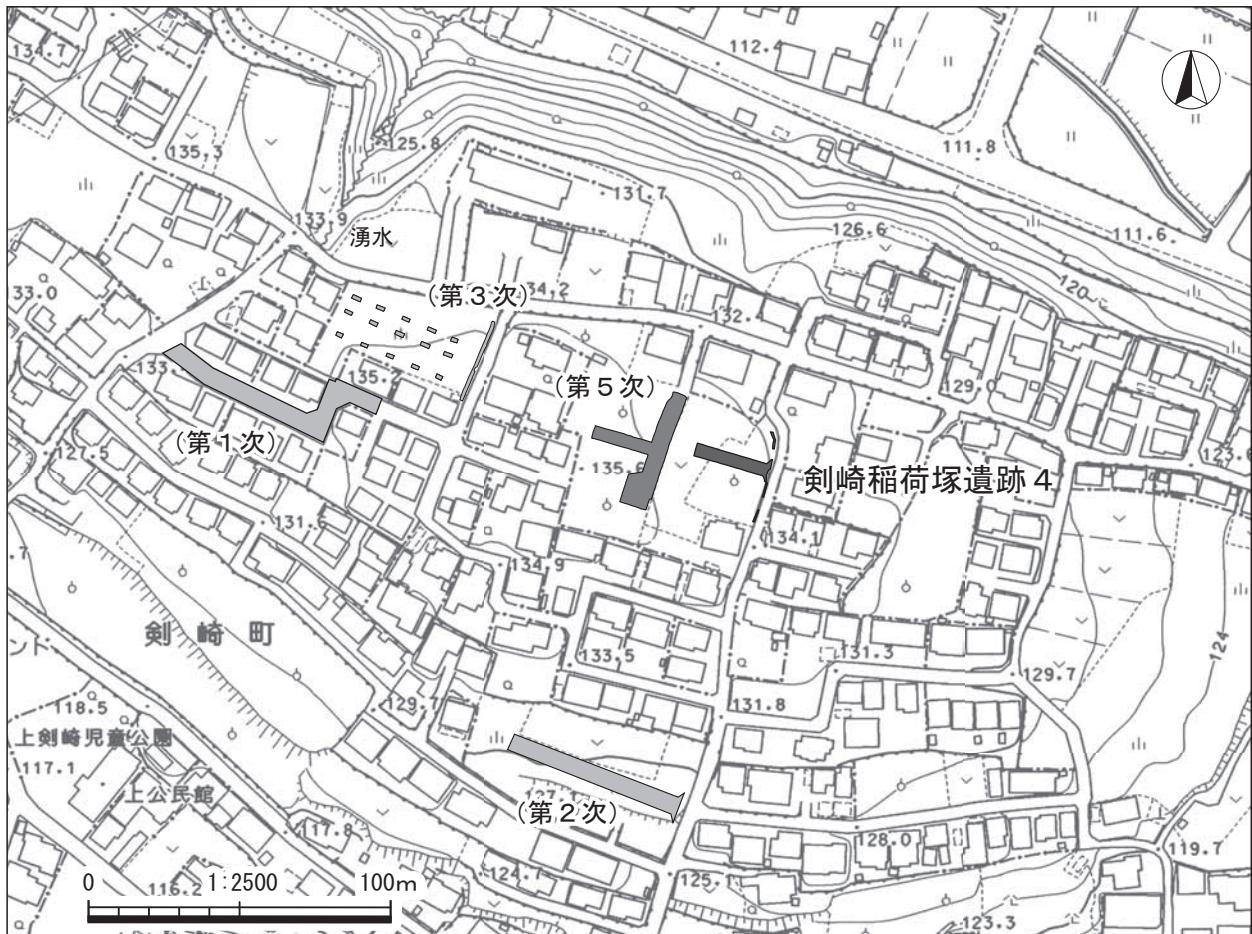
- | | |
|--|---|
| <p>PL. 1 剣崎稻荷塚遺跡4 空撮全景（上が北）
剣崎稻荷塚遺跡4 繩文遺構群 空撮全景（上が北）</p> <p>PL. 2 調査区 全景（西）
道路拡張区〔中央部〕全景（北東）
道路拡張区〔北部〕全景（南西）
道路拡張区〔南部〕全景（南西）
SI - 6 [道路拡張区南部] 全景（北西）</p> <p>PL. 3 SI - 1 全景・遺物出土状況（西）
SI - 1 土坑1 土層断面（西）
SI - 1 貯蔵穴 遺物出土状況（南西）
SI - 3 完掘・SI - 1 掘り方 全景（西）
SI - 3・SI - 1 掘り方 全景（西）
SI - 3 鍛治炉・土坑2（旧炉）全景（西）
SI - 2 掘り方 全景（西）
SI - 2 土層断面（北東）</p> <p>PL. 4 SI - 4 全景・土層断面（北）
SI - 5・P - 230 全景・遺物出土状況（南西）
SL - 1 焼土検出状況（西）
SK - 1 全景（西）
SK - 3 全景・遺物出土状況（東）
SK - 3 遺物出土状況 近景（南東）
SK - 3・16 全景（東）
SK - 5 全景（東）</p> | <p>PL. 5 SK - 9 全景（南）
SK - 13（奥）・40 全景（北東）
SK - 17・40 全景（東）
SK - 25 全景・副葬品出土状況（南）
SK - 25 土層断面（東）
SK - 26・SK - 27・P - 45 全景（北）
SK - 35（柱穴）土層断面（西）
SK - 54（柱穴）土層断面（西）</p> <p>PL. 6 SK - 72 全景・遺物出土状況（南東）
SK - 81 全景・遺物出土状況（東）
繩文土坑群 全景（南）
中近世ピット群・SD - 1 全景（西）
P - 70 磬出土状況（東）
P - 121 全景・器台出土状況（西）
P - 155 磨製石斧・被熱礫出土状況（東）
P - 226 馬歯検出状況（南）</p> <p>PL. 7 出土遺物（1）住居跡・竪穴状遺構</p> <p>PL. 8 出土遺物（2）土坑①</p> <p>PL. 9 出土遺物（3）土坑② / ピット</p> <p>PL. 10 出土遺物（4）遺構外出土遺物</p> |
|--|---|

I 調査に至る経緯

平成 26 年 5 月、土地所有者櫻井宏衛氏と施工責任者である今井開発株式会社から、高崎市剣崎町において計画している宅地分譲造成工事に先立つ埋蔵文化財の照会が市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である剣崎稻荷塚遺跡内に所在するため、工事に際しては協議が必要である旨を回答した。同年 5 月 26 日には、市教委へ埋蔵文化財試掘（確認）調査依頼書が提出され、同年 6 月 25 日に試掘（確認）調査を実施した。その結果、縄文時代から平安時代の竪穴建物を確認した。この結果をもとに開発者と市教委で協議したが、現状保存は困難との結論に達し、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。なお遺跡名については「剣崎稻荷塚遺跡 4」とした。平成 27 年 9 月 28 日に文化財保護法に基づく届出が提出された。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要項」に順じ、平成 27 年 9 月 18 日に櫻井宏衛氏と民間調査機関有限会社毛野考古学研究所との間で契約を締結、また同日に櫻井宏衛氏・有限会社毛野考古学研究所・市教委での三社協定も締結し、調査の実施にあたって市教委が指導・監督することとなった。



第 1 図 調査区域図

II 地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

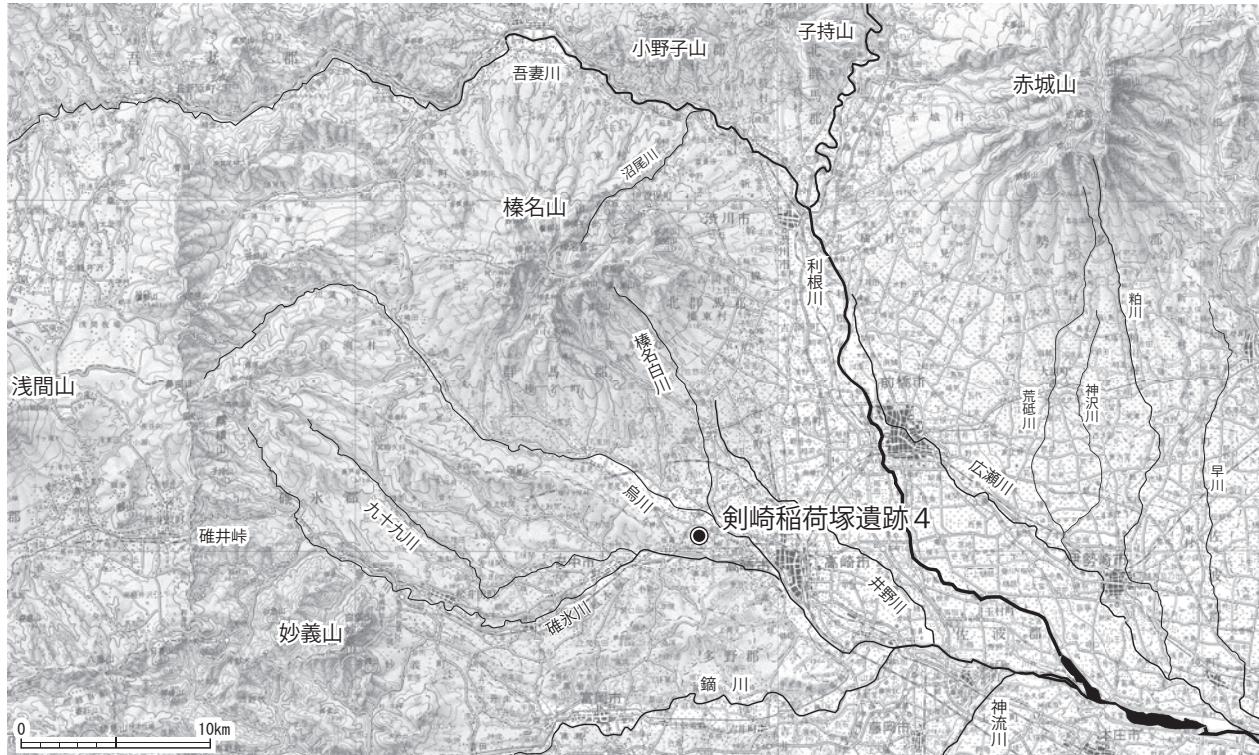
剣崎稻荷塚遺跡 4 は群馬県高崎市の西方、烏川左岸の八幡台地の北縁中央部付近に所在する。

高崎市は関東平野最奥部にあたり、北西に榛名山、北東に赤城山、西に妙義山と浅間山を望む。地形的には五つ（低地帯・低台地・洪積台地・扇状地・丘陵）に大別できるようである。

井野川と烏川に挟まれた市の中央部は「高崎台地」と呼ばれる低台地にあたり、北西—南東方向に流下する中の河川や支谷に浸食される。井野川と広瀬川（旧利根川）に挟まれた広大な地域が「前橋台地」であり、現利根川は台地中央部を貫流する。高崎台地～前橋台地の下部には、利根川扇状地が形成した厚さ 100 m の前橋砂礫層が堆積する。浅間一板鼻褐色軽石群（As - BP Group）降下期間中の 1.9 ~ 2.0 万年前頃には、黒斑山崩壊に伴う浅間応桑岩屑などに起因した前橋泥流が、15 m 前後の厚さで前橋砂礫層を覆う。1.6 万年前頃、榛名山東南麓に起こった陣場岩屑なだれは最大厚 40 m の「相馬ヶ原扇状地」を形成し、これが原因となって、利根川が広瀬川低地へと河道変遷したといわれている。1.3 万年前頃には浅間一板鼻黄色軽石（As - YP）が降下し、1.1 万年前頃に井野川泥流が数mの厚さで堆積する。これ以降、烏川と井野川は現河道に固定され、井野川泥流堆積物と前橋泥流堆積物を浸食しながら、高崎台地と井野川段丘面を形成する。高崎台地南縁は井野川・烏川・鎌川の合流点となっている。台地北縁は相馬ヶ原扇状地末端に接し、井野川左岸では扇状地に特徴的な細長い舌状台地と低地が南北方向に交互に並ぶ。榛名白川右岸の扇状地では放射状に展開する浸食谷が深く、様相が異なる。

烏川・碓井川右岸にあたる市の南西側は安中市・富岡市・旧榛名町から続く第三紀系丘陵の東端部にあたり、「觀音山丘陵」・秋間丘陵と呼ばれる。標高 200 ~ 300 m で、起伏の激しい地形が発達する。秋間丘陵の東縁は宇栄谷戸を境にして洪積台地の「八幡台地」となり、烏川と碓井川の合流点に接する。八幡台地上はローム層が厚く、浅間一板鼻黄色軽石 (As - YP) も比較的厚い。台地内部は東西方向の谷地に開析され、北の剣崎支台、中央の若田支台、南の八幡支台に分かれる。本遺跡は剣崎支台のほぼ東端部に位置し、北縁は急崖、西方は剣崎稻荷塚遺跡 3 で確認した埋没谷によって画されて、この埋没谷は湧水点にもなっている。南縁と東側はやや急な緩斜面であり、遺跡地全体としては独立丘状を呈する。こうした地形的限界性は、縄文時代の集落形成に大きく関与していたと推測されるが、古墳時代以降も一定の影響を及ぼしていたと推測する。明治時代以降に上水道施設が長瀬地区に造成され、昭和 30 年代の地図を見ると遺跡地一帯は大半が果樹と畠地であるが、近年は住宅密集地に変貌している。

以上の高崎台地・観音山丘陵・八幡台地を浸食する井野川・烏川・碓井川は、幅の広い低地帯をそれぞれ形成しており、自然堤防状の微高地や段丘面を形成している。



第2図 遺跡の位置（国土地理院発行 200.000分の1地勢図を縮小改変）

2. 歴史的環境

八幡台地は遺跡密集地帯で、本遺跡は北側の剣崎支台に立地する。以下、周辺遺跡の概略を記載する。

市内では旧石器時代遺跡が極めて乏しいながら、碓井川右岸の岩鼻坂上北遺跡では木葉形尖頭器が1点出土している。八幡台地にはAs-YP下部にローム層が厚く堆積しており、今後の発見が期待される。縄文時代草創期では、剣崎支台の剣崎長瀬西遺跡(5)において爪形文土器・多縄文系土器・有舌尖頭器等がややまとまって出土し、特筆される。大島原遺跡(7・現西部小学校)、八幡中原遺跡(13)、八幡遺跡(16)でも有舌尖頭器等が出土しており、活発な活動がうかがえる。剣崎長瀬西遺跡では早期前半～中葉の押型文土器もまとめて出土している。本遺跡の1次・2次調査でも住居跡が確認されており、黒浜・有尾式期1棟、中期後葉1棟、後期1棟となっている。剣崎支台の若田原遺跡(10・現八幡靈園)は、前期末葉の住居跡1棟のほか、中期後半～後期中葉の住居跡23棟が確認されており、拠点的環状集落の可能性が高い。その東約700mの位置にある大島原遺跡でも、早期後半・前期後葉・中期中葉の土器とともに、中期後葉の住居跡3棟が確認されている。

弥生時代後期には樽式期の中～大規模集落が出現する。八幡遺跡では、52棟(古墳時代前期初頭を一部含む)の住居跡と、土坑墓および推定礫床墓が計7基確認されている。剣崎長瀬西遺跡では78棟(古墳時代前期初頭を一部含む)もの住居跡が調査されている。剣崎支台東端の引間遺跡(3)でも37棟の住居跡と方形周溝墓が検出されている。

古墳時代前期集落では、八幡遺跡で40棟以上、剣崎長瀬西遺跡で16棟が認められ、立地は樽式期から踏襲するものの、集落規模はやや縮小する。中期では剣崎長瀬西遺跡で52棟、隣接する大島原遺跡で11棟の住居跡が確認されており、大規模集落と想定される。八幡中原遺跡では古墳中期～奈良・平安時代の住居跡176棟が調査され、古墳後期がその大半を占める。剣崎長瀬西遺跡・八幡中原遺跡や七五三引遺跡(11)では中期と後期の住居跡等から韓式系土器が出土しており、剣崎長瀬西遺跡の馬埋葬土坑には梯子形立聞付X字銘留楕円形鏡板付轡が副葬され、10号墳からは金製垂飾付耳飾が出土するなど、八幡・剣崎地域は渡来系遺物の分布域として特記される。



※図中、グレーの実線で示した部分が、米軍写真で読み取れる直線的地割り。現在の高压送電線と平行することに注意。

第3図 周辺の遺跡（国土地理院発行 25.000分の1図を改変）

前期の周溝墓は八幡遺跡・引間遺跡と豊岡後原遺跡（2）で検出された。中期には剣崎天神山古墳（12）、剣崎長瀬西古墳（6・5世紀後半）という大型円墳が築かれ、次いで5世紀後半～末葉には平塚古墳（19）が築造される。若田大塚古墳（9・6世紀初頭）や八幡二子塚古墳（18・6世紀代）、観音塚古墳（17・6世紀末）の首長墓をはじめ、周辺には5～7世紀代の八幡・剣崎・若田原の各古墳群が展開する。剣崎稻荷塚遺跡（第3次）の西側隣接地には、「稻荷塚」地名の由来とも想像される塚が存在する。

古代集落では豊岡後原遺跡が最大規模である。八幡中原遺跡と七五三引^{しめびき}遺跡は片岡郡衙に比定され、基壇状遺構・掘り込み地業礎石建物や大溝が調査されている。東山道は、中山道とほぼ平行する牛堀・矢ノ原ルートと国府ルートの2条が想定されている。戦後の米軍写真では、若田支台を北東一南西方向に走行する地割り線を明瞭に視認でき、これを国府ルートと想定した場合、七五三引遺跡のすぐ東側を通過する。剣崎稻荷塚遺跡の1次調査では、9～11世紀代の住居跡13棟が調査されている。2号住居の覆土中及び床面付近からは、11世紀代の所産とされる2体の小金銅神像が出土している。中世の資料は乏しいが、八幡二子塚遺跡ではかわらけが出土した土坑や井戸が確認されている。上野国一社の八幡宮は源氏と関係が深く、八幡宮一帯は新田氏一族の所領でもある。また、八幡宮の立地する台地先端部は城砦的な微地形を備えている。

第1表 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	概要	文献
1	剣崎稻荷塚遺跡 (第4次・本報告)	縄文時代前期後葉住居跡1棟・縄文時代土坑18基、奈良時代住居跡1棟、平安時代住居跡2棟（小鍛冶遺構）、古代掘立柱建物跡、10世紀代墓坑、中近世掘立柱建物跡・土坑	『剣崎稻荷塚遺跡4』高崎市文化財調査報告第373集 2016
1	剣崎稻荷塚遺跡 (第1次)	縄文時代前期・中期・後期住居跡、平安時代住居跡13棟、小金銅神像2体	『剣崎稻荷塚遺跡』高崎市遺跡調査会報告書第72集 1998
1	剣崎稻荷塚遺跡 (第2次)	縄文前期後葉住居跡4棟、弥生後期住居跡2棟、古墳中期住居跡4棟、古墳後期住居跡17棟、奈良平安時代住居跡4棟	『剣崎稻荷塚遺跡2』高崎市文化財調査報告第248集 2008
1	剣崎稻荷塚遺跡 (第3次)	縄文前期中期竪穴状遺構5棟・土坑7基、弥生後期竪穴状遺構2棟、平安時代住居跡8棟、11世紀代墓坑、埋没谷谷頭（縄文前期）	『剣崎稻荷塚遺跡3』高崎市文化財調査報告第292集 2012
2	豊岡後原遺跡	縄文時代中期住居跡1棟、方形周溝墓1基、奈良・平安時代住居跡169棟、綠釉陶器、中世備蓄錢	『豊岡後原I・II遺跡』高崎市文化財調査報告第157集 1998
3	引間遺跡	弥生時代後期住居跡37棟、弥生時代後期方形周溝墓、古墳時代前期～後期住居跡25棟、和同開珎	『引間遺跡』高崎市文化財調査報告書第5集 1979
4	剣崎天神山古墳	円墳か、滑石製琴柱形石製品1・鏡形2・咲形1・槽形1・杵形・手斧形1・鎌形1・刀子形71、1963年消滅	外山和夫「石製模造品を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐって」『考古学雑誌』62巻2号 1976
5	剣崎長瀬西遺跡	縄文～奈良時代住居跡、積石塚古墳、馬埋葬土坑、韓式系土器、金製垂飾付耳飾り、初期馬具	『剣崎長瀬西遺跡1』高崎市文化財報告書第179集 2002 『剣崎長瀬西遺跡2』高崎市文化財調査報告書第190集 2004
6	剣崎長瀬西古墳	帆立貝形？短甲、振形文鏡、滑石製品、鉄製鋸、鐵鎌、円筒埴輪、家形埴輪、須恵器	『剣崎長瀬西遺跡1』高崎市文化財報告書第179集 2002
7	大島原遺跡	縄文時代住居跡3棟、古墳時代中期住居跡11棟、古墳7基	『高崎市史』資料編1 2000
8	楳ノ木古墳	円墳、横穴式石室	『群馬県史』資料編3 1981
9	若田大塚古墳	円墳（径29.5m）、自然石乱石積横穴式石室、鉄槍	『群馬県史』資料編3 1981
10	若田原遺跡群	縄文時代前期未住居跡1棟、縄文時代中期住居跡20棟以上（柄鏡形敷石住居2棟）	『高崎市史研究』3 1993
11	七五三引 ^{しめびき} 遺跡	古墳時代中～後期住居跡7棟、土壇状遺構、韓式系土器	『七五三引遺跡』高崎市遺跡調査会報告書第6集 1984
12	八幡中原遺跡 (第3次)	古墳時代中期～奈良・平安時代竪穴建物跡10棟、掘立柱建物跡2棟、基壇状遺構1基、大溝1条	『八幡中原遺跡3』高崎市文化財調査報告第282集 2011
12	八幡中原遺跡 (第5次)	古墳時代中期～後期竪穴建物跡10棟、総掘込地業礎石建物跡1棟、韓式系土器	『八幡中原遺跡5』高崎市文化財調査報告第328集 2014
13	八幡中原遺跡 (第1次)	縄文時代草創期有舌尖頭器、古墳時代～奈良・平安時代住居跡176棟、掘立柱建物跡36棟、韓式系土器	『八幡中原遺跡』高崎市文化財調査報告第31集 1982
14	八幡六枚遺跡	弥生～奈良・平安時代の住居跡、古墳時代石製模造品「片罈郡」刻印須恵器甕	『八幡・六枚遺跡2』高崎市文化財調査報告書第274集 2010 『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』高崎市文化財調査報告書第112集 1991
15	四ノ市遺跡	弥生～古墳時代の住居跡	『群馬県史』資料編2 1986
16	八幡遺跡	縄文時代前期・後期土器片、草創期有舌尖頭器、弥生時代後期住居跡52棟、古墳時代住居跡43棟、銅鉗、子持勾玉	『八幡遺跡』高崎市文化財調査報告書第91集 1989
17	観音塚古墳	前方後円墳（墳長96m）、横穴式石室、銅鏡、大刀、馬具、銅椀、鉄鎌、金環、銅鉗、須恵器等	『群馬県史』資料編3 1981 『高崎市史』資料編1 2000
18	二子塚古墳	前方後円墳（墳長66.5m）、横穴式石室	『八幡二子塚古墳』高崎市遺跡調査会報告書第71集 1998
19	平塚古墳	前方後円墳（墳長105m）、舟形石棺2、円筒埴輪	『群馬県史』資料編3 1981
20	龍の塚古墳	帆立貝形古墳（墳長20m）、円筒埴輪	『上毛古墳綜覧』1938
21	若田屋敷裏I・II遺跡	縄文時代住居跡1棟、古墳～平安時代住居跡27棟、掘立柱建物跡7棟	『若田屋敷裏I・II遺跡』高崎市文化財調査報告書第156集 1998

III 調査の方法と経過

1. 調査の方法

調査区は宅地区画に囲まれた幅 4.5 m の道路部分と、南北既存生活道路の拡幅範囲、合わせて約 151m²である。拡幅部分については、現況道路の封鎖および占有が困難であり、調査範囲内に電柱が設置されていることを勘案して、トレーナーを 3ヶ所設定して調査を実施した。結果、実質調査面積は 118.6m²となった。

表土掘削は 0.45m³ バックホーを用いておこなった。確認面はローム漸移層もしくは As - YP 層上面である。西側の剣崎稻荷塚遺跡 3 では、As - YP 層は厚く残存し、遺構確認面は As - YP より上位の漸移層であったが、本遺跡では As - YP が自然流失している可能性がある。As - B 混土あるいは As - A 混土が厚く堆積し、B 混土層とローム漸移層の間には黒褐色包含層がわずかに堆積しているが、遺構確認を容易にするため、ローム漸移層まで掘り下げてある。各遺構は重複関係や覆土の違いに留意しながら、移植ゴテ等を用いて人力掘削した。道路拡幅部分の調査については、生活道路でもある現道の通行を維持したままで実施する必要があったため、安全に十分配慮しつつ、現道際にトレーナーを 3ヶ所設定し、表土掘削・遺構調査・埋戻しを 1 日で完了した。SI - 03 の小鍛冶炉については、覆土のほぼ全てを回収し、整理作業の際に篩によって鍛造剥片や粒状滓を検出した。

遺構平面測量は自動追尾システム光波測距儀を用いて行い、断面測量は手実測した。遺構・遺物出土状況などの写真記録は、35mm モノクロネガ・カラーリバーサルで撮影し、1000 万画素相当のデジタルカメラを併用した。

2. 調査の経過

発掘調査は平成 27 年 9 月 1 日から同年 11 月 11 日まで実施した。以下に概要を記す。

9月 1日：調査準備開始。書類作成等。現地確認。 15日：現地にて工事業者との打ち合わせ。

10月 13 日：調査区設定。重機・仮設トイレ・器材搬入。重機による表土掘削開始。安全対策諸作業。

14日：作業員による遺構確認作業。As - B 混遺構調査開始。隣接する剣崎稻荷塚遺跡 5 の重機掘削開始。

15日：SI - 1 調査。各土坑、ピット調査。遺構平面測量。

16日：東側道路拡張区の重機表土掘削ならびに調査。調査終了後、即日埋戻し。

19・20日：SI - 1 および各土坑・ピットの調査。

22・24日：SI - 1 および SK - 3・16・17 ほか、各土坑・ピットの調査。各遺構平面測量。

26・27日：SI - 2・4、SK - 25 ほか、各土坑・ピットの調査。

28～30日：SI - 2・4、SI - 1 堀り方および SI - 3 の調査。P - 121 ほか、各土坑・ピットの調査。

11月 2 日：雨天中止。

3・4日：SI - 1 堀り方および SI - 2・3、各土坑・ピットの調査。 5日：空撮。

6・7日：SI - 3 小鍛冶炉および堀り方調査。SI - 2 堀り方調査。縄文土坑群の調査。

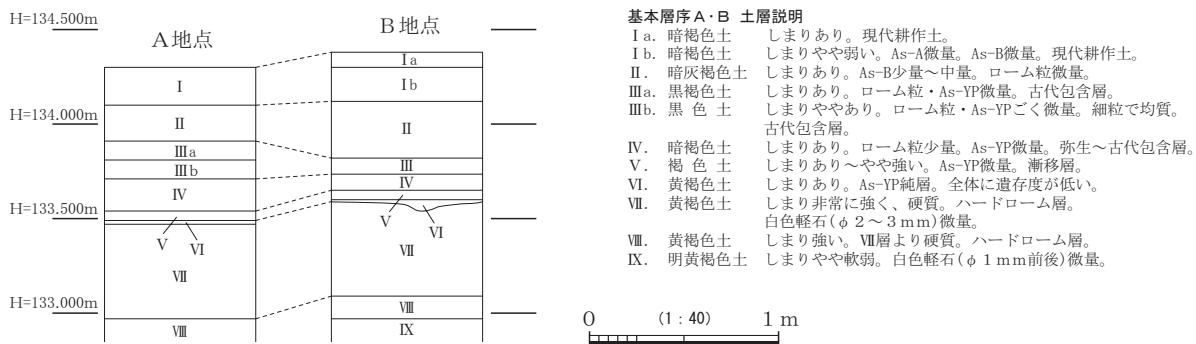
9日：縄文土坑群の調査。各遺構断面実測。 10日：各遺構平面測量。縄文遺構群の空撮。

11日：高崎市教育委員会による発掘調査終了確認検査。全調査工程終了。

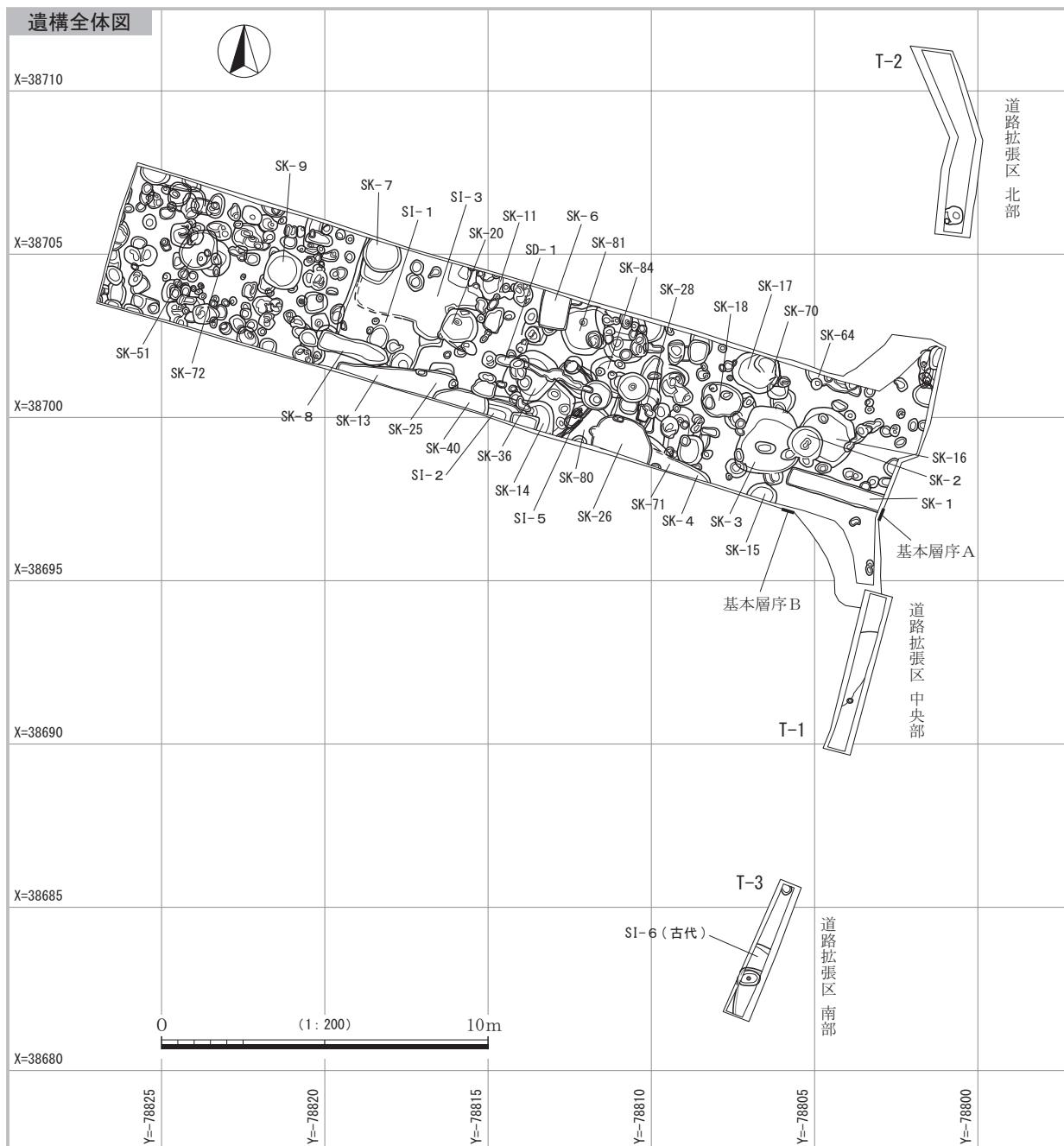
IV 基本層序 (第4図)

調査区東壁および SK - 1 壁面で確認した。表土耕作土・As - A 混土・As - B 混土が厚く、3 層で 50～60cm を測る。III・IV 層は古代以前の遺物包含層にあたり、最大で 17cm を測るもの、全体的には 5～10cm 程度である。V 層はローム漸移層に該当し、層厚 5 cm 以下である。VI 層は As - YP 層に該当するが、剣崎稻荷塚遺跡 3 と比べて非常に薄く、安定しない。遺構確認面は、V 層上面～VI 層上面の間である。VII 層・VIII 層はいわゆるハードローム層で、VII 層中には ϕ 2～3 mm の白色軽石が含まれる。IX 層はやや軟弱で、粉状の微小白色軽石を微量含む。

基本層序



第4図 基本層序



第5図 遺構全体図 (1)

V 遺構と遺物

1. 遺跡の概要

本遺跡は剣崎稻荷塚遺跡の第4次調査にあたり、西側隣接地の第5次調査は、本調査の直後に行われている。

今回の調査では、縄文時代前期の土坑群と柱穴列、中期の住居跡と土坑群、弥生時代と推測される焼土跡・ピット群古代の住居跡（小鍛冶遺構伴う）・掘立柱建物・墓坑・170基のピット、中近世の掘立柱建物・柱穴列・土坑群・61基のピットを確認した。本項では各時代の概要を中心にして個別遺構を概述し、各遺構の詳細な属性・情報については一覧表を参照されたい。

縄文時代

（前期の遺構） 東側に集中する。SK-3・16は前期中葉・有尾式期の土坑である。直径2m前後を測り、本来はフ拉斯コ状土坑であろう。諸磯b式期の竪穴住居と推定されるSI-5を確認した。浅い周溝が2重にめぐるため、竪穴には新旧がある。ピットからは深鉢破片が出土した。SI-5下部や周辺には、諸磯式期の土坑10基（SK-36・77・79～86）が密集・重複して分布する。浅い土坑が多く、平面形は楕円形・略円形・隅丸方形など多様である。遺物量はわずかだが、隅丸方形の土坑は墓坑の可能性が残る。これらの土坑は覆土がローム層に近似するため、確認はやや難しい。SK-86からは有縁石皿片が出土している。この土坑群と重複して、柱穴列・SA-1が存在する。深いピット3基が3m間隔で並び、その中間に浅いピット3基が位置し、計6基の柱穴が1.5m間隔でおよそ直線的に並ぶ。掘立柱建物や、いわゆるロングハウスの可能性もある。

（中期の遺構） SK-17・70、SK-71、SK-72、SK-75、P-121が中期の土坑である。平面円形のSK-72の覆土中位からは扁平自然礫が出土し、抱石葬の墓坑と推定する。伴出土器片は諸磯b式だが、覆土の特徴が他の前期後葉土坑とは異なる。P-121からは破碎した器台が出土し、1/3程度は欠損しているが、意図的に埋納された可能性もある。西壁のSK-75は一括埋戻し土坑である。SK-17・70は重複する土坑で、覆土の色調や土質が前期後葉の土坑とやや異なる。SI-7は西端部のピット群配置から推定した住居で、建替えを1回想定する。ピットはいずれも浅く、炉も不明ではあるが、縄文集落において竪穴が不明瞭な住居は多数存在する。

（後期の遺構） SK-76からは後期前葉の堀之内1式と2式の小片が各1点出土した。長楕円形を呈することから、墓坑の可能性がある。平面形が類似するSK-78も、同時期の墓坑であった可能性を残しておく。SK-28・68・69はSK-76より新しいため、やはり後期であろう。

（遺物） 遺物量は少ない。前期中葉の有尾式と後葉の諸磯b式を主体とし、遺構外からは前期末葉の十三菩提式、中期初頭の五領ヶ台式、中期後葉の加曾利E式・郷土式、後期前葉の堀之内式などが出土している。石器類も少量で、石錐・スクレイパー・打製石斧・多孔石等がある。遺構外からは黒曜石製のチップ・リタッチドフレイク・器種不明未製品も少量出土したが、掲載からは割愛した。焼礫が集積された古代ピット（P-155）からは、磨製石斧が出土している。古代の竪穴住居や土坑からは、何らかの用途で転用されたとみられる磨石などの礫石器が出土している。SK-27（弥生時代か）からは諸磯b式の獣面把手が出土した。

弥生時代

少量ながら、後期樽式の土器片が出土している。該期の可能性のある遺構としては、SK-18・31・32、P-37・60・77・91・152・208・229が挙げられる。調査区東半～東端部にまとまる傾向にあり、東壁際で検出した焼土跡・SL-1は該期の遺構群に伴う可能性がある。掲載したSK-23（古代）出土遺物は、本来はSK-152に伴う土器であろう。

古代

（竪穴住居） 古代は本遺跡の主体時期となる。ほぼ同位置で重複するSI-1・3は、ともに10世紀前半の竪

穴住居あるいは工房で、連続的建替えを想定する。SI-3 床面では新旧の小鍛冶炉 2 基が検出され、短い羽口が出土している。覆土を篩・水洗選別したところ、鍛造剥片や粒状滓・流動滓を検出した。炉の西側には、豎穴壁と接する大型土坑は SI-3 の鍛冶炉に伴う施設と判断したが、SI-1 まで継続利用された可能性もある。カマドは新旧 2 基あり、南側の旧カマドは SK-20 によって破壊されている。燃焼部からは、硬化した As-YP ユニットの板状破片が数点出土し、補強材に利用していたらしい。旧カマドと接続する南壁は半円形に張出させて、カマド前の屋内空間を確保する。この張出直下には灰層等で埋め戻された床下土坑が存在する。新カマド前庭は灰層が厚く、両カマド前庭部の新床と旧床の間に最大 5 cm の灰層を挟み込む。貯蔵穴は新カマドの北側に 1 基ある。

SI-1 は SI-3 の豎穴を全く踏襲しており、SI-3 南側に豎穴を拡張し、カマド・貯蔵穴部分を埋め戻すことによって、連続的に建替えた住居と考えられる。よって、SI-1 床下土坑は SI-3 の床面をほとんど破壊しない。土坑 1 は被熱した円礫が数点集積され、底面には灰層が溜まっていた。北壁直下にも灰層溜りがある。覆土の選別を行わなかったため鍛造剥片などは未検出ながら、これらも小鍛冶炉であった可能性を残しておきたい。豎穴覆土や床面からは、鉄鎌や鉄釘等が出土している。

SI-2 はやや深い住居で、豎穴の一部しか調査できなかった。東側に深い床下土坑があり、その床面は沈下している。西側の床面の一部が盛り上がっていることも注意される。遺物はごくわずかながら、9世紀代と想定しておく。SI-4 は SI-2 より古く、円形状の土坑の可能性もあるが、土層断面 5 層が貼床・掘り方に相当する可能性があるため、豎穴状遺構と推測する。SI-6 は道路拡張区南部に位置する豎穴住居で、遺物が皆無なため時期不明であるが、9～10世紀代と予測しておく。

(掘立柱建物跡・ピット群) ピット・柱穴は調査区全面に展開し、土坑としたものはほぼ全て掘立柱建物の柱穴であった。ピットには明瞭な集中範囲があり、特に西側は密集するため、何度も建替えられたようである。数棟の掘立柱建物を想定し、SB-1～8 を図示した。SB-1・2 は同一地点で建替えられており、SI-1・3 よりも古い。SB-1・2・7 の主軸は SI-2 に近似し、構築時期も近い可能性がある。SB-3・8 も主軸方位が近似し、同時期と推測する。ただし SI-1 よりは新しい。

(墓坑) SK-25 は 10 世紀後半の墓坑で、SI-2 を破壊する。臼歯が検出され、その周辺の軟弱な土壤を頭部範囲とした。臼歯は脆弱で、ほぼ原形を留めていない。土坑は南北を主軸にし、埋葬状態は北向き仰臥伸展葬と推測する。灰釉陶器の段皿・碗と須恵器坏および砥石（縄文時代の礫石器の転用カ）を副葬品とし、人体の直上や周辺と思われる位置から出土している。埋め戻し土はロームと暗褐色土の互層状を呈し、全体に強く締まる。

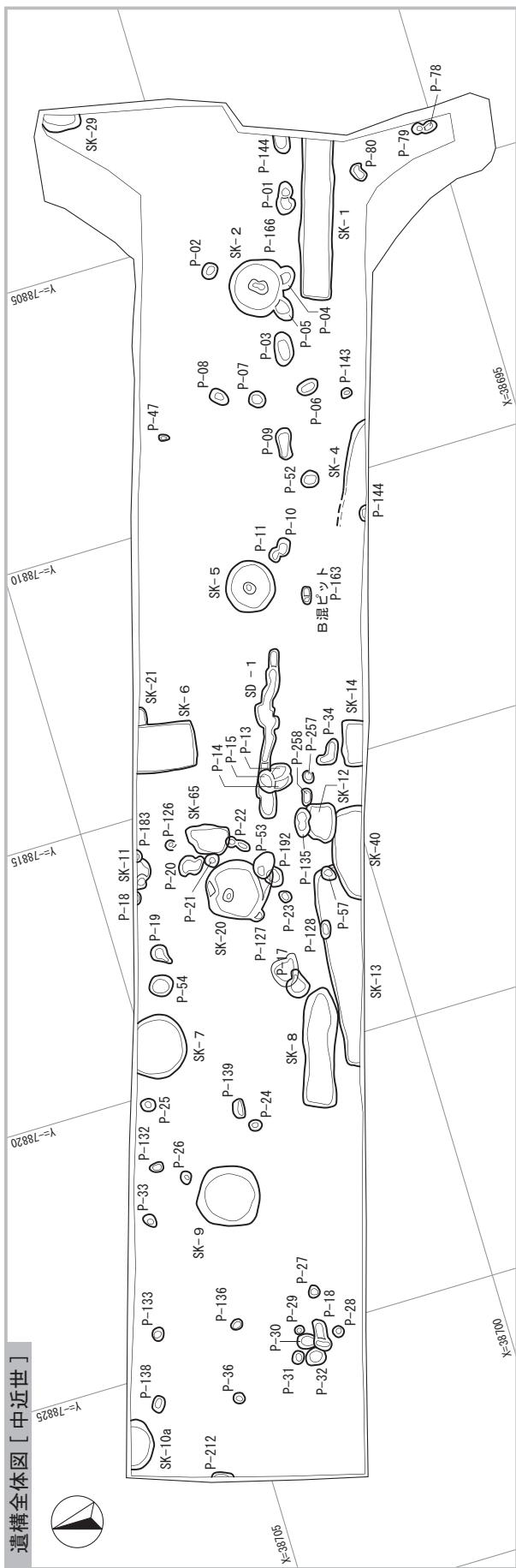
中近世以降

土坑 18 基、掘立柱建物 1 棟、柱穴列 2 条、ピット 61 基（掘立・柱穴列含む）、溝状遺構 1 条を確認した。

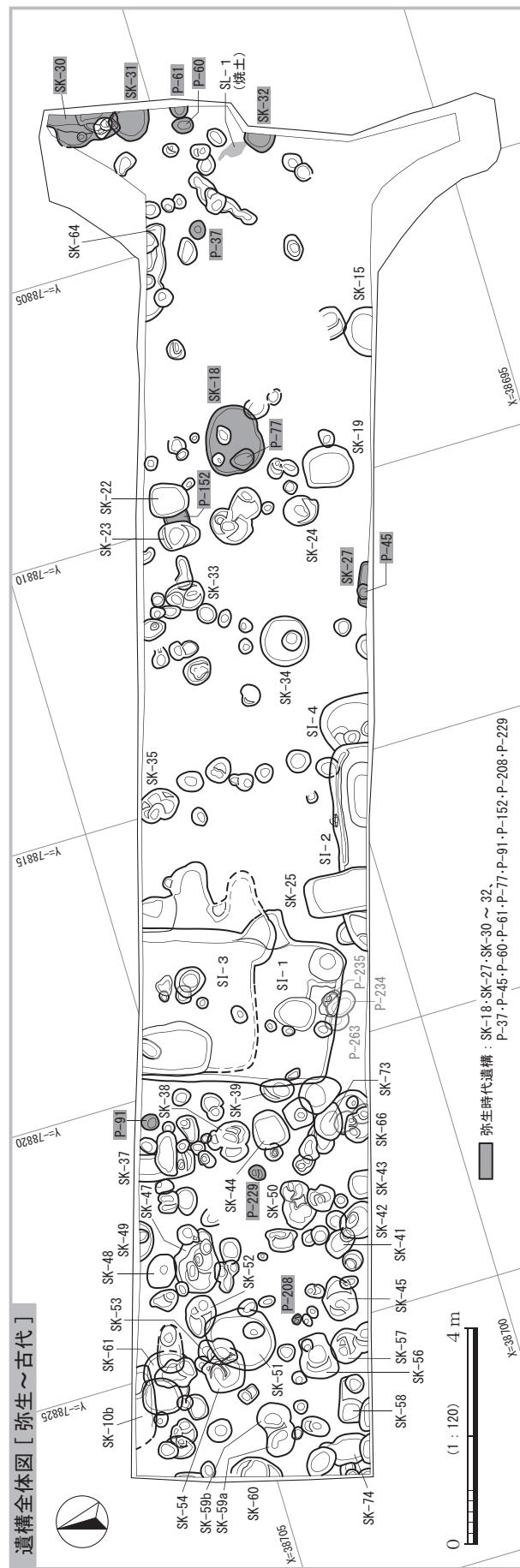
SK-2・5・9・20 は直径 90cm 前後と 1.1 m 前後の円形土坑群で、5.6 m（約 3 間）間隔で直線上に整然と並ぶ。長々方形の SK-1 と SA-1・2 柱穴列および SD-1 は、土坑列の南縁に平行して構築されており、地割り境界線上での配置を示唆している。円形土坑は底面に小ピットを伴い、一括埋戻しであることが共通し、農作物の貯蔵穴と推測しておく。SK-7 も類似土坑である。SK-1 は一部が互層状に埋戻され、イモ穴のような施設と推測するが、円形土坑とは時期が異なるだろう。SA-1 については、1.8 m～2.0 m の柱間で等間隔に並ぶため、掘立柱建物の北縁か柵状施設のいずれかであろう。SD-1 は柱穴列の布基礎と考えられる。掘立柱建物 SB-9 は梁間 1 間以上、桁行 2 間+西張出の小規模な建物と推測する。SA-1・2、SD-1、SB-9 と円形土坑群は、同一線上で配置されていることや、主軸方位の相同性から、同時期頃の所産と推定する。

SK-4・8・13・14・25 は、やや軟弱な As-B 混覆土の浅い土坑である。南壁面では、古い As-B 混土包含層を切って構築されていることが判る。SK-8 からは煙管が出土しており、土坑群の主軸方位は相同ではないが、おそらく 18 世紀中葉以前の土坑群であろう。SK-6 はいわゆるイモ穴で、As-A・B 混土である。

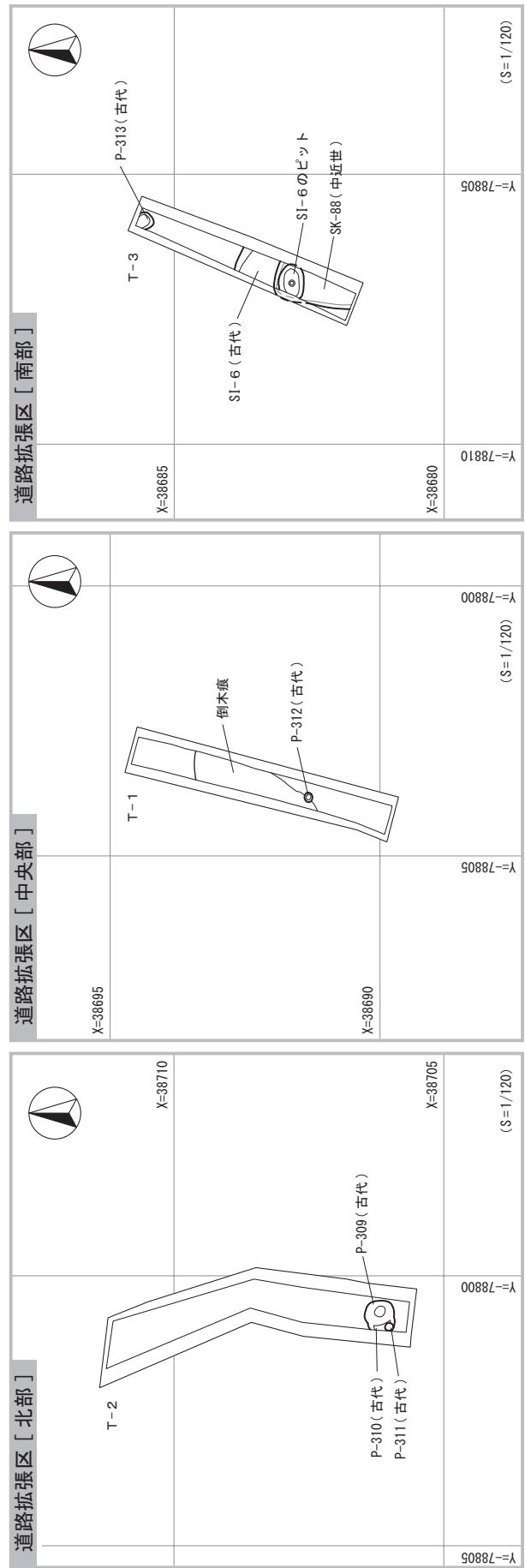
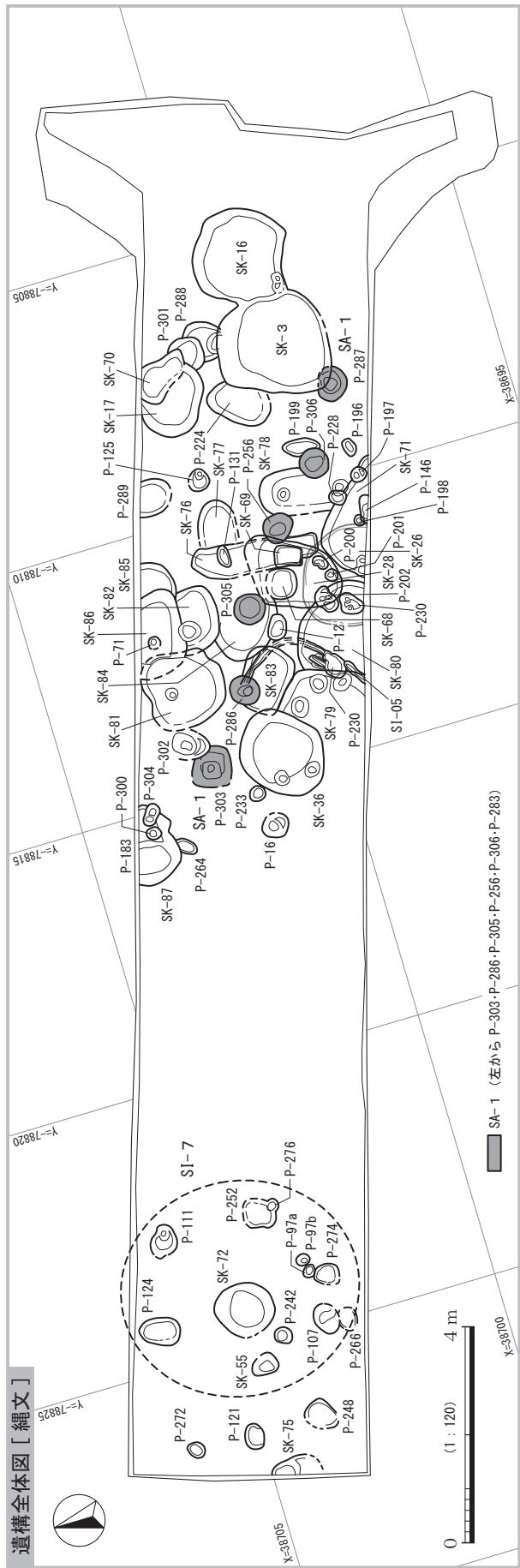
遺構全体図〔中近世〕



遺構全体図〔弥生～古代〕



第6図 遺構全体図(2) 時期別[1]



第7図 遺構全体図（3） 時期別 [2]、道路拡張区 [北部・中央部・南部]

土坑・ピット分布図 [弥生～古代]



第8図 遺構全体図（4） 土坑・ピット

第2表 住居跡・竪穴状遺構 一覧表 [単位: m]

遺構名	主軸方位	平面形	長軸×短軸×深さ	カマド	貯蔵穴	柱穴等の施設	覆土	時期
SI-1	N-109°-E (横長)	隅丸長方形	<3.79> × 2.82 × 0.32	東壁	南東隅	南側の土坑1は灰層堆積。被熱礫数点。炉か	暗褐色土主体。全体にしまり強い。	10世紀前半
	出土 遺物				所 見			
SI-2	須恵器壺・塊、灰釉陶器塊、羽釜、鉄鎌、鉄鏃か、砥石、石製品				SI-03をほぼ踏襲して、南側に拡張するように重複・構築したものと推測。北壁際床面にも灰層堆積を検出しており、土坑1も含めて、小鍛冶遺構の可能性あり。			
	N-100°-E	隅丸方形	3.95 × <0.71> × 0.76	区外東壁か	不明	深い床下土坑あり。	暗褐色土主体。東壁から、ロームブロックが流れ込む。	9世紀後半
SI-3	出土 遺物				所 見			
	土師器壺・甕				SI-04を破壊。SK-25に切られる。床下土坑上部の床面が沈む。床面西側には、周堤状の高まりが認められる。			
SI-4	N-104°-E (縦長)	隅丸長方形	3.30 × <2.30> × 0.44	東壁に2基。カマド1のが新しい。	カマド1の北側	カマド2南側壁が張りだす。直下に床下土坑。	暗褐色土主体。SI 1	10世紀後半
	出土 遺物				所 見			
SI-5	須恵器壺・壺・甕、羽釜、羽口(完形・小型)、流動滓、鍛造剥片、砥石				床面中央に小鍛冶炉と旧炉が並ぶ。小鍛冶炉は還元焰によって青色化。西壁の土坑3は鍛冶に伴う遺構と推測。工房跡。			
	N-86°-W	楕円形～隅丸方形	<1.00> × <0.91> × 0.45	—	不明	底面に小ピット。	暗～黒褐色土主体。	9世紀後半
SI-6	出土 遺物				所 見			
	土師器甕				SI-02に切られる。竪穴状遺構。			
SI-7	N-41°-E	隅丸方形状	<1.93> × <1.37>、周溝深さ0.09	不明	—	P-230は竪穴に伴う小ピット。埋設土器か	—	縄文前期後葉諸磯b式期
	出土 遺物				所 見			
SI-8	P-230から縄文土器深鉢				極めて浅く、周溝のみ確認。竪穴不明。			
	N-112°-E	隅丸長方形か	<2.14> × <0.79> × 0.30	—	不明	床面中央に小ピット。	黒褐色土主体。	古代
SI-9	出土 遺物				所 見			
	土師器小片				道路拡張区南部。9～10世紀頃の住居跡と推測。			
SI-10	N-16°-E	(楕円形)	(4.40) × (4.00) 深さ不明	不明	—	11	—	縄文中期後葉と推測
	出土 遺物				所 見			
SI-11	ピットから縄文土器少數。				竪穴不明。主柱穴6本以上。1回以上の建替えを想定する。			

第3表 掘立柱建物跡・柱穴列 一覧表 [単位: m]

遺構名	主軸方位	平面形	棟方向	梁間×桁行	平均柱間	面積	所見	時期
SB-1	N-88°-W	長方形	東西棟	(3.12) × 6.07 1・2間×3間	桁行平均 2.027	(18.24) m ²	SB-2とは同一地点での建替え。SI-1・3よりも古い。SI-2と同時期頃か	9～10世紀
SB-2	N-85°-W	長方形	東西棟	3.40 × 6.13 2間×3間	桁行平均 2.087	(20.3) m ²	SB-1とは同一地点での建替え。SI-1・3よりも古い。SI-2と同時期頃か	9～10世紀
SB-3	N-29°-E	長方形か	(南北棟)	2.72 × — 1間+下屋×—	—	—	SB-8と主軸が近似。 SI-1よりも新しい。	10世紀以降
SB-4	N-79°-E	長方形か	東西棟	<1.78> × <4.50> (2)間×(3)間	桁行平均 2.25	—	SB-5と同一地点での建替え。	古代
SB-5	N-85°-E	長方形か	東西棟	(3.36) × 5.53 (2)間×3間	桁行平均 1.872	(18.5) m ²	SB-4と同一地点での建替え。	古代
SB-6	N-90°	長方形	東西棟	2.78 × 4.50 (1)間×(2)間	桁行平均 (2.25)	(12.5) m ²	SB-7との建替えを想定。	古代
SB-7	N-80°-W	長方形	東西棟	2.56 × 4.78 (1)間×(2)間	桁行平均 2.28	(11.3) m ²	SB-6との建替えを想定。	古代
SB-8	N-30°-E	長方形	南北棟	1.38 × <3.83> (1)間×<2>間	桁行平均 1.852	<5.3> m ²	建物の下屋部分のみか	10世紀以降
SB-9	N-74°-W	長方形	東西棟	1.62 × 5.48 (2)間×(2)間 +西下屋庇	桁行平均 2.115 ≈ 6.98 尺	(17.1) m ²	建物の南側半分と推測。付属建物か。	中近世
SA-1	N-56°-W	—	東西	5間、 長さ 7.44 m	1.506 m	—	深い柱穴3、浅い柱穴3。大型竪穴建物主柱穴の可能性あり。	縄文前期後葉
SA-2	N-71°-W	—	東西	5間+西端張出 長さ 9.78 m	1.944 m ≈ 6.41 尺	—	SA-3・SD-1と平行	中近世
SA-3	N-73°-W	—	東西	4間、 長さ 8.00 m	1.998 m ≈ 6.594 尺	—	SA-2・SD-1と平行	中近世

第4表 土坑一覧表① [単位:m]

遺構名	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	所見	時期
SK - 1	N - 74° -W	<296> × 60	62	長々方形	箱形	近世陶器、須恵器坏	柱穴列と平行	中近世
SK - 2	N - 49° -W	110 × 101	48	不整方形	箱形	縄文土器、土師器、須恵器	SK 5・9・20と等間隔に並ぶ。	中近世
SK - 3	N - 61° - E	218 × (214)	58	不整楕円形	箱形	縄文土器(有尾式等)、RF	プラスコ状土坑。SK16と重複。	縄文前期中葉
SK - 4	—	<137> × <43>	8	楕円形	浅皿状			中近世
SK - 5	N - 54° -W	96 × 90	31	楕円形	逆台形	縄文土器	SK 2・9・20と等間隔に並ぶ。	中近世
SK - 6	—	<107> × 89	42	(長方形)	箱形	土師器、須恵器	イモ穴状	中近世
SK - 7	—	<92> × 114	20	(円形)	箱形	弥生土器、土師器、須恵器		中近世
SK - 8	N - 74° -W	220 × 62	4	不整長方形	浅皿状	縄文土器、土師器、須恵器		近世カ
SK - 9	N - 30° - E	113 × 113	48	不整円形	箱形	縄文土器(諸磯b)、弥生土器	SK 2・5・20と等間隔に並ぶ。	中近世
SK - 10a	—	93 × <43>	17	(楕円形)	逆台形	縄文土器(中期後葉)、土師器		中近世
SK - 10b	—	<96> × <38>	13	(隅丸長方形)	逆台形			古代
SK - 11	—	<28> × <25>	15	不整形	逆台形			中近世
SK - 12	N - 77° -W	71 × <50>	9	不整長方形	浅皿状	縄文土器(加E3)、須恵器		中近世
SK - 13	—	<315> × <79>	4	(長方形)	(逆台形)	縄文土器(加E3)、須恵器		近世カ
SK - 14	—	<37> × 86	10	(長方形)	箱形	土師器、須恵器		中近世
SK - 15	—	<83> × <53>	7	(不整方形)	逆凸形	土師器		古代
SK - 16	N - 65° -W	171 × 165	44	不整方形	箱形	縄文土器(有尾等)	プラスコ状土坑。SK 3と重複。	縄文前期中葉
SK - 17	N - 53° -W	144 × <122>	27	不整楕円形	逆台形	縄文土器(諸磯b等)		縄文中期後葉
SK - 18	N - 83° -W	126 × 105	5	楕円形	浅皿状	縄文土器(中期後葉)、弥生土器		弥生時代後期カ
SK - 19	N - 5° - E	92 × 78	19	楕円形	椀状	縄文土器(中期後葉)、土師器		古代
SK - 20	N - 80° - E	126 × 114	46	不整楕円形	椀状	土師器、羽釜	SK 2・5・9と等間隔に並ぶ。	中近世
SK - 21	—	<34> × <14>	9	(楕円形)	逆台形	縄文土器(前期)		中近世
SK - 22	N - 3° - E	72 × 63	6	不整長方形	浅皿状	縄文土器(中期後葉)、土師器		古代
SK - 23	N - 8° - E	76 × 51	46	楕円形	漏斗状	縄文土器(前期後葉・中期後葉) 弥生土器、土師器、磨石	柱穴	古代
SK - 24	N - 0°	65 × 55	33	楕円形	逆凸形		柱穴	古代
SK - 25	N - 4° - E	<114> × 81	52	長方形	箱形	副葬品(須恵器、灰釉壺・段皿)	墓坑	10世紀後半
SK - 26	—	195 × <115>	5	(円形)	浅皿状	縄文土器(諸磯b)		
SK - 27	N - 73° -W	83 × <17>	6	(隅丸長方形)	逆台形	縄文土器(諸磯b獸面把手) 等	新旧関係と覆土から弥生と推測	弥生時代後期カ
SK - 28	N - 29° -E	181 × 122	15	不整楕円形	浅皿状	縄文土器(諸磯b)、石棒カ	SK76より新しい	縄文後期
SK - 29	—	<67> × <32>	16	(不整長方形)	不整形		SK30を壞す	中近世
SK - 30	N - 14° -E	<127> × <60>	30	(隅丸長方形)	不整形			弥生時代後期カ
SK - 31	N - 29° -W	<63> × 67	8	(楕円形)	浅皿状	弥生土器		弥生時代後期カ
SK - 32	—	<55> × <34>	11	(楕円形)	浅皿状	弥生土器	SL 1と接する。	弥生時代後期カ
SK - 33	N - 6° - E	71 × 54	27	楕円形	漏斗状	縄文土器(諸磯b)	柱穴	古代
SK - 34	N - 32° -W	92 × 92	9	円形	浅皿状	縄文土器(諸磯b)、灰釉陶器、磨石		古代
SK - 35	(N - 7° -W)	<71> × 58	57	楕円形	漏斗状	縄文土器(諸c、加E3)、土師器	柱穴	古代
SK - 36	N - 45° -E	165 × 139	36	隅丸長方形	椀状	縄文土器(諸b) RF、被熱円礫		縄文
SK - 37 P - 211	(N - 10° -E)	<102> × 50	37	長方形	逆台形	縄文土器(諸磯a・諸磯b、弥生土器、土師器、須恵器)	柱穴	古代
SK - 38	N - 5° -E	62 × 49	30	楕円形	椀状	縄文土器(中期後葉)、土師器	柱穴	古代
SK - 39	N - 20° -E	61 × 42	40	楕円形	逆台形	土師器、須恵器	柱穴	古代
SK - 40	N - 80° -W	192 × <76>	10	楕円形状	浅皿状			中近世
SK - 41 P - 244	N - 31° -W	(59) × 44	45	楕円形	逆台形	縄文土器(中期)、土師器、須恵器	柱穴	古代
SK - 42	(N - 32° -W)	<66> × 59	52	楕円形	椀状	縄文土器(諸c)、打斧、須恵器	柱穴	古代
SK - 43	N - 6° - E	<36> × 51	28	(楕円形)	逆台形	縄文土器(加E3カ)、土師器	柱穴	古代
SK - 44	N - 81° -E	71 × 65	33	隅丸正方形	椀状	縄文土器(諸b)、中期後葉器台)、土師器、須恵器	柱穴	古代
SK - 45	N - 82° -E	80 × 60	33	楕円形	椀状	縄文土器(諸b)、中期後葉器台)、土師器、須恵器	柱穴	古代
SK - 46	欠番							
SK - 47	N - 71° -W	119 × 86	45	楕円形	逆台形	縄文土器(諸c)、打斧、須恵器	柱穴	古代
SK - 48	N - 67° -W	62 × 52	45	楕円形	椀状	縄文土器(諸c、加E3)、須恵器	柱穴	古代
SK - 49 (P - 215)	—	73 × <24>	10	(楕円形)	浅皿状	縄文土器(中期)、土師器	柱穴	古代
SK - 50	N - 22° -E	71 × (60)	54	(楕円形)	逆台形	縄文土器(加E2~E3)、須恵器	柱穴	古代
SK - 51	N - 32° -E	135 × (111)	15	楕円形	逆台形	須恵器		古代
SK - 52	N - 74° -W	<39> × 56	50	楕円形	漏斗状	縄文土器(有尾、諸a、諸b)、弥生土器	柱穴	古代
SK - 53	N - 20° -E	70 × 48	44	不整楕円形	逆台形	縄文土器(中期後葉)、須恵器	柱穴	古代
SK - 54	N - 45° -W	(88) × (72)	48	不整方形	椀状	五領ヶ台、土師器	柱穴	古代
SK - 55	N - 8° -E	50 × (39)	18	楕円形	逆台形	小片	SI - 7柱穴	縄文中期後葉

第5表 土坑一覧表② [単位: m]

遺構名	主軸方位	長軸×短軸	深さ	平面形	断面形	遺物	所見	時期
SK-56	N-81°-E	85×68	70	不整長方形	逆台形	縄文土器(中期後葉)、弥生土器、須恵器	柱穴	古代
SK-57	N-10°-W	<71>×63	35	不整形	椀状	土師器	柱穴	古代
SK-58	(N-76°-W)	<56>×<42>	2	隅丸長方形	箱形	縄文土器(加E3)、土師器	柱穴	古代
SK-59a	N-32°-W	69×47	24	(楕円形)	椀状	縄文土器(加E3・4)須恵器		古代
SK-59b	N-12°-E	61×46	26	(楕円形)	椀状			古代
SK-60	-	<87>×<36>	20	(楕円形)	逆台形	縄文(諸a・b、加E3)、土師器	柱穴	古代、西壁
SK-61	N-51°-E	77×70	12	楕円形	箱形	縄文土器(加E3)、土師器		古代、北西隅
SK-62	欠番							
SK-63	欠番							
SK-64	N-69°-W	90×<34>	22	(隅丸長方形)	浅皿状	土師器、須恵器		古代、北東壁
SK-65	N-32°-E	83×55	5	不整形	浅皿状			中近世
SK-66	N-43°-W	<37>×<39>	43	(楕円形)	箱形		柱穴	古代、南壁
SK-67	欠番							
SK-68	N-71°-W	57×(57)	11	楕円形	浅皿状		SK76より新しい	縄文後期
SK-69	N-15°-E	51×39	8	長方形	浅皿状		SK76より新しい	縄文後期
SK-70	N-29°-W	114×71	25	(楕円形)	逆台形			縄文中期後葉
SK-71	N-46°-W	<228>×<83>	17	(長楕円形)	浅皿状	縄文土器(諸磯b、加E4)		縄文中期後葉
SK-72	N-71°-E	<82>×103	58	楕円形	箱形	縄文土器(諸磯b、諸磯c)、偏平自然円礫(抱石葬)	墓坑と推測	縄文中期後葉
SK-73	N-59°-W	69×52	47	楕円形	逆台形		柱穴	古代
SK-74	(N-5°-E)	<47>×55	20	(不整楕円形)	逆台形	縄文土器	柱穴	古代、西壁
SK-75	N-7°-W	<61>×<37>	1	(楕円形)	逆台形	縄文土器(諸磯c、加E3)		縄文中期後葉
SK-76	N-7°-E	234×64	14	長楕円形	浅皿状	縄文土器(諸磯b、堀1、堀2)	墓坑と推測	縄文後期前葉
SK-77	N-84°-W	<69>×<62>	16	(楕円形)	浅皿状	黒曜石チップ		縄文前期後葉
SK-78	N-11°-E	<136>×<75>	8	(楕円形)	浅皿状	剥片、RF、黒曜石チップ	墓坑と推測	縄文後期前葉
SK-79	-	<72>×<107>	13	(隅丸方形)	浅皿状	黒曜石剥片		縄文前期後葉
SK-80	-	<197>×<136>	12	(隅丸方形)	浅皿状	縄文土器(諸磯b)、剥片		縄文前期後葉
SK-81	N-50°-E	(161)×<147>	46	不整楕円形	逆台形	縄文土器(諸磯b、諸磯c)、礫器、稜磨石、凹石、黒曜石チップ		縄文前期後葉
SK-82	N-14°-W	<69>×<117>	25	(楕円形)		縄文土器(黒浜、諸磯b)、石錐		縄文前期後葉
SK-83	N-53°-W	123×90	15	隅丸長方形	浅皿状	縄文土器(諸磯b)		縄文前期後葉
SK-84	-	<95>×<92>	19	(楕円形)	浅皿状	縄文土器(黒浜か)		縄文前期後葉
SK-85	-	<63>×<60>	18	(円形)	浅皿状	縄文土器(前期)		縄文前期後葉
SK-86	-	152×<84>	24	(楕円形)	浅皿状	縄文土器(有尾、諸磯b)、有縁石皿		縄文前期後葉
SK-87	-	149×<78>	38	(不整楕円形)		P-300を含む		縄文前期後葉

第6表 ピット一覧表① [単位: m]

遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-01	60×34	19	不整形		中近世
P-02	31×27	11	楕円形		中近世
P-03	60×34	25	楕円形	縄文(前期中葉)	中近世
P-04	<26>×37	25	(楕円形)		中近世
P-05	<38>×34	23	(楕円形)		中近世
P-06	40×27	14	楕円形		中近世
P-07	32×29	15	円形		中近世
P-08	37×24	10	楕円形		中近世
P-09	69×32	12	不整楕円形	縄文(前期後葉)	中近世
P-10	<35>×23	11	(隅丸長方形)		中近世
P-11	<19>×25	7	(楕円形)		中近世
P-12	48×35		楕円形		中近世
P-13	<34>×<25>	24	(楕円形)		中近世
P-14	<33>×<20>	16	(楕円形)		中近世
P-15	44×31	30	楕円形		中近世
P-16	47×43	31	楕円形	縄文(中期後葉)、須恵器、羽釜	中近世
P-17	52×43	23	不整形	土師器	中近世
P-18	58×31	5	不整楕円形		中近世
P-19	44×32	7	不整楕円形	土師器	中近世
P-20	46×34	10	不整形		中近世
P-21	27×24	6	不整方形		中近世
P-22	45×17	6	楕円形	2基重複	中近世
P-23	23×20	5	楕円形		中近世
P-24	24×20	5	楕円形	縄文不明	中近世

遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-25	26×23	10	円形		中近世
P-26	23×20	6	楕円形		中近世
P-27	23×19	4	楕円形		中近世
P-28	21×21	1	方形		中近世
P-29	18×15	5	楕円形		中近世
P-30	<31>×28	4	(楕円形)		中近世
P-31	24×21	11	楕円形		中近世
P-32	38×33	5	楕円形	土師器	中近世
P-33	27×20	10	楕円形		中近世
P-34	55×27	5	不整形		中近世
P-35	欠番・搅乱				
P-36	21×21	5	円形		中近世
P-37	34×29	26	不整円形	弥生土器、柱痕	弥生カ
P-38	45×34	8	楕円形	縄文(加E4)、弥生土器、須恵器	古代
P-39	欠番				
P-40	<14>×<19>	9	(楕円形)	土師器	古代
P-41	33×33	12	円形		古代
P-42	<32>×27	24	不整円形	縄文土器(諸磯c)	縄文
P-43	57×(44)	(30)	隅丸方形		古代
P-44	<29>×34	6	(楕円形)		古代
P-45	<18>×28	35	(楕円形)	弥生土器、柱痕	弥生カ
P-46	25×22	12	方形	縄文土器(前期中葉)、弥生土器	古代
P-47	19×11	3	楕円形		中近世

第7表 ピット一覧表② [単位: m]

遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期	遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-48	24 × 22	18	(楕円形)	柱痕	古代	P-102 (SK50)	(60 × 51)	70	隅丸方形	縄文(中期後葉)、土師器、柱痕	古代
P-49	38 × 27	12	(楕円形)		古代	P-103	33 × 22	37	楕円形		古代
P-50	<30> × 34	19	(楕円形)		古代	P-104a <36> × <23>	9	(隅丸長方形)		古代	
P-51	36 × 34	12	楕円形	黒曜石剥片	古代	P-104b <26> × <19>	9	(楕円形)		古代	
P-52	32 × 31	13	方形		中近世	P-105 <32> × <24>	9	(楕円形)	縄文土器(中期後葉)、土師器	古代	
P-53	50 × 36	33	楕円形		中近世	P-106	18 × 13	11	略円形		古代
P-54	45 × 41	6	楕円形		中近世	P-107	58 × <26>	22	(楕円形)	縄文土器(中期SI-7)	縄文
P-55	78 × <57>	37	(楕円形)	縄文土器(諸磯c)、土師器	古代	P-108	23 × 18	10	円形	柱痕	古代
P-56	<53> × 56	12	(楕円形)	縄文不明、磨・凹・叩石	古代	P-109 (48) × 38	12	楕円形		古代	
P-57	27 × 24	11	楕円形		中近世	P-110 <37> × 24	13	楕円形		古代	
P-58a	<23> × 30	22	(不整楕円形)	縄文土器(諸磯b)	古代	P-111 <52> × 48	18	(楕円形)	SI-7	縄文	
P-58b	<20> × 32	22	(不整楕円形)		古代	P-112 45 × 39	17	不整楕円形		古代	
P-59	28 × 25	25	楕円形	柱痕	古代	P-113 欠番					
P-60	38 × 28	15	楕円形	被熟礫	弥生カ	P-114 <23> × <12>	24	(楕円形)		古代	
P-61	<19> × 32	3	(円形)	弥生土器	弥生カ	P-115 (88) × 48	25	(楕円形)	縄文土器(加E3)、土師器	古代	
P-62	38 × 28	4	楕円形		古代	P-116 29 × 26	29	円形		古代	
P-63	36 × 29	38	楕円形	柱痕	古代	P-117 36 × 30	10	楕円形	土師器	古代	
P-64	<28> × 23	15	(楕円形)	柱痕	古代	P-118 <32> × 41	27	(楕円形)	縄文土器(諸磯c)	古代	
P-65	37 × 35	8	円形		古代	P-119 (50) × 48	30	不整形	縄文不明、柱痕	古代	
P-66	33 × 22	13以上	楕円形	縄文土器	古代	P-120 45 × 40	15以上	楕円形	縄文不明、土師器、柱痕	古代	
P-67	25 × 24	8以上	不整形円形		古代	P-121 48 × 35	15	楕円形	縄文土器(中期器台、十三菩提)	縄文	
P-68	<26> × 29	(19)	(楕円形)		古代	P-122 26 × 25	28	略円形	柱痕	古代	
P-69	34 × <24>	21以上	(楕円形)	縄文(前期後葉)	古代	P-123 51 × 33	20	楕円形	縄文土器(前期諸磯)、土師器、黒曜石RF、柱痕	古代	
P-70	54 × 46	34	楕円形	縄文不明、被熟礫	古代	P-124a 76 × 51	17	楕円形	加E3、石錐SI-7	縄文	
P-71	27 × (22)	19	円形		縄文カ	P-124b (30) × (20)	(17)	(円形)	弥生土器、須恵器	古代	
P-72	28 × 24	22	不整形円形	縄文土器(諸磯b)	古代	P-125 42 × 38	23	不整形形	不明土器	縄文	
P-73	32 × 30	6	楕円形	縄文土器(中期後葉)	古代	P-126 56 × 25	6	不整楕円形		中近世	
P-74	欠番					P-127 26 × <14>	(10)	(楕円形)		中近世	
P-75	36 × 26	9	楕円形	柱抜取	古代	P-128 34 × 19	14	楕円形		中近世	
P-76	24 × 23	22	方形	柱痕	古代	P-129 20 × 20	35	円形		中近世	
P-77	45 × 36	12	楕円形	縄文土器(加E4)、弥生土器、柱痕	弥生カ	P-130 <18> × 37	35	(楕円形)		古代	
P-78	<23> × 20	6	(楕円形)		中近世	P-131 41 × 21	15	楕円形	SK76より古い	縄文	
P-79	<24> × 21	5	(楕円形)		中近世	P-132 25 × 18	7	楕円形	剥片	中近世	
P-80	34 × 24	4	不整形円形		中近世	P-133 23 × 23	6	楕円形	須恵器	中近世	
P-81	39 × 38	50	不整楕円形	縄文土器(加E3)、土師器、柱痕	古代	P-134 24 × 19	30	楕円形	縄文土器(前期中葉)、弥生土器	古代	
P-82	欠番					P-135 54 × 27	15	不整楕円形		中近世	
P-83	49 × 42	28	楕円形	縄文土器(中期後葉)、須恵器	古代、柱痕	P-136 22 × 19	5	楕円形	縄文不明、不明土器	中近世	
P-84	49 × 37	25	楕円形	土師器	古代	P-137 20 × 20	14	不整形形	土師器、黒曜石	古代	
P-85	46 × 32	30以上	不整形円形		古代	P-138 30 × 22	8	隅丸長方形	縄文土器(諸磯b)、土師器	中近世	
P-86	35 × 27	(30)	楕円形	縄文土器(加E3)	古代	P-139 35 × 23	10	楕円形		中近世	
P-87	欠番					P-140 <23> × 6	8	(楕円形)		中近世	
P-88	45 × 43	20	不整形円形	縄文(諸磯c、中期後葉)、土師器	古代	P-141 <21> × 26	5	(楕円形)	土師器	古代	
P-89	35 × 29	15	楕円形		古代	P-142 25 × 24	22	円形	土師器、叩石	古代	
P-90	31 × <27>	21	(円形)	縄文(中期後葉)、柱痕	古代	P-143 19 × 17	7	楕円形		中近世	
P-91	31 × 30	10以上	円形	弥生土器	弥生カ	P-144 <33> × 29	16	(楕円形)	土師器	中近世	
P-92	51 × 36		不整形円形		古代	P-145 <20> × <27>	16	(楕円形)	縄文土器(諸磯b)	古代	
P-93	26 × 25		楕円形	縄文不明、柱痕	古代	P-146 50 × <15>	6	(隅丸長方形)	縄文土器(諸磯b)		
P-94	34 × 24	22	楕円形	縄文(前期後葉)、中期後葉)、土師器、須恵器	古代P-186と同一カ	P-147 54 × 31	21	不整楕円形	縄文土器(諸bカ)	古代	
P-95	51 × <25>	18	(楕円形)	縄文土器、土師器、須恵器、柱痕	古代	P-148 <41> × 38	10以上	(楕円形)		古代	
P-96	36 × <18>	20	(楕円形)	縄文土器、土師器、須恵器	古代	P-149 27 × 21	9	楕円形		古代	
P-97a	25 × 20	16	略円形	SI-7	縄文	P-150 26 × 24	17	楕円形		古代	
P-97b	25 × 21	34	略円形	SI-7	縄文	P-151 <25> × 21	7	(不整楕円形)	礫	古代	
P-98	39 × 36	33	円形	縄文不明、土師器	古代	P-152 8			弥生土器	弥生カ	
P-99	<21> × 26		(楕円形)	柱痕	古代	P-153 24 × 17	21	隅丸長方形		古代	
P-100	51 × 49	30	不整形	縄文(中期後葉)、土師器、柱痕	古代、	P-154 24 × 22	10	楕円形		古代	
P-101	58 × 42	15	不整形方	縄文土器(中期後葉)、柱痕	古代	P-155 38 × 30	29	楕円形	焼礫、磨斧	古代	
						P-156 82 × 52	28	楕円形	SI-1を切る	古代	

第8表 ピット一覧表③ [単位: m]

遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-157	<41> × 32	13	(楕円形)		古代
P-158	34 × 24	19	楕円形		古代
P-159	21 × 19	14	楕円形		古代
P-160	欠番				
P-161	—	13	(円形)	SI-1断面のみ	古代
P-162 (P-263)	45 × <27>	35	(楕円形)	須恵器、羽釜 SI-1に切られる	古代
P-163	32 × 17	9	楕円形		中近世
P-164	22 × 18	19	楕円形		古代
P-165	32 × 27	12	(不整方形)		古代
P-166	欠番				
P-167	<33> × 25	7	円形		古代
P-168	<27> × 30	14	(楕円形)		古代
P-169	<14> × 27	9	(楕円形)		古代
P-170	<23> × 28	7	不整形		古代
P-171	<43> × 23	10	不整形		古代
P-172	46 × 39	56	不整楕円形	弥生土器	古代
P-173	<39> × 34	7	不整形		古代
P-174	33 × 30	8	楕円形		古代
P-175	20 × 15	(15)	略円形	SI-1を切る	古代
P-176	<37> × 29	14	(楕円形)	縄文土器、須恵器	古代
P-177	37 × 34	26	方形	土師器	古代
P-178	23 × 18	6	楕円形	柱痕	古代
P-179	欠番				
P-180	34 × 22	30	楕円形	土師器、須恵器 柱痕	古代
P-181	<20> × <34>	40	(楕円形)		古代
P-182	27 × <16>	8	(楕円形)		縄文
P-183	22 × <9>	9	(楕円形)		縄文
P-184	30 × 19	10	楕円形	縄文(連弧文)	古代
P-185	36 × 30	21	楕円形		古代
P-186	36 × 26	22	楕円形	縄文土器(諸磯b)	古代
P-187	41 × <28>	12	(楕円形)		古代
P-188	<36> × 37	40	(楕円形)	縄文(諸磯c、中 期後葉)、土師器、 石製紡錘車	古代
P-188・ 189			縄文土器(加E3)、土師器、黒 曜石剥片		古代
P-189	68 × 50	47	楕円形	土師器、須恵器	古代
P-190	<30> × 33	43	(楕円形)	柱痕	古代
P-191	25 × 24	16	円形		古代
P-192	欠番				
P-193	(42) × 37	29	(楕円形)	縄文土器(諸磯a、 諸磯b)、土師器	古代
P-194	50 × 34	53	楕円形		古代
P-195	32 × 27	35以上	楕円形	柱痕	古代
P-196	33 × 22	9	楕円形		縄文
P-197	30 × 26	14	略円形	柱痕	縄文
P-198	21 × 17	13	楕円形		縄文
P-199	58 × 27	14	長楕円形		縄文
P-200	30 × 19	10	不整楕円形		縄文
P-201	23 × 22	13	不整円形		縄文
P-202	49 × 37	8	不整形		縄文
P-203	48 × 36	13	不整形		縄文
P-204	<28> × 39	17	(楕円形)		縄文
P-205	19 × 19	20	円形		古代
P-206	59 × 58	60	隅丸方形	弥生土器、黒曜 石剥片、柱痕	古代
P-207	欠番				
P-208	19 × 15	15	楕円形	縄文土器(中期 後葉)、弥生土器	弥生カ
P-209	79 × 65	50	楕円形	縄文(諸磯c、中 期後葉)、須恵器	古代
P-210	<9> × 24	17	(楕円形)	縄文土器(中期 後葉)、土師器	古代
P-211	82 × 39	51	長楕円形		古代
P-212	41 × <9>	22	(楕円形)	縄文土器(加E3)	中近世
P-213	<32> × 25	15	(楕円形)		古代
P-214	24 × 21	24	楕円形		古代
P-215	<18> × <23>	19	(楕円形)		古代

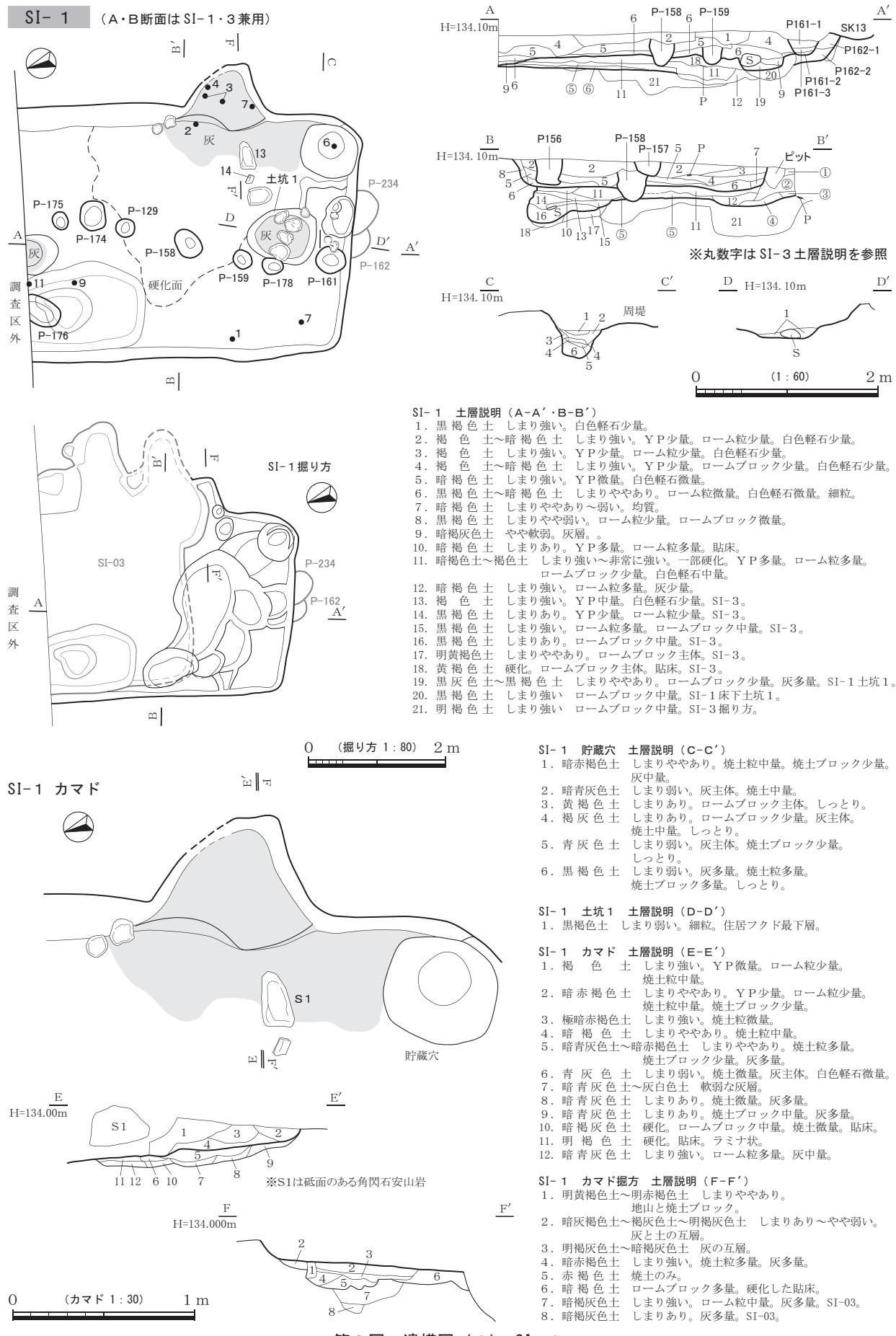
遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期	
P-216	21 × 16	21	楕円形	縄文土器(加E3) 土師器、柱痕	古代	
P-217	38 × 30	32	楕円形	縄文(前期中葉)	古代	
P-218	<29> × 35	52/53	(楕円形)	土師器、柱痕	古代	
P-219	28 × 27	14	円形	P-211より古い	古代	
P-220	21 × 17	26	楕円形		古代	
P-221	<30> × 36	22	楕円形		古代	
P-222	28 × 24	12	楕円形	縄文(十三菩提)	古代	
P-223	33 × (24)	12	楕円形		古代	
P-224	<82> × <68>	29	(隅丸長方形)		古代	
P-225	<55> × <39>	4	(楕円形)		古代	
P-226	45 × 37	40	不整楕円形		古代	
P-227	<27> × 50	41	(楕円形)		古代	
P-228	32 × 26	7	楕円形		縄文	
P-229	31 × 26	45	楕円形	縄文土器(黒浜)、 弥生土器	弥生カ	
P-230	50 × (38)	5	不整方形	縄文土器(諸磯b) 縄文		
P-231	<23> × 41	19	(楕円形)		古代	
P-232	34 × 32	32	略円形	須恵器	古代	
P-233	32 × 27	30	楕円形	縄文不明	縄文	
P-234	55 × 37	28	楕円形	縄文土器(後期)	古代	
P-235	36 × <14>	11	(不整楕円形)	羽釜	古代	
P-236	欠番					
P-237	<53> × <17>	18	(楕円形)		古代	
P-238	61 × 47	40	楕円形	縄文土器(加E 3)、須恵器	古代	
P-239	欠番					
P-240	34 × 31	14	不整方形	柱痕	古代	
P-241	27 × 24	41	不整方形	土師器、柱痕	古代	
P-242	33 × 32	17	楕円形	縄文土器(諸磯、 加E3)、黒曜石 チップ、SI-7	縄文	
P-243	31 × 30	23	円形	柱痕	古代	
P-244	33 × 33	31	円形		古代	
P-245	(37) × (36)	5	(円形)		古代	
P-246	<60> × <18>	25	(楕円形)	縄文土器(諸b、 加E3)、須恵器	古代	
P-247	27 × 18	(33)	楕円形	SI-1掘り方	古代	
P-248	61 × 45	7	不整楕円形	縄文土器(諸磯b、 中期後葉)	縄文	
P-249	37 × 37	30	不整形	羽釜 P-103より古い	古代	
P-250	51 × (39)	13	楕円形	縄文土器(郷土)、 土師器	古代	
P-251	(22) × 20	55	円形		古代	
P-252	<33> × 51	12	(不整方形)	SI-7	縄文	
P-253	43 × 33	31	(楕円形)	柱痕	古代	
P-254	<45> × 52	13	不整形		古代	
P-255	<50> × <74>	13	(楕円形)	縄文(中期後葉)	古代	
P-256	58 × 50	59	楕円形	縄文土器(諸b)	縄文	
P-257	(23) × 19	10	(楕円形)	土師器	中近世	
P-258	30 × 17	8	楕円形	縄文不明	中近世	
P-259	51 × <33>	13	楕円形		古代	
P-260	<12> × 27	13	(楕円形)		古代	
P-261	27 × <18>	24	(円形)		古代	
P-262	欠番					
P-263	P162同一				古代	
P-264	42 × 24	10	楕円形	縄文土器(前期 中葉、中期後葉)	縄文	
P-265	欠番					
P-266	<33> × <30>	7	不明	縄文(諸b、有尾) SI-7	縄文	
P-267	47 × 36	12	隅丸長方形	縄文(諸c、加E3)		
P-268	(SK-51)	78 × 55	33/25/ 17	(楕円形)	3基重複カ	縄文
P-269	<29> × 26	12	楕円形	黒曜石チップ	古代	
P-270	<51> × <8>	11	(楕円形)		古代	
P-271	23 × 18	23	楕円形	縄文(加E3)、 底面に径21cmの 基礎板偏平礫	古代	

第9表 ピット一覧表④ [単位:m]

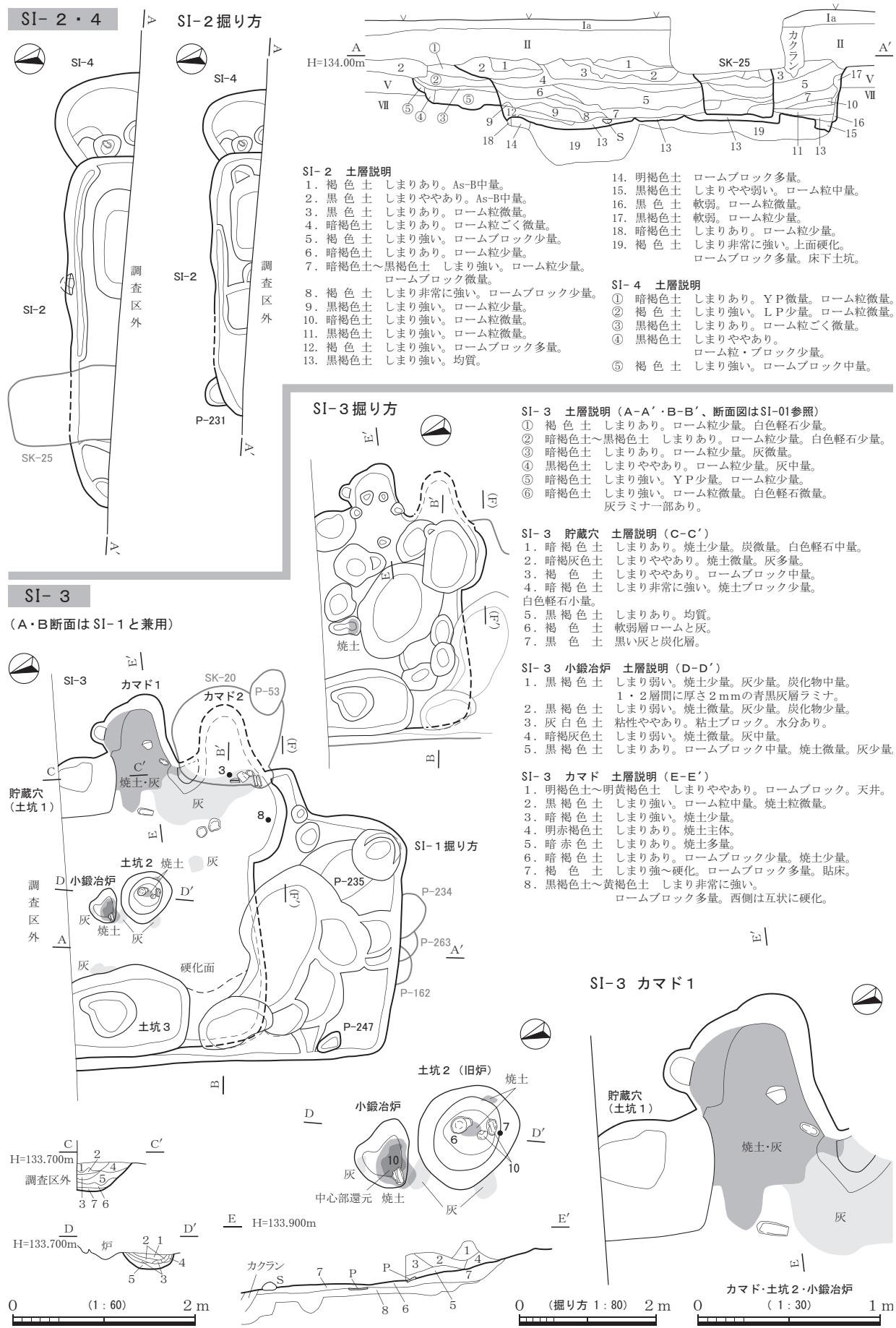
遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期	遺構名	長軸×短軸	深さ	平面形	遺物・所見	時期
P-272	34×28	15	楕円形	縄文土器(諸c、中期後葉)	縄文	P-293	欠番				
P-273	28×24	20	不整円形		古代	P-294	<20>×<10>	12	(楕円形)		古代
P-274	46×(38)	8	不整長方形	加E4、土師器	縄文	P-295	欠番				
P-275	36×28	13	隅丸長方形		古代	P-296	欠番				
P-276	(25)×23	11	(楕円形)	SI-7	縄文	P-297	欠番				
P-277	33×(31)	20	(円形)	縄文(前期中葉、諸磯b)、柱痕	古代	P-298	欠番				
P-278	44×36	25	不整形	縄文土器(諸磯b)	古代	P-299	欠番				
P-279	27×21	29	楕円形		古代	P-300	28×23	(60)	楕円形	縄文土器(諸b)、被熟した角閃石安山岩(人頭大)SK-87と重複	縄文
P-280	欠番					P-301	(70)×69	25	(楕円形)		縄文
P-281	63×<31>	11	不整楕円形	縄文土器(諸b) 不明土器	古代	P-302	<68>×<47>	72	(楕円形)		縄文
P-282	欠番					P-303	76×72	51	(隅丸方形)		縄文
P-283	欠番					P-304	43×24	29	楕円形	加E3	縄文
P-284	欠番					P-305	60×54	23	円形		縄文
P-285	欠番					P-306	54×54	33	円形		縄文
P-286	53×53	6	円形	不明土器、多孔石	縄文	P-307	欠番				
P-287	62×(56)	68	(楕円形)	縄文土器(諸磯b)	縄文	P-308	32×17	9	楕円形		中近世
P-288	<46>×72	13	(楕円形)		縄文	P-309	32×17	9	楕円形	道路拡張区	古代
P-289	<59>×66	11	(楕円形)		縄文	P-310	32×17	9	楕円形	道路拡張区	古代
P-290	欠番					P-311	32×17	9	楕円形	道路拡張区	古代
P-291	欠番					P-312	32×17	9	楕円形	道路拡張区	古代
P-292	欠番					P-313	32×17	9	楕円形	道路拡張区	古代

第10表 溝跡一覧表 [単位:m]

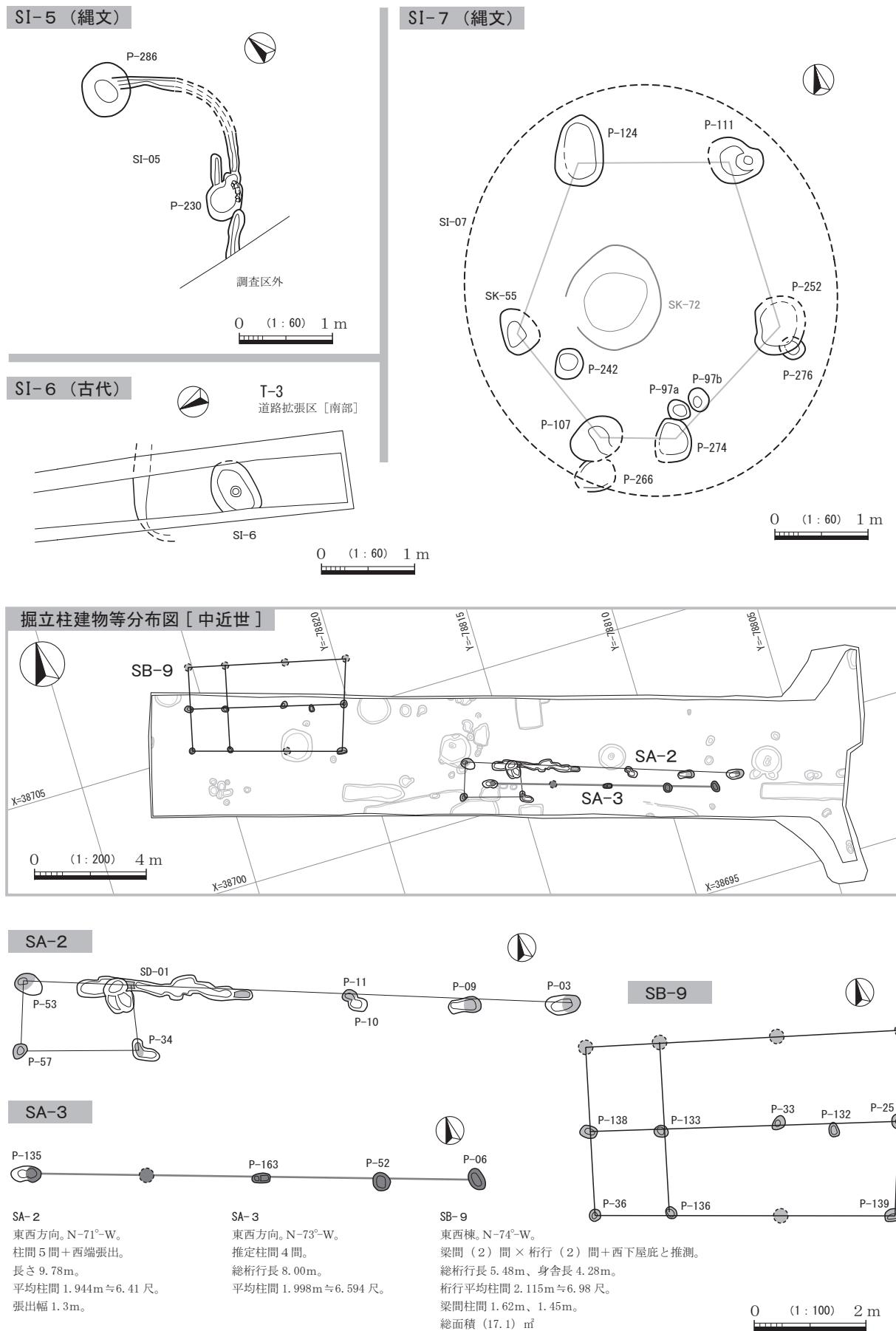
遺構名	走向方位	上端幅×下端幅	深さ	断面形	遺物	所見・時期
SD-01	N-71°-W	24×14	19	箱形	なし	中近世



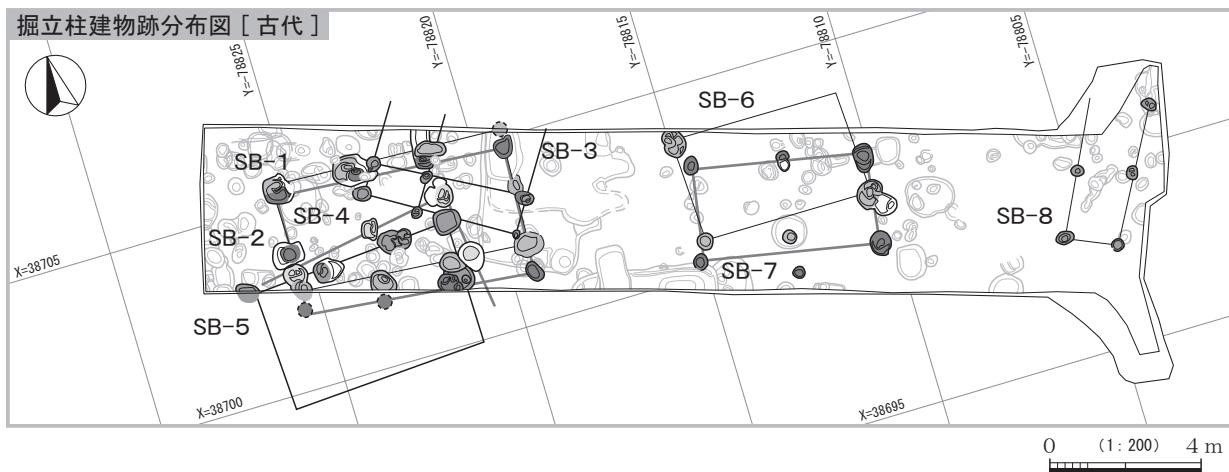
第9図 遺構図(1) SI-1



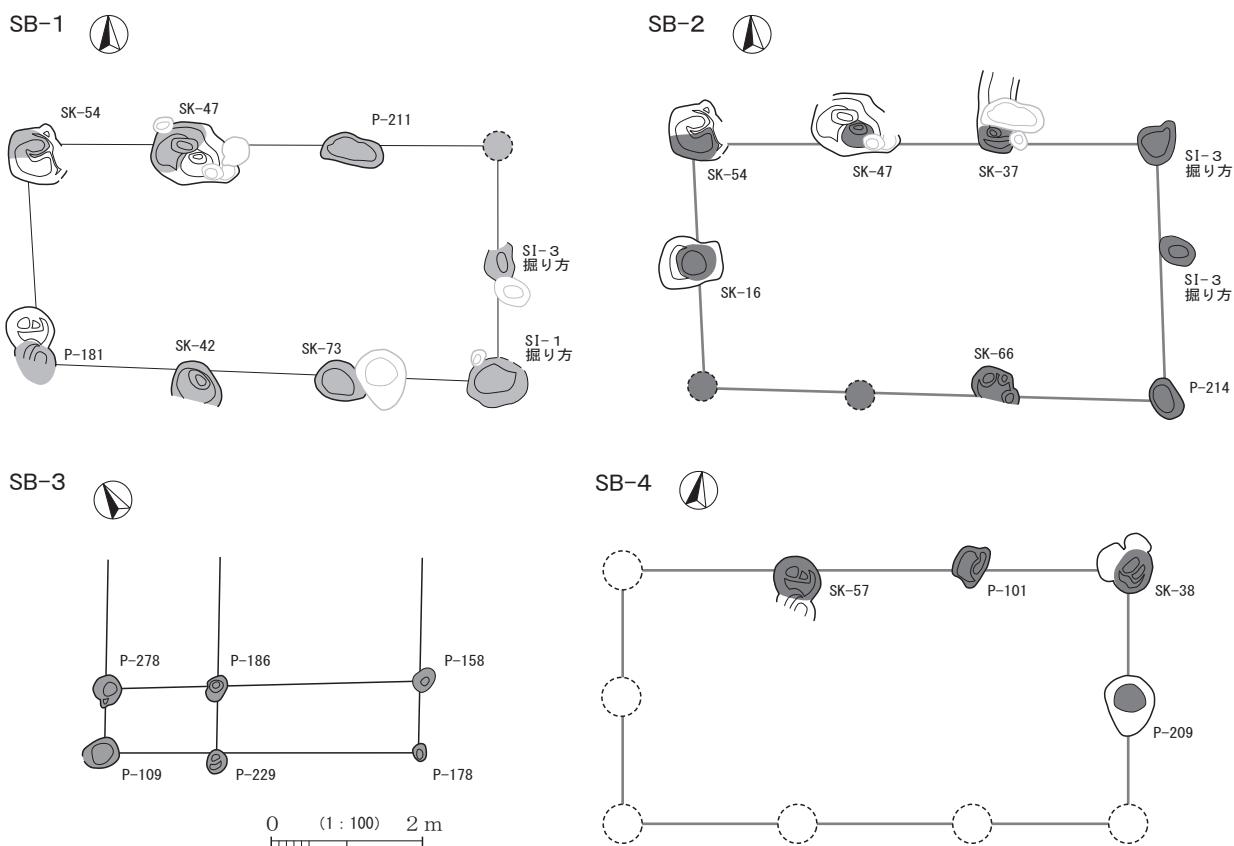
第10図 遺構図(2) SI-2・3・4



第11図 遺構図(3) SI-5・6・7、掘立柱建物跡・柱穴列 [中近世]



掘立柱建物跡個別図 [古代]



SB-1
東西棟。N-88°-W。梁間 1 間・2 間 × 柱行 3 間。
柱行長 6.07・(6.11) m。
柱行平均柱間 2.027m ≈ 6.69 尺。
梁間幅 2.86・(3.12) m。
面積 (18.24) m²

SB-2
東西棟。N-85°-W。梁間 2 間 × 柱行 3 間。
柱行長 6.13m。
柱行平均柱間 2.087m ≈ 6.88 尺。
梁間幅 3.40・(3.28) m。
面積 (20.3) m²

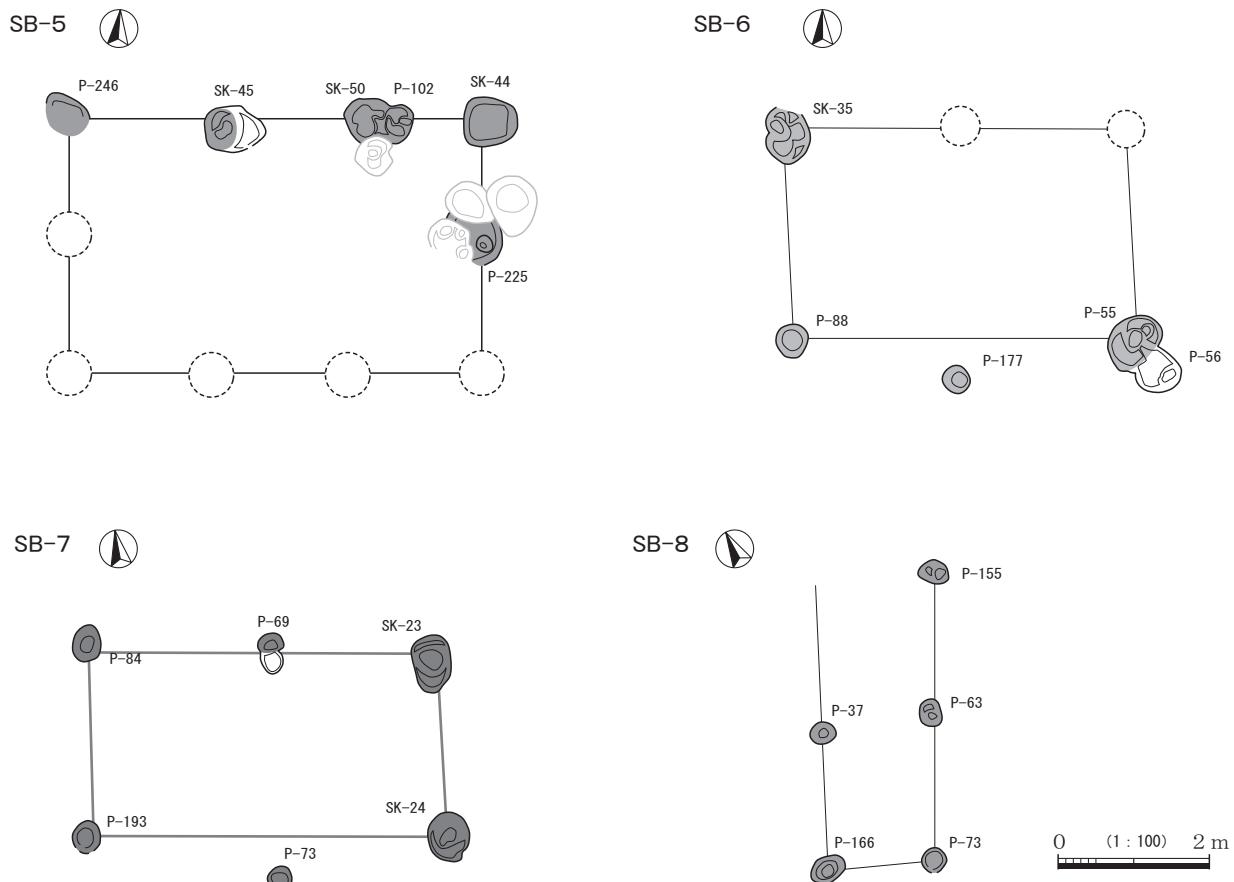
SB-3
南北棟と推測。N-29°-E。
梁間 1 間 + 西下屋庇 × 柱行 1 間以上 + 南下屋庇。
柱行長不明、身舎長不明。
柱行平均柱間不明。
下屋柱行長 0.92m。
梁間幅 2.72m。下屋梁間幅 1.46m。

SB-4
東西棟。N-79°-E。梁間 1 間以上 × 柱行 2 間以上。
柱行長 < 4.50 m。柱行平均柱間 2.25m ≈ 7.425 尺。
梁間幅 < 1.78 m

※() は推定値、< > は残存値

第 12 図 遺構図 (4) 掘立柱建物跡・柱穴列 [古代]

掘立柱建物跡個別図 [古代]



SB-5
東西棟。N-85°-E。
梁間 (2) 間 × 桁行 3 間と推測。
桁行長 5.53m。
桁行平均柱間 1.872m ≈ 6.172 尺。
梁間幅 (3.36)m。
梁間柱間 1.64m ≈ 5.41 尺。
面積 (18.5) m²

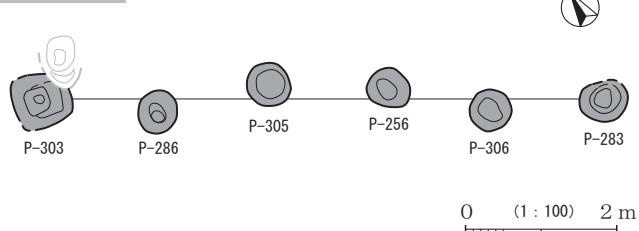
SB-6
東西棟。N-90°。
梁間 1 間 × 桁行 2 間と推測。
桁行長 4.50m。
桁行平均柱間 (2.25)m ≈ 7.425 尺。
梁間幅 2.78m。
面積 (12.5) m²

SB-7
東西棟。N-80°-W。
梁間 1 間 × 桁行 2 間と推測。
桁行長 4.78 • 4.57m。
桁行平均柱間 2.28m ≈ 7.524 尺。
梁間幅 2.31 • 2.56m。
面積 (11.3) m²

SB-8
南北棟。N-30°-E。
梁間 1 間 × 桁行 2 間以上。
桁行長 <3.83>m。
桁行平均柱間 1.852m ≈ 6.11 尺。
梁間幅 1.38m。
面積 <5.3> m²

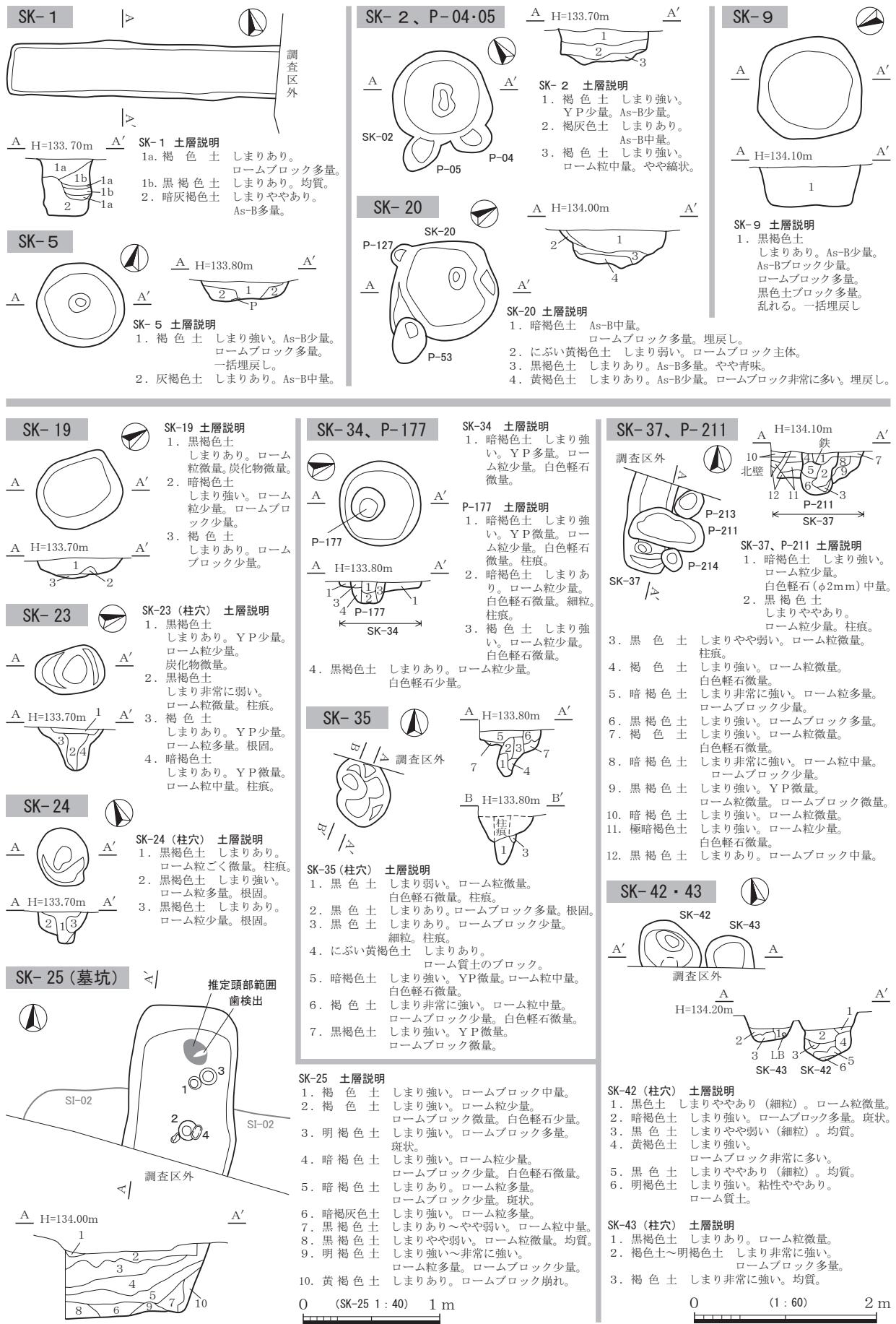
※() は推定値、< > は残存値

柱穴列・SA-1 [縄文]

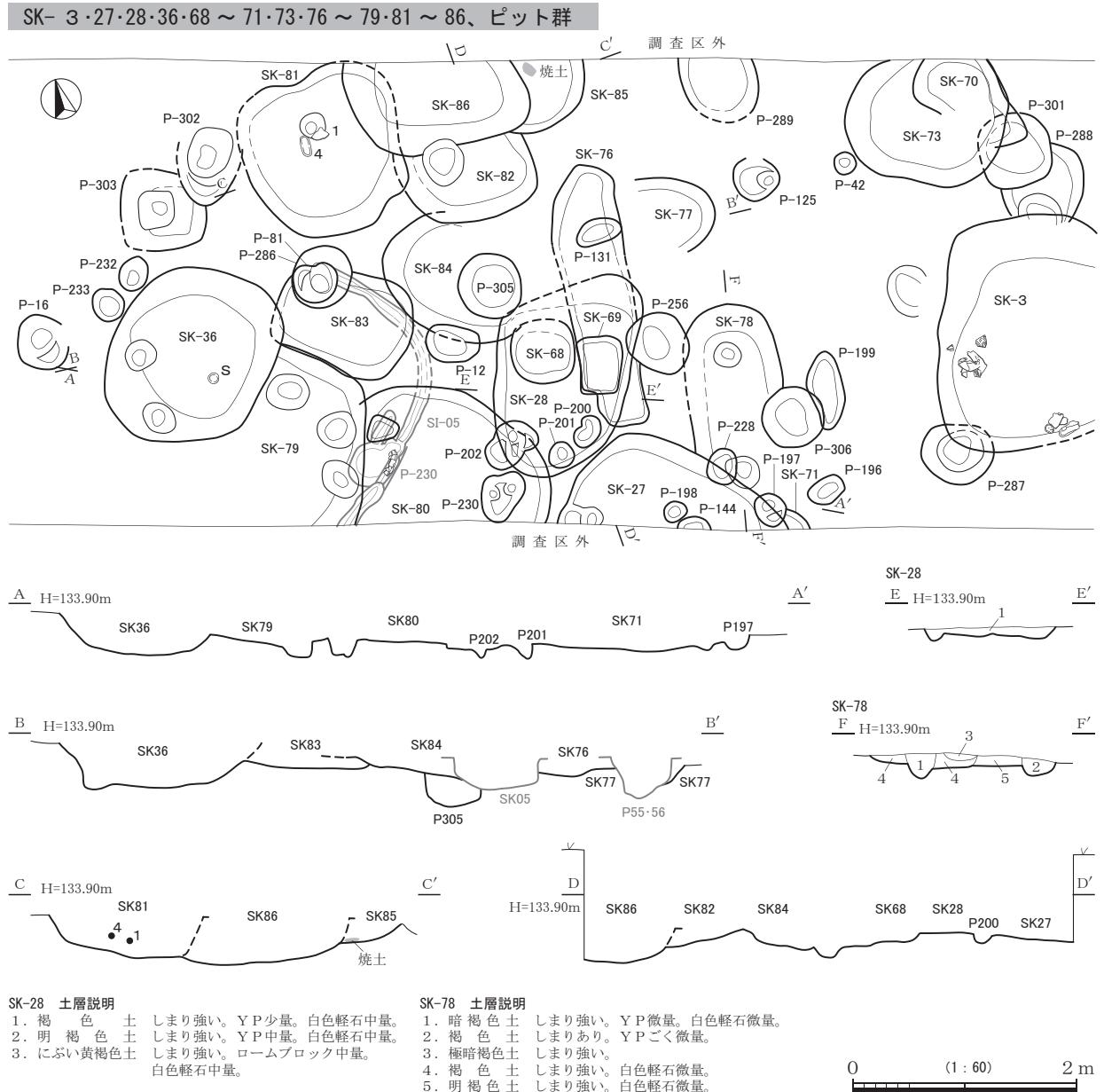
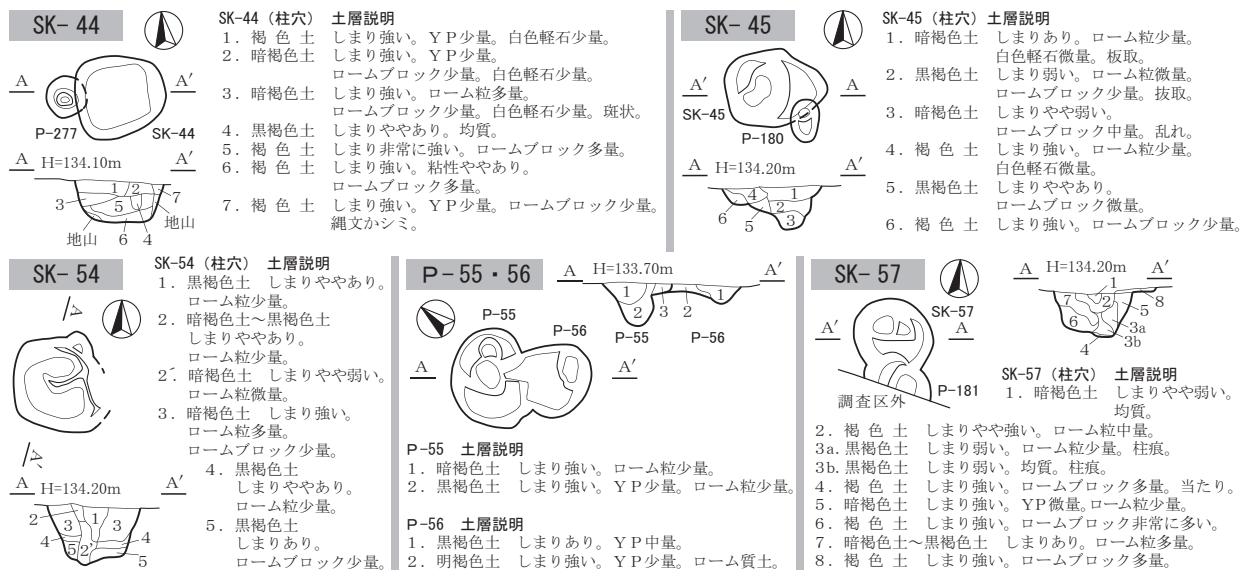


SA-1
主軸方位 N-56°-W。
柱間 5 間。長さ 7.44m。
平均柱間 1.506m。

第 13 図 遺構図 (5) 掘立柱建物跡 [古代]・柱穴列 [縄文]

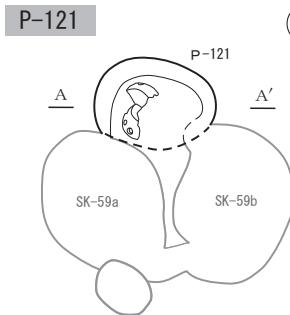
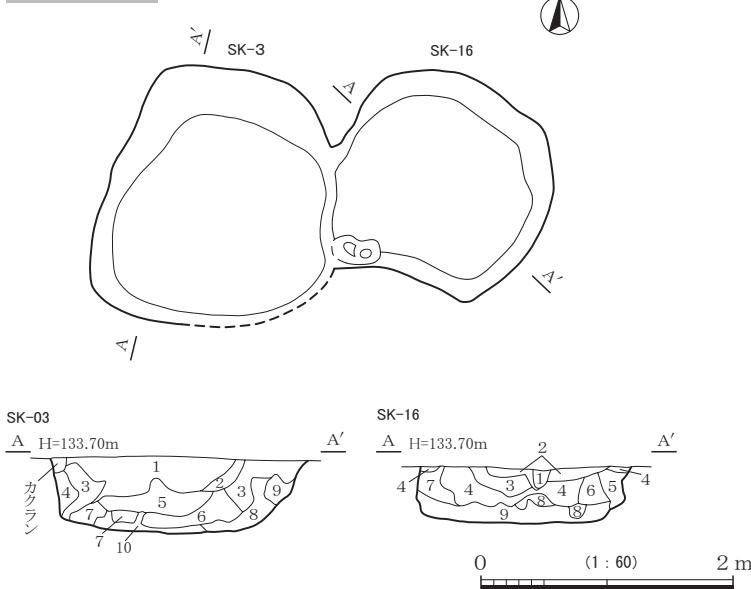


第14図 遺構図(6) 土坑・ピット [中近世・古代]

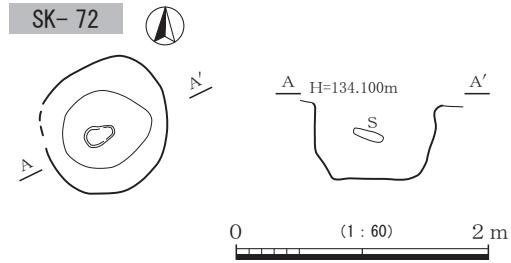


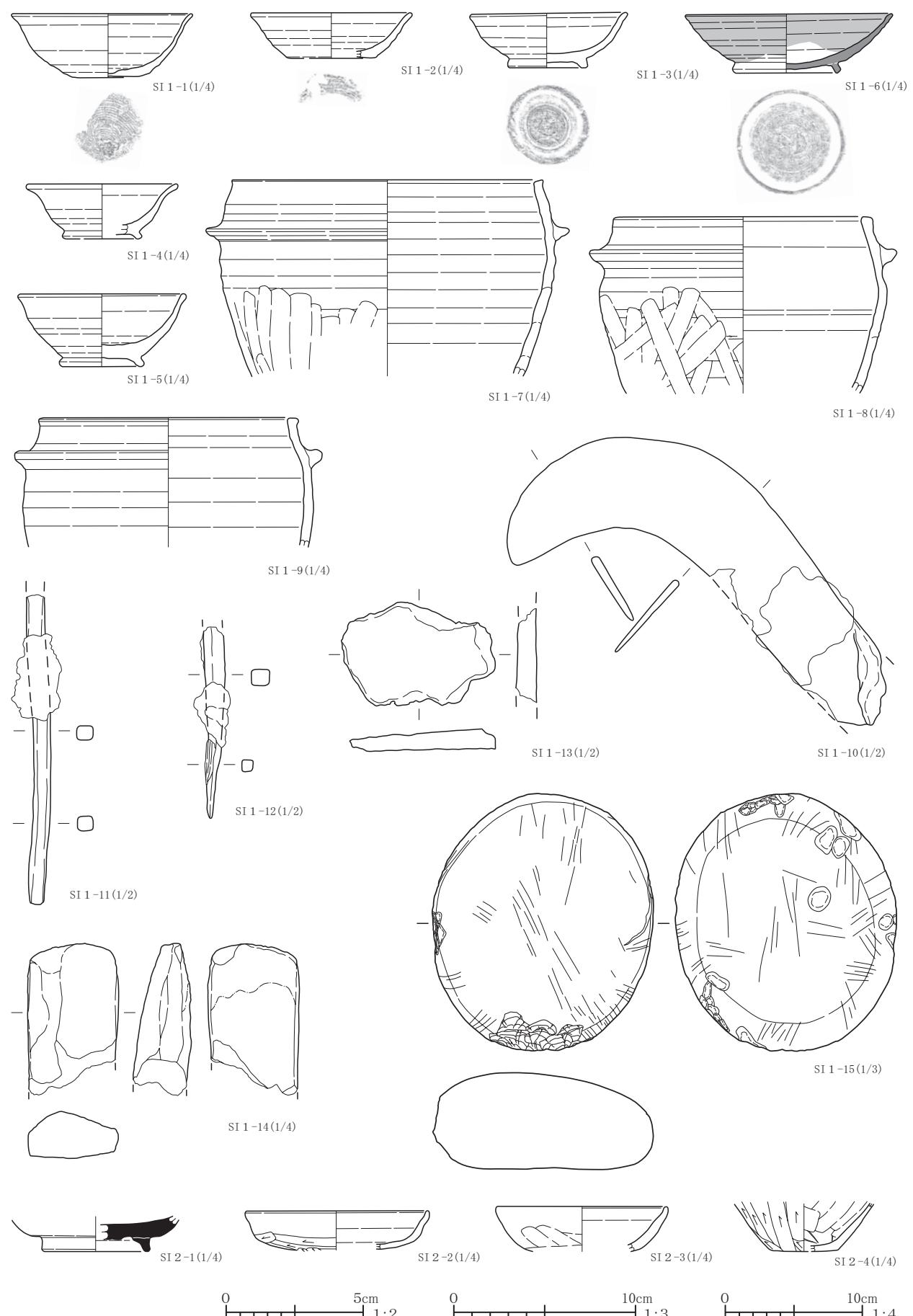
第15図 遺構図(7) 土坑・ピット [古代・縄文]

SK- 3・16

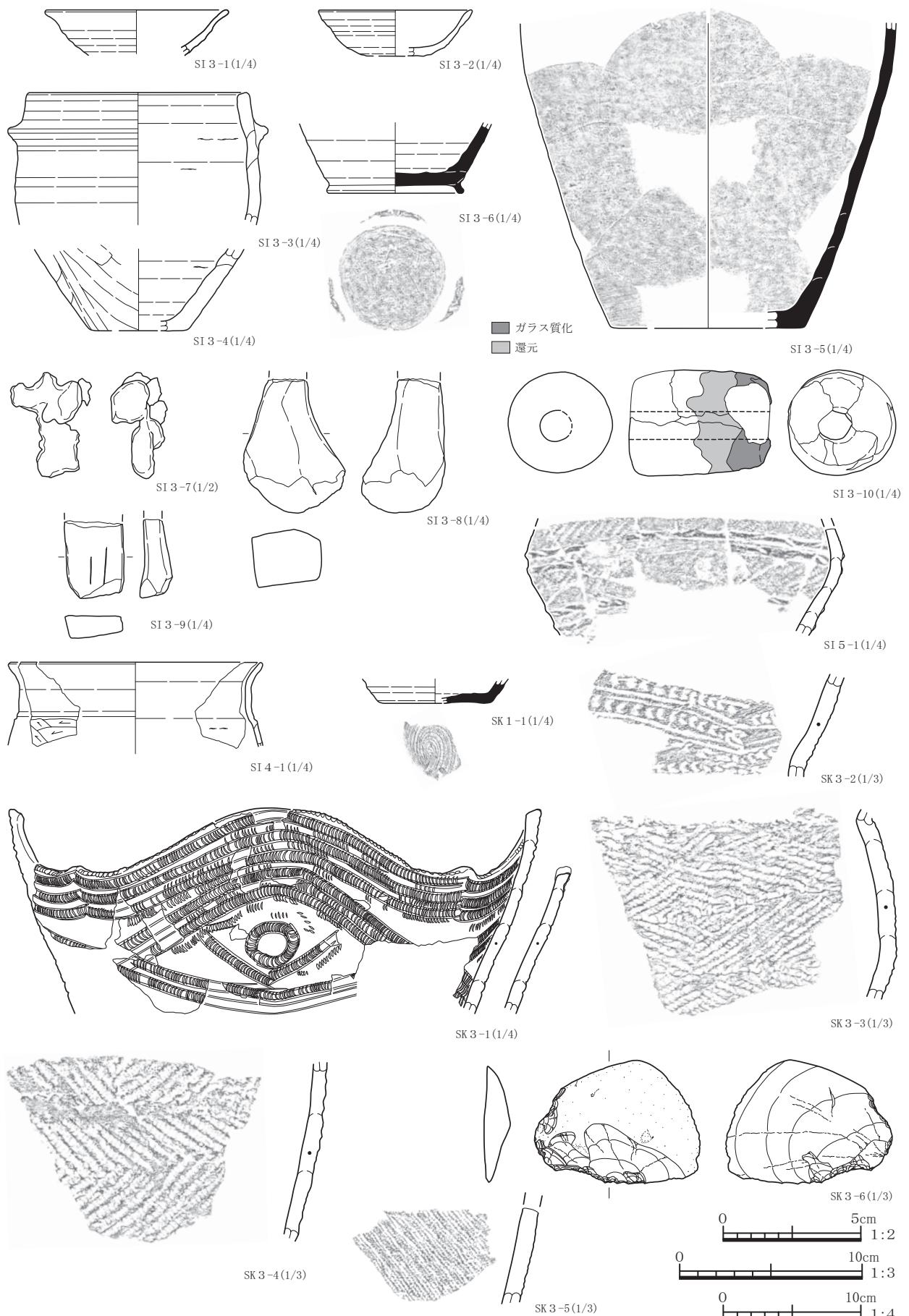


第 16 図 遺構図 (8) 土坑・ピット [縄文]

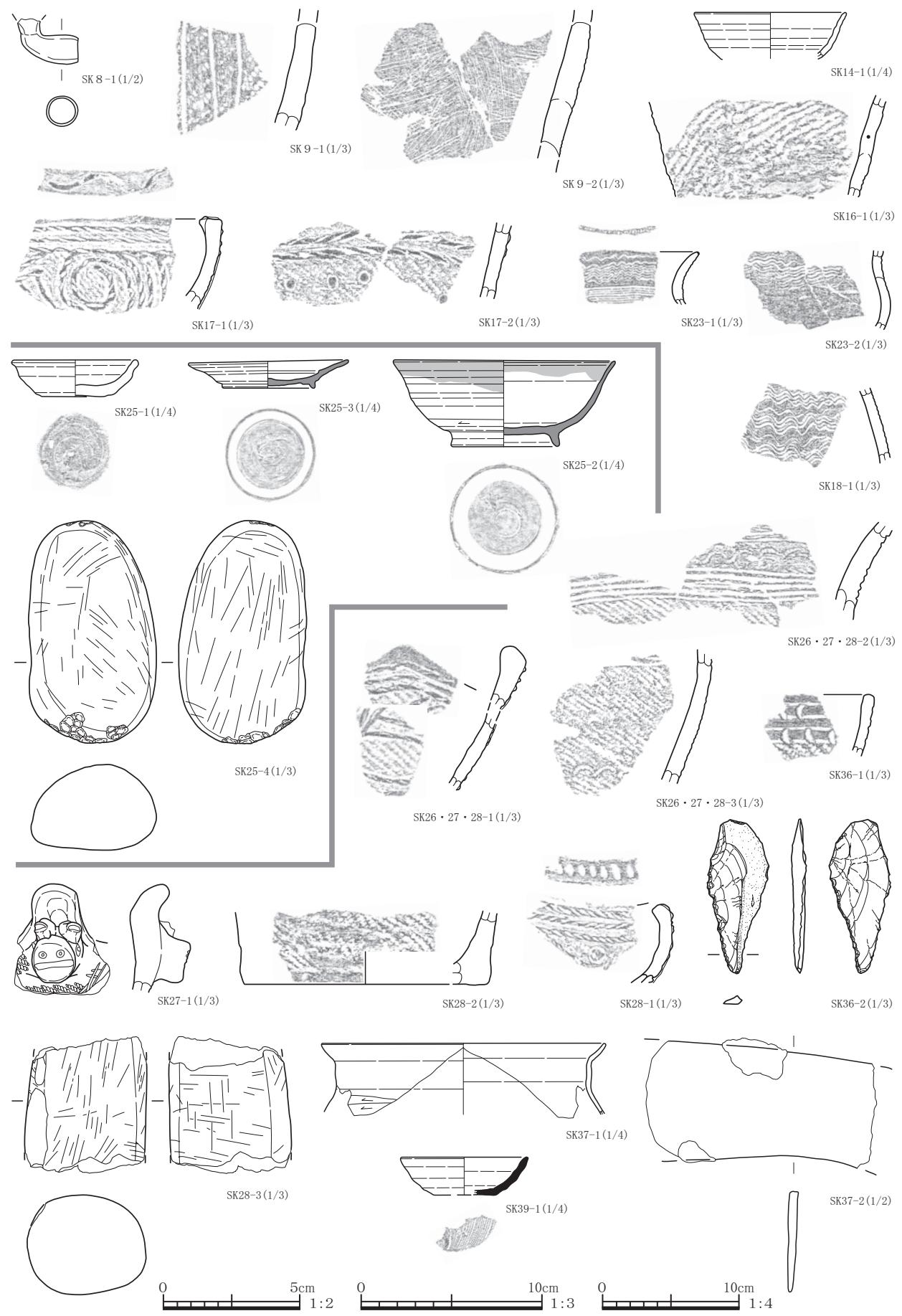




第17図 遺物図(1) SI-1・SI-2



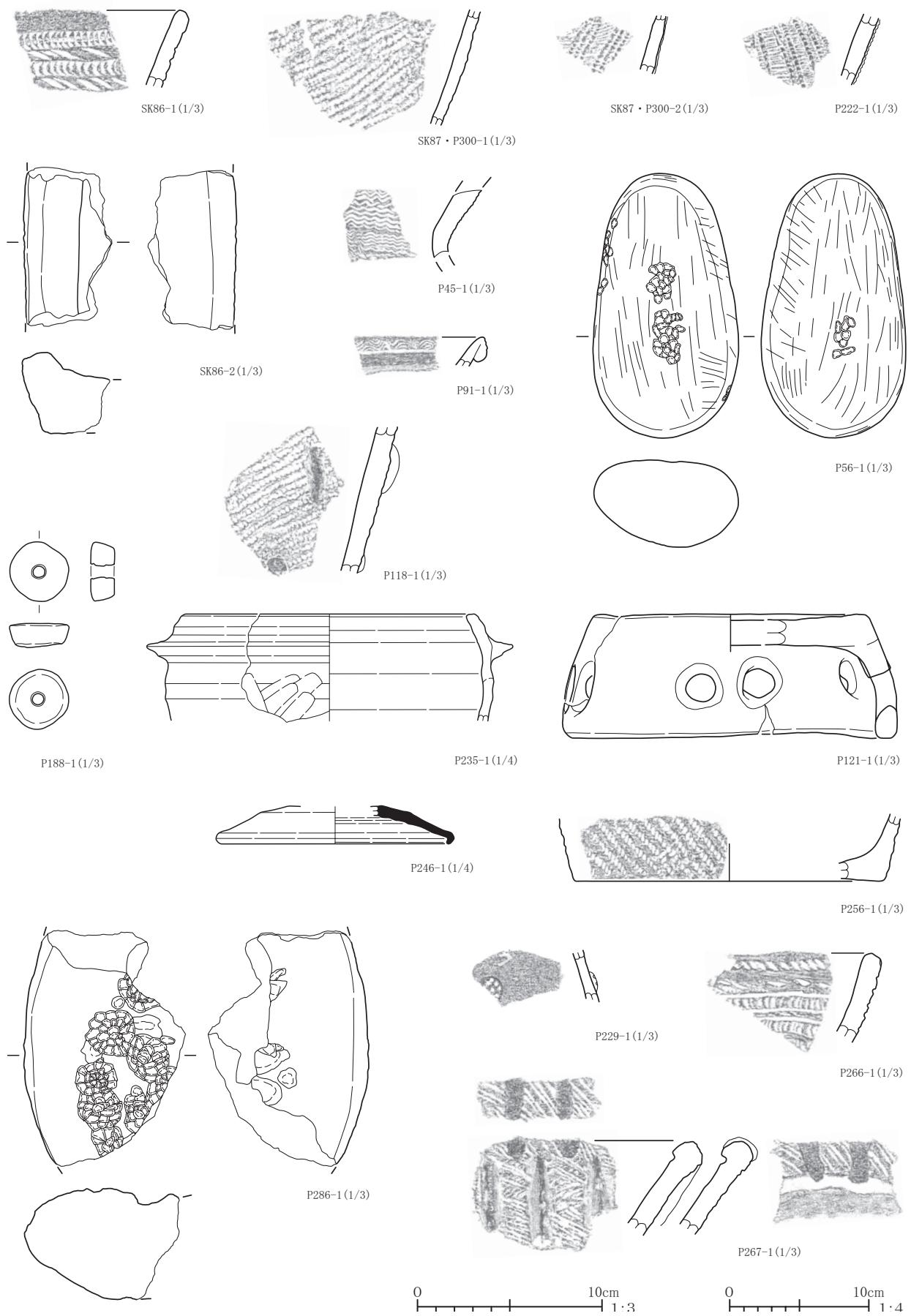
第18図 遺物図（2） SI-3・SI-4・SI-5 / SK-1・SK-3



第19図 遺物図(3) SK-8・9・14・16・17・18・23・25・26・27・28・36・37・39



第20図 遺物図(4) SK-53・56・59・71・75・76・78・81・82



第 21 図 遺物図 (5) SK-86・87 (P-300) /
P-45・56・91・91・118・121・188・222・229・235・246・256・266・267・286



第22図 遺物図（6）遺構外出土遺物（1～23）

第11表 SI-1 出土遺物観察表（単位：cm、g）

番号	器種	法量(cm)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SI-1 1	須恵器 壺	口径(13.1) 底径 5.0 器高 4.7	①酸化焰気味 ②浅黄色 / 浅黄色 ③石英、黒色鉱物、白色粒 ④1/4	外面：輶轆整形。底部右回転糸切り後、無調整。 内面：輶轆整形。	No.8	
SI-1 2	須恵器 壺	口径(11.6) 底径(5.9) 器高<3.3> ④1/2	①酸化焰気味 ②黄灰色 / 暗灰黄色 ③石英、片岩	外面：輶轆整形。底部回転糸切り後、無調整。 内面：輶轆整形。	No.5 カマド、 床下土坑	
SI-1 3	須恵器 塊	口径 11.3 底径 5.7 器高<4.2> ④3/4	①酸化焰気味 ②暗灰黄色 / 黒褐色 ③石英、黒色鉱物 ④3/4	外面：輶轆整形。底部回転糸切り後、高台貼付し、 ナデ調整。 内面：輶轆整形。	No.1 カマド、 床直	
SI-1 4	須恵器 塊	口径(10.8) 底径(5.2) 器高 4.1 ④1/4	①酸化焰気味 ②にぶい黄橙色 / 同左 ③石英、黒色鉱物、白色粒	外面：輶轆整形。底部切り離し後、高台貼付し、 ナデ調整。 内面：輶轆整形。	No.2 カマド	
SI-1 5	須恵器 塊	口径(12.0) 底径 5.7 器高 5.4 ④1/3	①酸化焰気味 ②にぶい黄橙色 / 同左 ③石英、黒色鉱物、白色粒	外面：輶轆整形。底部回転糸切り後、高台 貼付し、ナデ調整。 内面：輶轆整形。	カマド 掘り方	
SI-1 6	灰釉陶器 塊	器高 15.0 底径 7.5 器高 4.4	①還元焰 ②浅黄橙色 / 灰オリーブ(釉) ③石英、角閃石、白色・赤色岩片 ④口縁～底部 5/8	外面：輶轆整形。高台貼付後、底面ナデ調整。 釉薬浸け掛け。 内面：輶轆整形。見込みに重ね焼き痕。 釉薬浸け掛け。	No.6 貯藏 穴 底面付近	大原2号 窯式段階
SI-1 7	羽釜	口径(22.7) 器高<14.4>	①酸化焰気味 ②浅黄色 / 浅黄色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④口縁～胴上部 1/5	外面：輶轆整形。鍔貼付後、ナデ調整。 胴上部斜位ナデ。 内面：輶轆整形。	No.4 カマド、No.7 貯蔵穴	
SI-1 8	羽釜	口径(18.8) 底径 — 器高<13.0> ④口縁部～胴中部破片	①酸化焰気味 ②にぶい黄橙色 / 同左 ③石英・角閃石・黒色粒	外面：輶轆整形。鍔貼付後、ナデ調整。 胴上～中部斜位ナデ。 内面：輶轆整形。	覆土一括	
SI-1 9	羽釜	口径(18.6) 底径 — 器高<9.5> ④口縁部～胴中部破片	①酸化焰気味 ②灰白色 / 同左 ③石英・黒色鉱物・白色粒	外面：輶轆整形。鍔貼付後、ナデ調整。 内面：輶轆整形。	床下土坑	
番号	器種	法量(cm・g) / 成・整形技法の特徴		出土層位	備考	
SI-1 10	鉄製品 鎌	基(茎) 部欠損。長さ：<16.0> 最大幅：3.6 厚さ：0.15～0.4 重さ：72.79		掘り方		
SI-1 11	鉄製品 器種不明	長さ：<11.4> 厚さ：0.5～0.7 重さ：22.43		覆土下層	角棒状	
SI-1 12	鉄製品 鉄鎌カ	長さ：<7.1> 厚さ(茎部含む)：0.4～0.8 重さ：7.78		覆土下層		
SI-1 13	鉄製品 器種不明	長さ：<3.9> 最大幅：5.7 厚さ：0.9 重さ：30.32		覆土一括	板状	
SI-1 14	石製品 砥石	4面使用。うち1面は、一部に自然面が残る。砥面は平滑。流紋岩製。 長さ：<11.1> 最大幅：6.7 厚さ：1.4～4.0 重さ：31.52		覆土下層		
SI-1 15	石器 砥・敲石	自然礫を素材とし、表・裏面に摩耗痕・擦痕。裏面は摩耗顕著、平滑。周縁に敲打痕・剥離痕。安山岩製。 長さ 14.6 幅 12.2 厚さ 5.3 重量 1441.89		覆土下層	被熱黒変あり。	

第12表 SI-2 出土遺物観察表（単位：cm、g）

番号	器種	法量(cm)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SI-2 1	須恵器 塊	底径(7.6) 器高<2.3> ④底部 1/5	①還元焰 ②灰白色 / 灰白色 ③石英、黒色鉱物	外面：輶轆整形。高台貼付後、ナデ調整。 内面：輶轆整形。	覆土一括	
SI-2 2	土師器 壺	口径(13.2) 底径 — 器高<2.8> ④1/4	①酸化焰 ②にぶい橙色 / にぶい橙色 ③石英、黒色鉱物、白色粒	外面：口縁部ヨコナデ後、体部～底部ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ。	覆土一括	
SI-2 3	土師器 壺	口径(12.4) 器高<3.3> ④1/6	①酸化焰 ②にぶい黄橙色 / 同左 ③石英、黒色鉱物、白色粒	外面：口縁部ヨコナデ。体部ナデ。 内面：ヨコナデ。	覆土下層	
SI-2 4	土師器 甕	口径(10.8) 底径(5.2) 器高 4.1 ④胴下部～底部破片	①酸化焰 ②にぶい黄橙色 / にぶい橙色 ③石英、黒色鉱物、白色粒	外面：縦位ヘラケズリ。 内面：ヘラナデ。	覆土一括	

第13表 SI-3 出土遺物観察表①（単位：cm、g）

番号	器種	法量(cm)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SI-3 1	須恵器 壺	口径(13.2) 器高 3.3	①還元焰気味 ②黄灰色 / 黄灰色 ③石英、黒色鉱物、白色粒 ④1/4	外面：輶轆整形。 内面：輶轆整形。	掘り方	
SI-3 2	須恵器 壺	口径(11.0) 底径(4.4) 器高 3.4	①酸化焰気味 ②にぶい黄橙色 / 同左 ③石英、黒色鉱物、白色粒、赤色粒 ④1/2	外面：輶轆整形。 内面：輶轆整形。	掘り方	
SI-3 3	羽釜	口径(15.9) 器高<9.7>	①還元焰 ②灰黄色 / 黄灰色 ③石英、黒色鉱物 ④1/6	外面：輶轆整形。鍔貼付後、ナデ調整。 内面：輶轆整形。	カマド1 前面、掘 り方	
SI-3 4	羽釜	口径 — 底径(7.0) 器高<5.9>	①還元焰 ②灰黄色 / 黄灰色 ③石英、黒色鉱物、白色粒 ④胴下部～底部破片	外面：輶轆整形後、斜位ナデ。 底部回転糸切り後、ナデ。 内面：輶轆整形。	No.3 カマド2 前面	

第14表 SI-3 出土遺物観察表②(単位:cm、g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-3 5	須恵器 甕	口径 一 底径 (14.1) 器高 <22.3>	①還元焰 ②灰色 / 黄灰色 ③石英、白色粒 ④胴中部～底部 1/6	外面: 輪積み後、タタキ整形。胴部ナデ後、底部直上～底面へラケズリ。 内面: 輪積み後、タタキ整形。胴部～底部ナデ。	カマド前、 カマド掘 り方	
SI-3 6	須恵器 壺	口径 一 底径 10.0 器高 <5.2>	①還元焰 ②灰色 / 灰オリーブ色 ③石英、黒色鉱物、白色粒 ④胴下部～底部破片	外面: 輪積み後、輻轆整形。底部ナデ。 高台貼付後、ナデ調整。 内面: 輪積み後、輻轆整形。底部指ナデ。	土坑2 No.1	大原2号 窯式段階
番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SI-3 7	土製品 羽口	被熱著しい。端部溶融。略完形。 長さ: 10.3 直径: 7.8 孔径: 2.3 重量: 517.9		鍛冶炉 No.1 土坑2 No.2		
SI-3 8	鍛冶滓 流動滓	長さ: 3.8 最大幅: 2.9 重量: 9.48		土坑2 No.4		
SI-3 9	石製品 砥石	長さ: <9.8> 最大幅: 6.1 厚さ: 3.9 重量: 309.6 石材: 砂岩製。		下層 No.5		
SI-3 10	石製品 砥石	長さ: <5.6> 最大幅: 4.35 厚さ: 1.65 重量: 62.5 石材: 流紋岩製。		覆土一括		

第15表 SI-4 出土遺物観察表(単位:cm、g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-4 1	土師器 甕	口径 (18.3) 底径 (7.6) 器高 <2.3>	①酸化焰 ②橙色 / 橙色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④口縁～胴上部破片	外面: 口縁部ヨコナデ。胴上部へラケズリ。 内面: 口縁～胴部ヨコナデ。	覆土一括	

第16表 SI-5 出土遺物観察表(単位:cm、g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SI-5 1	縄文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①良好 ②明黄褐色 ③石英、チャート、凝灰岩粒、白色粒 (多量) ④胴部上位 1/3	外面: 胴部単節 LR 縄文を横位施文後、ヘラ状工具によるキザミ浮線文を施文。 内面: 横位・斜位のナデ。	豊穴に伴う P-230	前期後葉諸磯 b式。外面スス付着、内面コゲ付着

第17表 土坑出土遺物観察表①(単位:cm、g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-1 1	須恵器 壺	口径 一 底径 (18.2) 器高 <1.8>	①還元焰氣味 ②灰黄色 / 灰黄色 ③石英、黒色鉱物、白色粒 ④体部～底部 1/4	外面: 輻轆整形。右回転糸切り後、無調整。 内面: 輻轆整形。	覆土一括、 混入	
SK-3 1	縄文土器 深鉢	口径 (39.0) 底径 一 器高 一	①良好 ②にぶい黄橙色 ③石英、チャート、赤色粒、纖維 ④口縁部～胴部上半 1/2	外面: 4単位の波状口縁。口唇部半截竹管状工具凹面によるギザミ。口縁部～胴部同様の工具による平行沈線で連繋する菱形の区画文を施文、区画内には同様の手法で円文を施文→平行沈線間に爪形文・V字状文を施文。 内面: 横位のミガキ。	覆土中位	前期中葉・ 有尾式 外面スス付着 内面黒斑あり
SK-3 2	縄文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①普通 ②にぶい黄褐色 ③石英、赤色粒、纖維 (多量) ④胴部破片	外面: 胴部半截竹管状工具による平行沈線文を施文→平行沈線間に爪形文を施文。 内面: 横位・斜位のナデ。	覆土中位	縄文前期中葉 有尾式 2次被熱
SK-3 3	縄文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①良好 ②褐色 ③石英、白色粒、黒色粒、赤色粒、纖維 ④胴部破片	外面: 胴部単節 LR・RL 縄文を交互に横位施文 (反時計回り、下→上)。 内面: 横位・斜位のナデ。	覆土中位	縄文前期中葉 外面スス付着
SK-3 4	縄文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、凝灰岩粒、赤色粒、纖維 ④胴部破片	外面: 胴部単節 LR・RL 縄文を交互に横位施文 (下→上)。 内面: 横位・斜位のナデ。	覆土一括	縄文前期中葉 内面コゲ付着
SK-3 5	縄文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①やや不良 ②にぶい黄褐色 ③石英、角閃石、凝灰岩粒 ④胴部破片	外面: 胴部直前段半燃り LLR を横位施文。 内面: 縦位のナデ。	覆土一括	縄文前期 外面黒斑あり
番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SK-3 6	石器 スクレイバー	礫皮が残る剥片素材を使用し、側縁の一部に両面2次調整。縁端部に連続する微細剥離痕。頁岩製。 長さ: 6.8 幅: 9.1 厚さ: 1.6 重量: 83.09		覆土一括		
SK-8 1	金属製品 煙管	雁首。内部に羅字の一部が残存。 長さ: 2.25 最大幅: 1.1 重量: 2.46		覆土一括	近世	
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-9 1	縄文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①並 ②にぶい褐色 ③石英、角閃石、凝灰岩粒 ④胴部破片	外面: 胴部単節 RL 縄文を縦位施文→丸棒状工具による沈線で懸垂文を施文→沈線間の地文を一部磨り消し。 内面: 縦位のナデ。	覆土一括、 混入	縄文中期後葉 加曾利E III式
SK-9 2	縄文土器 深鉢	口径 一 底径 一 器高 一	①良好・堅緻 ②にぶい赤褐色 ③石英、角閃石、凝灰岩粒、赤色粒 ④胴部破片	外面: 胴部6本歯の櫛齒状工具による縦位・斜位の条線を施文。 内面: 横位・斜位のミガキ。	覆土一括、 混入	縄文中期後葉

第18表 土坑出土遺物觀察表②(単位:cm、g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-14 1	須恵器 壺	口径(11.1) 底径— 器高<3.4>	①還元焰 ②暗灰黄色/灰色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④体部1/5	外面:轆轤整形。 内面:轆轤整形。	覆土一括、 混入	
SK-16 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好 ②褐色 ③石英、凝灰岩粒、繊維(多量) ④胴部下位1/4	外面:胴部単節LR縄文を横位施文。 内面:縦位のナデ。	覆土一括	縄文前期中葉 内面コゲ付着
SK-17 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好・堅緻 ②明黄褐色 ③石英、角閃石、黒色鉱物、白色粒 ④ 口縁部破片	外面:平口縁。口唇部半截竹管状工具による 平行沈線で波状文を施文平行沈線間に 沈線に沿って浮線文を施文。口縁部単 節RL縄文を横位施文→ヘラ状工具によ るキザミ浮線で渦巻文を施文。 内面:横位のケズリ→横位のミガキ。	覆土一括	縄文前期後葉 諸 磯b式
SK-17 2	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①やや不良 ②褐色 ③石英、白色粒(多量) ④胴部破片	外面:胴部単節RL縄文を横位施文→ヘラ状工 具によるキザミ浮線文、竹管状工具に よる刺突列点文を施文。 内面:斜位のナデ。	覆土一括	縄文前期後葉 諸 磯b式
SK-18 1	弥生土器 甕	口径— 底径— 器高—	①良好・堅緻 ②褐色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④胴部破片	外面:胴部4~5本歯の櫛描波状文を横位施文 (上→下)。 内面:横位のミガキ。	覆土一括	弥生後期樽式 外面スヌ・内 面コゲ付着
SK-23 1	弥生土器 甕	口径— 底径— 器高—	①良好 ②灰黃褐色 ③石英、チャート、赤色粒 ④口縁部破片	外面:口唇部ヘラ状工具によるキザミ。口縁 部7~8本歯の櫛描 櫛描波状文、頸 部簾状文(時計回り)を横位施文。 内面:横位のミガキ。		弥生後期樽式 外面スヌ・内 面コゲ付着
SK-23 2	弥生土器 甕	口径— 底径— 器高—	①良好 ②灰黃褐色 ③石英、白色粒(多量) ④胴部破片	外面:胴部7本歯の櫛描波状文(下→上)を 横位施文→無文部に横位のミガキ。 内面:横位・斜位のミガキ。		弥生後期樽式 外面スヌ・内 面コゲ付着
SK-25 1	須恵器 壺	口径9.0 底径5.1 器高2.7	①還元焰 ②灰白色/灰白色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④ほぼ完形	外面:轆轤整形。底部左回転糸切り後、無調整。 内面:轆轤整形。	底面付近 No.2	副葬品
SK-25 2	灰釉陶器 塊	口径16.3 底径7.9 器高6.3	①還元焰 ②灰白色/灰白色/釉灰黄③ 黒色鉱物、灰色粒 ④完形	外面:轆轤整形。高台貼付後、ナデ調整。 底面にヘラ記号「○」。釉漬け掛け。 内面:轆轤整形。見込みに重ね焼き痕。	底面付近 No.3	副葬品
SK-25 3	灰釉陶器 広縁段皿	口径11.3 底径6.7 器高2.1	①還元焰 ②灰白色/灰白色 ③黒色鉱物、灰色粒 ④完形	外面:轆轤整形。底部回転糸切り後、高台貼 付し、ナデ調整。釉漬け掛け。 内面:轆轤整形。	底面付近 No.1	副葬品
番号	器種	法量(cm・g)/成・整形技法の特徴			出土層位	備考
SK-25 4	石器・石製品 磨石・敲石	自然礫を素材とし、表・裏面に摩耗痕。裏面は平滑で、砥石として古代に転用か。上・下端部に敲打痕。砂岩製。長さ:12.4 幅:7.1 厚さ:4.7 重量:600.5			底面付近 No.4	縄文石器の転 用か、副葬品
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-26 -27 -28 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①やや不良 ②にぶい黄橙色 ③石英、黒色鉱物 ④口縁部破片	外面:波状口縁。口縁部単節RL縄文を横位施 文→ヘラ状工具によるキザミ浮線文。 内面:横位のミガキ。	覆土一括	縄文前期後葉 諸 磯b式
SK-26 -27 -28 2	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①並 ②灰褐色 ③石英、片岩、チャート ④胴部破片	外面:胴部単節RL縄文(S字結節)を横位施文 →半截竹管状工具による横位の集合沈線 文を施文。 内面:横位・斜位のミガキ。	覆土一括	縄文前期後葉 諸 磯b式
SK-26 -27 -28 3	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①やや不良 ②にぶい褐色 ③石英、片岩、凝灰岩粒 ④胴部破片	外面:胴部単節RL縄文(S字結節)を横位施文 →半截竹管状工具による横位の平行沈線 文を施文。 内面:横位のナデ。	覆土一括	縄文前期後葉 諸 磯b式
SK-27 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①並 ②橙色 ③石英、片岩、黒色粒、赤色粒 ④口縁部破片(獸面把手部)	外面:波状口縁。波頂部獸面把手。竹管状工 具による沈線と刺突で顔貌表現。把手 下は単節RL縄文を横位施文→半截竹管 状工具による横位・斜位の平行沈線文。 内面:横位・斜位のミガキ。	覆土一括	縄文前期後葉 諸 磯b式
SK-28 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好 ②褐色 ③石英、片岩(多量) ④口縁部破片	外面:波状口縁。口唇部には丸棒状工具による キザミ。口縁部単節RL縄文を横位施文 →ヘラ状工具によるキザミ浮線文・竹管 状工具による刺突文を施文。 内面:横位のミガキ。	覆土一括	縄文前期後葉 諸 磯b式
SK-28 2	縄文土器 深鉢	口径— 底径(13.4) 器高—	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、凝灰岩粒、白色粒(多量)、赤 色粒 ④底部破片	外面:胴部単節RL縄文を横位施文。底部ナデ。 内面:縦位のナデ。	覆土一括	縄文前期後葉 諸 磯b式
番号	器種	法量(cm・g)/成・整形技法の特徴			出土層位	備考
SK-28 3	石器 石棒カ	棒状礫を素材とし、全体に摩耗痕。被熱による破碎痕あり。両端部欠損。安山岩製。長さ:<7.6> 直径:5.5~6.8 重量:447.6			覆土一括	
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-36 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①並 ②灰黃褐色 ③石英、黒色鉱物 ④口縁部破片	外面:平口縁。口縁部単節RL縄文を横位施文 →半截竹管状工具による横位平行沈線→ 平行沈線間に同様工具による爪形文施文。 内面:横位のナデ。	覆土一括	縄文前期後葉 諸 磯b式
番号	器種	法量(cm・g)/成・整形技法の特徴			出土層位	備考
SK-36 2	石器 石錐	礫皮が残る横長剥片を素材とし、2側縁に片面調整を施して錐部を作出。先端は使用により磨滅。頁岩製。長さ:8.6 幅:3.4 厚さ:1.0 重量:15.5			覆土一括	

第19表 土坑出土遺物觀察表③(単位:cm、g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-37 1	土師器 甕	口径(20.7) 底径— 器高<5.3>	①酸化焰 ②にぶい橙色/橙色 ③石英、黒色鉱物、白色粒、赤色粒 ④口縁～胴上部1/5	外面:口縁～頸部ヨコナデ。胴上部ヘラケズリ。 内面:口縁～胴部ヨコナデ。	覆土一括	
番号	器種	法量(cm・g)/成・整形技法の特徴				出土層位 備考
SK-37 2	鉄製品 鎌	破片。長さ:<8.6> 最大幅:4.6 厚さ:0.2~0.5 重量:50.6				覆土上層
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-39 1	須恵器 壺	口径(9.2) 底径(5.0) 器高(2.8)	①酸化焰気味 ②橙色/橙色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④1/4	外面:轆轤整形。底部右回転糸切り後、無調整。 内面:轆轤整形。	覆土一括	
SK-47 1	須恵器 蓋	口径(13.7) 器高<2.5>	①還元焰 ②灰白色/灰色 ③石英、黒色鉱物 ④1/8	外面:轆轤整形。 内面:轆轤整形。	覆土一括	
番号	器種	法量(cm・g)/成・整形技法の特徴				出土層位 備考
SK-47 2	鉄製品 不明	破片。長さ:<4.6> 最大幅:4.0 厚さ:0.7 重量:17.1				覆土上層
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-53 1	須恵器 壺	口径— 底径7.4 器高<2.1>	①還元焰 ②灰色/灰白色 ③黒色鉱物、白色粒 ④部体～底部1/2	外面:轆轤整形。底部右回転糸切り後、無調整。 内面:轆轤整形。	覆土一括	
SK-56 1	須恵器 壺	口径(12.2) 底径— 器高<2.9>	①還元焰 ②灰色/灰色 ③石英、白色粒、赤色粒 ④部体1/3	外面:轆轤整形。底部右回転糸切り後、無調整。 内面:轆轤整形。	覆土一括	
SK-59 1	須恵器 壺	口径(11.8) 底径(8.4) 器高<3.7>	①還元焰 ②灰白色/灰白色 ③黒色鉱物、白色粒 ④1/6	外面:轆轤整形。底部右回転糸切り後、無調整。 内面:轆轤整形。	覆土一括	
SK-71 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①並 ②褐色 ③石英、片岩 ④胴部破片	外面:胴部単節RL縄文を横位施文→ヘラ状工具によるキザミ浮線文を施文。 内面:横位のケズリ→横・斜位のナデ。	覆土一括	縄文前期後葉諸磯b式
SK-75 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④口縁部破片	外面:平口縁。半截竹管状工具による横位・斜位の集合沈線を施文→ボタン状・棒状貼付文を施文。 内面:横位のナデ。	古代土坑、混入	縄文前期後葉諸磯c式 外面スヌ付着
SK-75 2	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好 ②にぶい黄褐色 ③石英、角閃石、赤色粒 ④口縁部破片	外面:平口縁。口縁部ミガキ調整を施した隆帶による楕円形区画文・渦巻文を施文→区画内に丸棒状工具による斜位沈線文充填→同様工具で隆帶脇に沈線を施文。 内面:横位のケズリ→横位のミガキ。	覆土一括	縄文中期後葉
SK-75 3	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好・堅緻 ②にぶい黄褐色 ③石英、角閃石、凝灰岩粒、白色粒(多量)、赤色粒 ④胴部破片	外面:胴部単節LR縄文を縦位施文→丸棒状工具による沈線で懸垂文を施文。沈線間を一帯おきに横位のミガキ。 内面:横位・斜位のナデ。	覆土一括	縄文中期後葉加曽利E III式 2次被熱
SK-76 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①やや不良 ②にぶい褐色 ③石英、片岩、礫(多量)、赤色粒 ④口縁部破片	外面:平口縁。口縁部単節RL縄文を横位施文→棒状貼付文・ヘラ状工具によるキザミ浮線文を施文。 内面:横位のミガキ。	覆土一括	縄文前期後葉諸磯b式
SK-76 2	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①やや不良 ②灰褐色 ③石英、黒色鉱物、白色粒(多量) ④胴部破片	外面:胴部単節RL縄文を横位施文→半截竹管状工具による平行沈線文を施文。 内面:横位のケズリ→斜位のナデ。	SK-76とP-131が接合	縄文前期後葉諸磯b式 外面スヌ付
SK-76 3	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好 ②にぶい黄褐色 ③石英、黒色粒、赤色粒 ④口縁部破片	外面:平口縁。口縁部横位ナデ、単節LR縄文横位施文→丸棒状工具による横位沈線文。 内面:口縁部丸棒状工具による横位沈線文を施文。横位ナデ。	覆土一括	縄文後期前葉堀之内2式
SK-76 4	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、黒色粒、赤色粒 ④口縁部破片	外面:平口縁。口縁部横位ナデ、単節LR縄文横位施文→丸棒状工具による横位沈線文。 内面:口縁部丸棒状工具による横位沈線文。	覆土一括	縄文後期前葉堀之内2式
番号	器種	法量(cm・g)/成・整形技法の特徴				出土層位 備考
SK-78 1	石器 スクレイバー	長さ4.8 幅6.8 厚さ1.3 重量52.8	礫皮が残る剥片を素材とし、縁辺に両面加工を施す。流紋岩製。		覆土一括	
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-81 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好 ②にぶい黄褐色 ③石英、黒色鉱物 ④口縁部～胴部破片	外面:波状口縁。口縁部～胴部単節RL縄文を横位施文→ヘラ状工具によるキザミ浮線文を施文。 内面:口縁部横位のミガキ、胴部横位のナデ。	覆土中位 No.1	縄文前期後葉諸磯b式 外面スヌ付着
SK-81 2	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好 ②にぶい黄橙色 ③石英、チャート ④胴部破片	外面:胴部半截竹管状工具による縦位の集合沈線文を施文→ボタン状貼付文を施文。 内面:斜位のケズリ・ナデ。	覆土中位	縄文前期後葉諸磯c式 2次被熱
番号	器種	法量(cm・g)/成・整形技法の特徴				出土層位 備考
SK-81 3	石器 礫器	長さ8.2 幅7.6 厚さ3.8 重量287.1	素材礫の周縁に両面加工を施し刃部とする。刃部周辺に微細剥離痕あり。黒色安山岩製。		覆土中位	
SK-81 4	石器 磨・凹・敲石	長さ20.7 幅9.2 厚さ5.7 重量1823.9 安山岩製。	楕円形の自然礫を素材とし、表・裏面全体に摩耗痕。表・裏面中央・右側縁中央・下端に敲打痕。		No.2	
SK-81 ・82 1	縄文土器 深鉢	口径— 底径— 器高—	①良好 ②にぶい褐色 ③石英、片岩(多量) ④胴部破片	外面:胴部単節RL縄文を横位施文→半截竹管状工具による横位の平行沈線文を施文→平行沈線間に同様工具で爪形文施文。 内面:横位・斜位のナデ。	覆土一括	縄文前期後葉諸磯b式 外面スヌ付着

第20表 土坑出土遺物観察表④(単位:cm、g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-82 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高 —	①良好 ②灰褐色 ③石英、片岩(大粒) ④口縁部破片	外面: 波状口縁。口縁部単節 RL 縄文を斜位施文→半截竹管状工具による横位の平行沈線文を施文→平行沈線間に同様工具で爪形文を施文。 内面: 横位・斜位のミガキ。	覆土一括	縄文前期後葉諸 磯b式 外面スス付着
SK-82 2	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高 —	①良好 ②にぶい橙色 ③石英、チャート、礫 ④底部破片	外面: 胴部単節 RL 縄文を横位施文→ヘラ状工具によりキザミ浮線文施文。底部ナデ。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	縄文前期後葉諸 磯b式 2次被熱
番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SK-82 3	石器 石錐	礫皮を残す縦長剥片を素材とし、2側縁に両面調整を施し錐部を作出。上半部欠損。黒色安山岩製。 長さ(2.9) 幅(1.4) 厚さ0.5 重量2.56			覆土一括	
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-86 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高 —	①良好 ②にぶい黄橙色 ③石英、長石、チャート ④口縁部破片	外面: 平口縁。半截竹管状工具による横位の平行沈線文とヘラ状工具による斜位のキザミを交互に施文→平行沈線間に半截竹管状工具による爪形文を施文。 内面: 斜位のミガキ。	底面直上	縄文前期後葉諸 磯b式
番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
SK-86 2	石器 石皿(有縁)	一部残存。全体に加工が施されており、台部・縁部・皿面が明瞭である。縁部はやや外反している。 一部に黒い変色が認められる。安山岩製。長さ<4.9> 幅<8.7> 厚さ4.4 重量137.8			覆土一括	前期後葉カ
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
SK-87 P-300 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高 —	①やや不良 ②明褐色 ③石英、チャート、赤色粒 ④胴部破片	外面: 胴部単節 LR 縄文を横位施文。 内面: 斜位のナデ。	覆土上層	縄文前期後葉 外面上にタール状物質付着
SK-87 P-300 2	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高 —	①やや不良 ②にぶい褐色 ③石英、黒色鉱物、凝灰岩粒 ④胴部破片	外面: 胴部3~4歯の櫛歯状工具による横位の集合沈線文を施文→半截竹管状工具による3本一組の結節浮線文を施文。 内面: 斜位のケズリ。	覆土上層	縄文前期後葉諸 磯c式

第21表 ピット出土遺物観察表①(単位:cm、g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
P-45 1	弥生土器 甕	口径 底径 器高 —	①並 ②灰黄色 ③石英、白色粒、黒色粒 ④胴部破片	外面: 胴部5本歯の櫛描波状文を横位施文。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	弥生後期 樽式
番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
P-56 1	石器 磨石・凹石	自然礫を素材とし、表・裏面に顕著な摩耗痕。中央付近に敲打集中による凹穴。安山岩製。 長さ14.3 幅7.9 厚さ4.7 重量802.1			覆土一括、 混入	
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
P-91 1	弥生土器 甕	口径 底径 器高 —	①やや不良 ②橙色 ③石英、角閃石、チャート ④口縁部破片	外面: 折り返し口縁。口縁部4本歯以上の櫛描波状文を横位施文。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	弥生後期 樽式
P-118 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高 —	①良好・堅緻 ②暗褐色 ③石英、黒色鉱物、凝灰岩粒、礫 ④胴部破片	外面: 胴部単節 LR 縄文を横位施文→ボタン状・棒状貼付文を施文。 内面: 斜位のケズリ・縦位・斜位のミガキ。	覆土一括、 混入	縄文前期後葉諸 磯b式 外面スス付着
P-121 1	縄文土器 器台	受部径(15.0) 台径18.0 器高6.7	①並 ②にぶい橙色 ③石英、黒色鉱物、凝灰岩粒、白色粒(多量) ④2/3	外面: 受部ミガキ。台部横位のミガキ。推定12箇所の透かし孔。受部の縁辺は摩耗。 内面: 横位のミガキ。	底面直上	縄文中期後葉2次被熱、 埋納カ
番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
P-188 1	石製品 紡錘車	全面、平滑に研磨。滑石製。 直径:3.2 孔径0.6~0.8 厚さ:1.0~1.3 重量20.9			覆土上層	
番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
P-222 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高 —	①良好・堅緻 ②にぶい黄橙色 ③石英、黒色粒 ④胴部破片	外面: 胴部5本歯の櫛歯状工具による横位の集合沈線文を施文→半截竹管状工具による2本一組の結節浮線文を施文。 内面: 横位・斜位のナデ。	覆土一括	縄文前期後葉諸 磯c式
P-229 1	弥生土器 壺	口径 底径 器高 —	①やや不良 ②にぶい黄橙色 ③石英、黒色粒 ④胴部破片	外面: 胴部斜位のミガキ→竹管状工具による刺突文を付すボタン状貼付文を施文。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	弥生後期 樽式
P-235 1	羽釜	口径 底径(7.0) 器高<5.9>	①酸化焰気味 ②にぶい橙色 / にぶい橙色 ③石英、黒色鉱物、赤色粒 ④口縁部破片	外面: 輻轂整形。鍔貼付後、ナデ調整。 胴上部斜位ナデ。 内面: 輻轂整形。	No.3 カマド2 前面	
P-246 1	須恵器 蓋	口径(17.2) 器高<2.7>	①還元焰 ②灰白色 / 灰色 ③黒色鉱物 ④1/4	外面: 輻轂整形。天井部回転ヘラケズリ。 内面: 輻轂整形。		
P-256 1	縄文土器 深鉢	口径 底径(16.6) 器高—	①良好 ②にぶい黄橙色 ③石英、黒色粒、赤色粒 ④底部破片	外面: 胴部単節 RL 縄文を横位施文。底部ナデ。 内面: 横位のナデ。	覆土一括	縄文前期後葉底部外面縁辺部にスス付着
P-266 1	縄文土器 深鉢	口径(21.0) 底径— 器高<7.7>	①良好・堅緻 ②にぶい褐色 ③石英、黒色鉱物、凝灰岩粒、赤色粒 ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部横位ナデ→単節 RL 縄文横位施文→半截竹管状工具による横位平行沈線文→平行沈線間に同様工具で爪形文施文、口唇部直下にヘラ状工具による横位・斜位のキザミ。 内面: 横位のミガキ。	覆土一括	縄文前期後葉諸 磯b式

第22表 ピット出土遺物観察表②(単位:cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
P-267 1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①やや不良 ②褐色 ③石英、白色粒(多量)、赤色粒 ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部半截竹管状工具による 横位・斜位の集合沈線文を施文→ボタ ン状・棒状貼付文を施文。 内面: 横位のミガキ。	覆土一括。 ピットは 加曾利E 式期。	縄文前期後葉 諸磯c式 2次被熱
番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
P-286 1	石器 多孔石	表裏面に敲打による凹穴多数。全体に磨滅。一部残存。安山岩製。 長さ<12.8> 幅<8.8> 厚さ<6.0> 重量 528.83				覆土一括

第23表 遺構外出土遺物観察表(単位:cm, g)

番号	器種	法量(cm)	①焼成 ②色調(内/外) ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	出土層位	備考
1	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①良好・堅緻 ②褐色 ③石英、黒色粒 ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部半截竹管状工具による 横位・斜位の平行沈線文を施文。 内面: 横位のミガキ。	表土	縄文前期後葉 諸磯b式
2	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①やや不良 ②にぶい黄橙色 ③石英、角閃石、白色粒(多量)、黒色 粒 ④胴部破片	外面: 胴部単節 RL 繩文を横位施文→半截竹管 状工具による横位平行沈線。スス付着。 内面: 横位のミガキ。コゲ付着。	カクラン (P-239、 欠番)	縄文前期後葉 諸磯b式
3	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①良好・堅緻 ②にぶい黄褐色 ③石英、角閃石、白色粒(多量) ④胴部破片	外面: 胴部8本歯の櫛齒状工具による縦位・ 横位集合沈線文→横位集合沈線間に竹 管状工具による刺突列点文。スス付着。 内面: 横位ケズリ→横位ミガキ。コゲ付着。	P-55	縄文前期後葉 諸磯c式
4	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①良好・堅緻 ②にぶい黄褐色 ③石英、チャート、赤色粒 ④胴部破片	外面: 胴部結節浮線文で同心円状のモチーフ を施文。 内面: 丁寧な横位のナデ。	表土	縄文前期後葉 諸磯c式 2次被熱
5	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①良好・堅緻 ②黒褐色 ③石英、白色粒(多量) ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部3本一組の結節浮線文 で三角形のモチーフを施文。口端部直 下・結節浮線文間に三角陰刻文を施文。 内面: 丁寧な横位のナデ。	P-123	縄文前期末葉 十三菩提式 外面スス付着
6	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①並 ②にぶい黄橙色 ③石英、黒色粒(多量)、赤色粒 ④胴部破片	外面: 胴部丸棒状工具による沈線・半截竹管 状工具による集合沈線でV字状のモチ ーフを施文後、三角陰刻文を施文。 内面: 横位のナデ。	表土	縄文前期末葉 十三菩提式
7	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①良好 ②灰黄褐色 ③石英(多量)、長石(多量) ④口縁部破片	外面: 平口縁。口唇部竹管状工具によるキザミ。 口縁部丸棒状工具による沈線文を施文→ 沈線間に半截竹管状工具によるキザミ・ 平行沈線文を施文。内面: 横位のナデ。	SK-54	縄文中期初頭 五領ヶ台I式 外面スス付着
8	縄文土器 浅鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①良好 ②にぶい赤褐色 ③石英、金雲母(多量)、黒色粒 ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部横位のミガキ、丸棒状 工具による沈線で楕円形区画文を施文。 内面: 口縁部横位のミガキ、丸棒状工具によ る沈線で楕円形区画文を施文。	SK-41 P-244	縄文中期中葉
9	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①良好・堅緻 ②にぶい褐色 ③石英、黒色鉱物、白色粒、赤色粒 ④ 口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部単節 RL 繩文を縦位施文 →丸棒状工具による横位沈線文2条→ 同様の工具で沈線間に交互刺突文。 内面: 丁寧な横位のミガキ。	P-184	縄文中期後葉 外面被熱
10	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①やや不良 ②灰褐色 ③石英、角閃石(多量)、凝灰岩粒 ④胴部破片	外面: 胴部断面台形状の扁平な縦位隆帯貼付 →丸棒状工具で隆帯脇に沈線区画文→ 同様の工具で斜位の短沈線を充填。 内面: 横位のナデ。	P-250	縄文中期後葉
11	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①やや不良 ②にぶい橙色 ③石英、角閃石、白色粒(多量) ④胴部破片	外面: 胴部撲糸文Rを縦位施文。 内面: 縦位のナデ。	表土	縄文中期中葉 ~後葉
12	縄文土器 深鉢	口径 底径 器高	一 一 一 ①良好・堅緻 ②灰黄褐色 ③石英、白色粒、黒色粒 ④口縁部破片	外面: 平口縁。口縁部横位ミガキ。断面三角 形の横位隆帯を貼付→隆帯直下に単節 LR 繩文を縦位施文。内面: 横位ミガキ。	表土	縄文中期末葉 加曾利E IV式
13	弥生土器 甕	口径 底径 器高	一 一 一 ①良好・堅緻 ②にぶい黄橙色 ③石英、黒色粒(多量) ④頸部破片	外面: 胴部歯數不明の櫛描波状文を横位施文 →頸部2連止め以上の櫛描廉状文を時 計回り施文→斜位のハケメ。 内面: 横位のハケメ→横位のミガキ。	表土	弥生後期 樽式
14	灰釉陶器 長頸壺か 器高<2.9>	口径 底径 器高	一 一 一 ①還元焰 ②灰黄色/灰褐色/オリーブ 灰釉 ③石英、黒色鉱物 ④口縁部破片	外面: 輻轂整形。底部回転ヘラナデ→高台貼 付→輻轂調整。胴下部~高台に自然釉。 内面: 輻轂整形。底部のみ自然釉。	表土	10世紀
番号	器種	法量(cm・g)	成・整形技法の特徴	出土層位	備考	
15	石器 打製石斧	小型撥形。両側縁部や刃部にリダクションが認められる。刃部周辺に摩耗痕あり。貞岩製。 長さ 7.7 幅 4.5 厚さ 1.1 重量 48.5		SK47 覆土		
16	石器 打製石斧	短冊形。割礫を素材とし、周縁に直接打撃による両面加工が施される。刃部周辺には使用痕と見ら れる微細剥離痕あり。黒色安山岩製。長さ 11.5 幅 5.2 厚さ 2.1 重さ 128.6		表土		
17	石器 磨製石斧? (乳棒状)	棒状礫を素材とし、敲打・研磨により調整加工を施す。表面2箇所及び基部には研磨により新しい 敲打痕が認められる。刃部欠損。敲石に転用か? 緑色岩類。 長さ<16.2> 幅 6.0 厚さ 3.3 重さ 504.4		P155 覆土		
18	石器 磨・凹石	自然礫の表・裏面に摩耗痕が認められ、摩耗範囲には部分的に擦痕あり。表・裏面中央には敲打に よる凹穴が4穴認められる。磨石を凹石に転用。ガジリ多い。安山岩製。 長さ 13.9 幅 10.4 厚さ 5.6 重さ 964.4		表土		
19	石器 砥石	扁平な自然礫を素材とし、表・裏面に平滑な砥面が認められる。砥面には擦痕が顕著。上・下端部 には敲打痕あり。安山岩製。長さ 11.7 幅 6.5 厚さ 2.8 重さ 315.1		SI04 No.1		

VI まとめ

剣崎稻荷塚遺跡は都合 5 度の調査を経ている。調査地点は大きく 4 か所に分散し、それぞれの調査面積は狭いながらも、本遺跡の輪郭はうかがえるものと考えている。予測の範囲を超えるものではないが、今後の調査のためにも、本遺跡の時代ごとの特徴や性格を再度整理しておきたい。

縄文時代

剣崎稻荷塚遺跡第 2 次調査区（以下、「剣崎 2」などと略表記）には、前期後葉諸磯 b～c 式期の住居跡が 4 軒まとまる。剣崎 1 では有尾期の住居跡 1 軒が確認され、剣崎 4 には有尾期・諸磯期の土坑群が分布していること、剣崎 3 では、湧水を伴う埋没谷（縄文前～中期に谷の埋没が徐々に進行）が地形的境界線を形成していることなどから推察すれば、第 3 図で示した橢円形状の集落域が想定される。剣崎 2 は 8°～14° の南斜面地であり、体感的にはやや急傾斜であろう。弥生・古墳時代の住居跡も密集するが、斜面地を選択した理由が、各時代で共通するのかは不明である。いずれにせよ、剣崎 2 から続く台地東側の斜面地までを居住区域として活用していた可能性を考慮しておこう。稻荷塚前期集落の規模（住居軒数・土坑数・墓域構成など）は不詳ながら、本遺跡地は独立丘状の地形が特徴的であり、中央平坦部および緩傾斜面は土坑群帶や広場として、縁辺斜面地から西側平坦面は居住帯として利用された環状集落構造を呈しているものと予察しておく。竪穴住居の時期は有尾期から諸磯 c 期までであるが、土器は前期末葉～中期初頭まで継続している。剣崎 4 の柱穴列 S A-1 には大型住居の可能性も残されており、該期のロングハウスが確認された東京都郷田原遺跡の事例をモデルとして挙げておく。

中期後葉は小規模集落と推測するが、剣崎 5 では加曾利 E 2～4 式期が主体をなしている。剣崎 4 では堀之内 2 式期と推定される橢円形土坑が確認されており、遺構数・遺物量は非常に希薄ながら、回帰されるべき拠点として長期にわたって認識されていたことがうかがえる。周辺では若田原遺跡が中期後葉～後期前葉の拠点的集落として重要である。剣崎稻荷塚遺跡のように、中期中葉（勝坂・阿玉台期）の空白期を挟んで、前期集落と中後期集落が重複する事例としては、安中市の二軒在家遺跡がある。遺構数・住居規模・遺物量のいずれも膨大な遺跡であり、単純な比較は慎むべきではあるものの、長い時間的断絶を介した領域および領域内拠点（集落）の重複現象は、稻荷塚集落の存在意義に関わる問題であろう。

弥生時代

剣崎 2 では後期樽式期の住居跡が 2 軒、剣崎 5 では 1 軒確認されている。周辺には、八幡遺跡・剣崎長瀬西遺跡・引間遺跡という大集落が存在し、本遺跡はこれら 3 地点に囲まれた位置にある。本遺跡において樽式期集落が成長しなかった理由の一つとして、広大な平坦面が確保できない地形的制約が考慮される。

古墳時代

剣崎 4 では明確な遺構をとらえることができなかったが、剣崎 2 では中期の住居跡が 6 軒、剣崎 5 でも 1 軒確認されている。渡来系遺物を伴う剣崎長瀬西遺跡や八幡中原遺跡の大規模集落が付近にあり、剣崎天神山古墳・剣崎長瀬西古墳・平塚古墳が周囲に分布する。弥生後期と同じく、本遺跡が大規模集落に発展することはないが、周辺遺跡群の結節点としての立地には注目しておきたい。剣崎支台には剣崎長瀬西遺跡に初期群集墳が構築され、八幡支台には觀音塚古墳・二子塚古墳などの首長墓が築造される。これらの間には八幡中原遺跡という大型集落が立地しており、本遺跡はこれら 3 者の関係にあっては末端に位置づけられる。剣崎 2 では 6・7 世紀代の住居が 14 軒確認されており、斜面地と幅の狭い平坦面に近接・重複して構築される。台地頂部の平坦面を広く活用しないことの理由は不明だが、なんらかの規制が働いていた可能性もある。

古代

本遺跡地一帯は倭名抄にみえる片岡郡若田郷に該当する。東山道国府ルートが本遺跡の西側至近を通過するものと予測され、片岡郡衙の存在と合わせて、本遺跡の古代集落形成には深く関わるはずである。第3・23図および写真図版扉で国府ルート推定線を示した。ただし、八幡台地南西部では八幡遺跡の古墳群の間を縫うように通過するものと思われるが、詳細は不明である。また、八幡中原遺跡・七五三引遺跡とはほぼ接しており、あるいは郡衙域と一部重複する可能性もあるため、考古学的な検証作業が俟たれる。

近世期には剣崎村と下小塙村の間に町屋村と我峰村の間に烏川の渡し場があり(『新編高崎市史 通史編3近世』p 549)、両地点は比較的近い上に、推定駅路ルートともほぼ合致する。東山道敷設以来、あるいはそれ以前からの渡河点であった可能性もある。国府・群馬駅家から片岡郡衙や野後駅家へ向かう場合、烏川渡河後、台地縁の急斜面を登りきったところに本遺跡がある。想像を逞しくするなら、郡衙の直前で、休息を兼ねて人馬や物資を整えるような地点であったのかもしれない。

東山道は「牛堀・矢ノ原ルート」が7世紀後半～8世紀代、「国府ルート」は9世紀以降に利用されたものと考えられている。本遺跡の6～8世紀代と9～11世紀代のおおよその集落分布を現状の調査成果から推測すると、前者は南側斜面、後者は台地平坦面に占地する傾向にあり、集落構造の変動には、駅路の路線変更が関わっている可能性がある。

また、八幡町や上・中・下豊原町および板鼻町一帯は、11世紀以降には荘園となっていたようであり、13世紀の仏像銘に「八幡荘」と記載されている(『新編高崎市史 通史編1』)。荘園化が生産活動や集落運営に影響



(昭和45年高崎市都市計画図1/2,500図を改変。遺跡番号は第3図と共に。)

第23図 詳細遺跡分布図

を与えた可能性もある。剣崎 4 で確認された鍛冶遺構は 10 世紀前半であり、多数の古代のピットや掘立柱建物の大半も 10 世紀以降と推測される。剣崎 1 から出土した 11 世紀代の金銅製神像と分銅形六面体石製品や、剣崎 3 の墓坑などは「八幡荘」の時期にあたる。至近距離にある片岡郡衙の機能が衰退・形骸化する一方で、他方では 10 ~ 11 世紀代に集落運営や信仰活動は活発化している。その背景や理由の一つに、受領層等による荘園運営が挙げられるかもしれない。

ところで平忠常の乱（1031）を平定したことでの有名な源頼信は、長保元年（999）に上野介に任せられており、荘園化は頼信が上野介の頃と言われている（前掲文献）。社伝では、天徳元年（957）に石清水八幡宮を勧進したのが創建であり、源頼義が前九年の役（1051 ~ 1062）の戦勝祈願のために立ち寄り、結果勝利したので、帰国途上に社殿を造営したという。義家も後三年の役（1083 ~ 1087）の際に戦勝祈願し、陣を張ったという。いずれにせよ、八幡荘と八幡宮は源氏に関わりが深く、平安末期には新田氏の所領となつたようであり、鎌倉攻めの際には、ここに軍勢を集結させている。

中近世

本遺跡とは谷を挟んだ若田支台先端部が、剣崎小路城あるいは鳴熊城（屋敷）に比定されている。永正 4 年（1507）、福田忠政が関東管領上杉顕定の勧めで鳴熊城を築いたといわれる。また、柴田勝家の孫（養子の子）にあたる柴田勝重が、慶長 4 年に徳川家康より旗本領 2000 石を与えられ、剣崎小路城に居城したとされている。詳細は不明ながら、戦国期以降、本遺跡地一帯は福田氏や柴田氏の所領となっていた。各遺構の時期を特定することは難しいが、掘立柱建物や柱穴列、円形土坑群は、戦国期以降近世前期頃に構築された可能性がある。

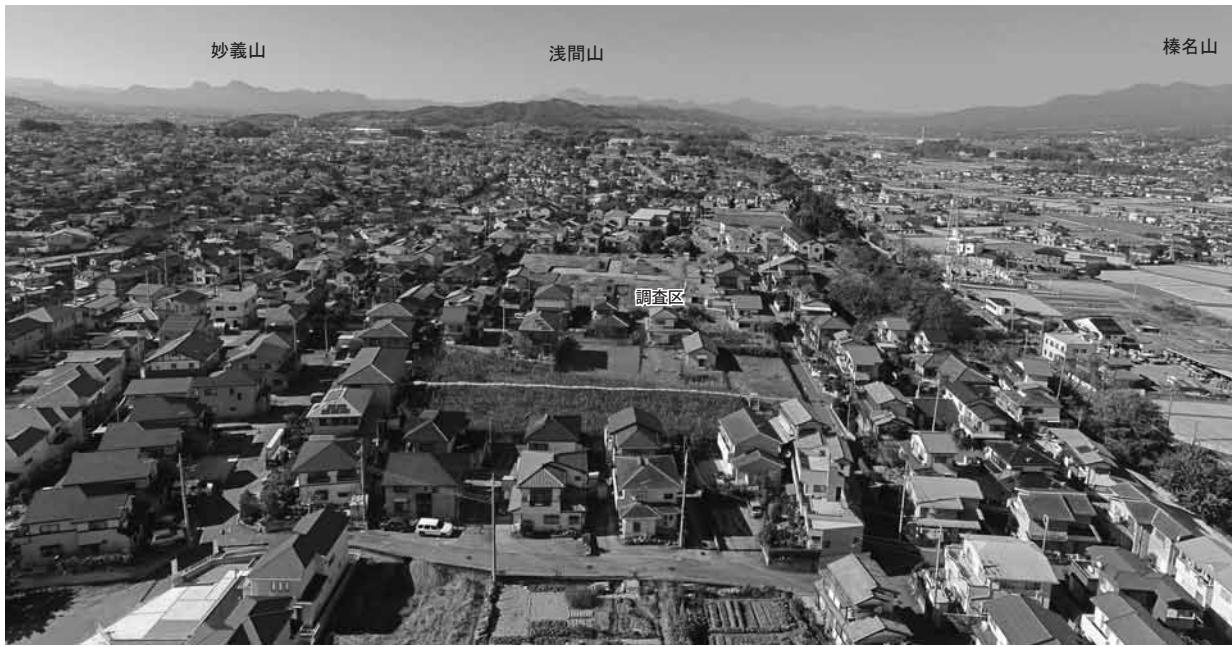
おわりに

剣崎稻荷塚遺跡は、現状では各時代を通じて大規模集落などを形成していないように見えるが、今後に調査が進めばその性格や意義は変わるだろう。

縄文時代前期は環状集落を形成していた可能性が高く、現状では遺物量や住居軒数は多くならない印象を受ける。地形的には、西側の湧水を伴う谷から、東側の急斜面（現状は擁壁）まで直線で 270 m を測り、北側の急崖から剣崎 2 m までは 200 m を測る。前期集落がこの地理的制約内に収まることはほぼ間違いない。第 23 図のトーンは前期集落の想定範囲を示しているが、住居帶外縁の廃棄帶までを包摂した集落規模を精確に推測することは難しい。ただし、集落の平面的なサイズと遺構数・遺物量が必ずしも比例的関係にはないとの意味を考える必要が生じるかもしれない。

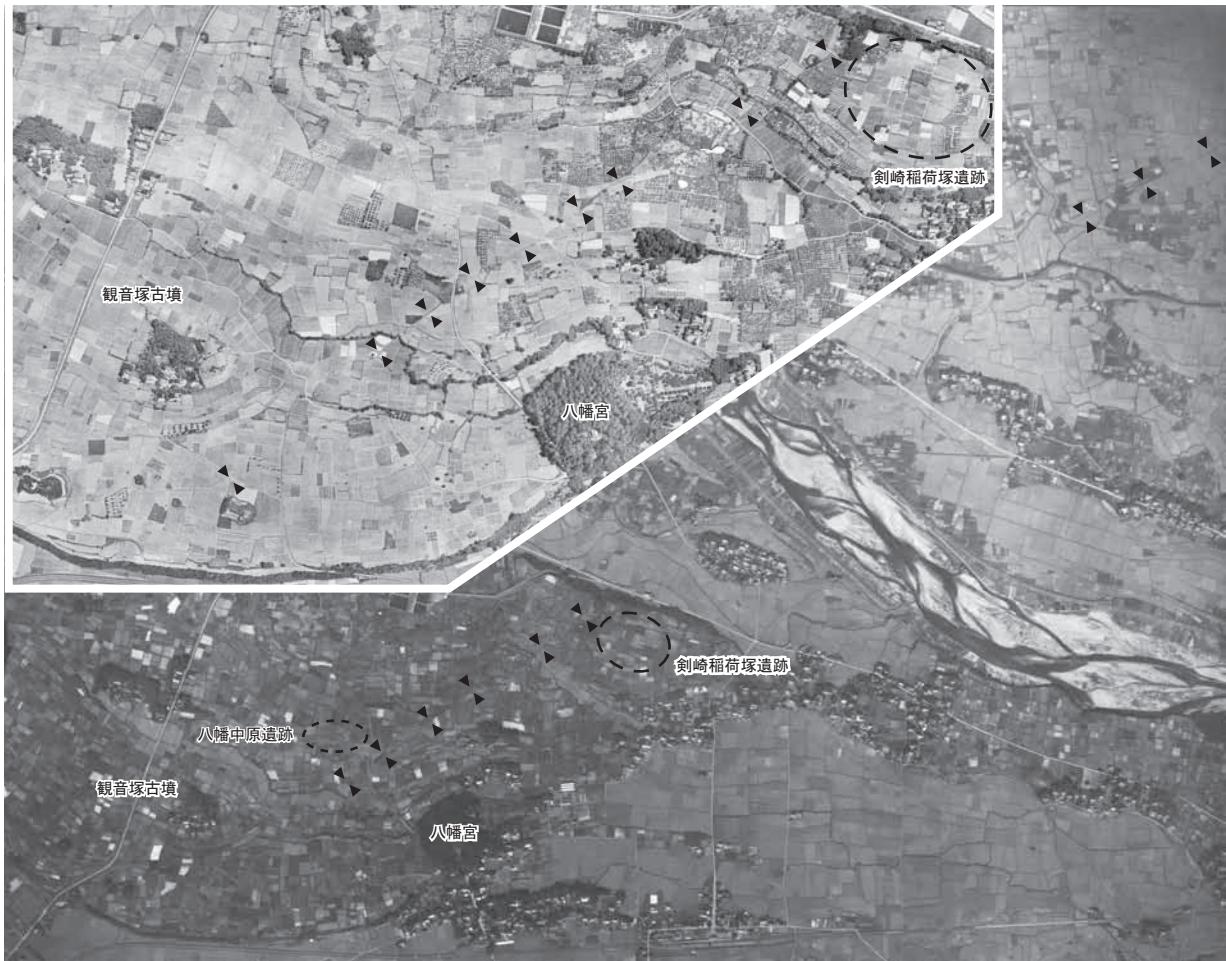
弥生時代・古墳時代にあっては、大規模集落や古墳群をつなぐ経路上や中間点付近に位置していることに注意しておきたい。また、剣崎長瀬遺跡・八幡中原遺跡・八幡遺跡からみれば、本遺跡は烏川渡河点に最も近い剣崎支台上の集落遺跡として捉えることもできよう。

古代については、今後の調査研究によって片岡郡衙や八幡荘の実態解明が進むことを期待するとともに、近い将来において八幡台地上での東山道の発掘調査が行われ、考古学的に検証されることを望む。



剣崎稻荷塚遺跡4 調査区遠景（東から）

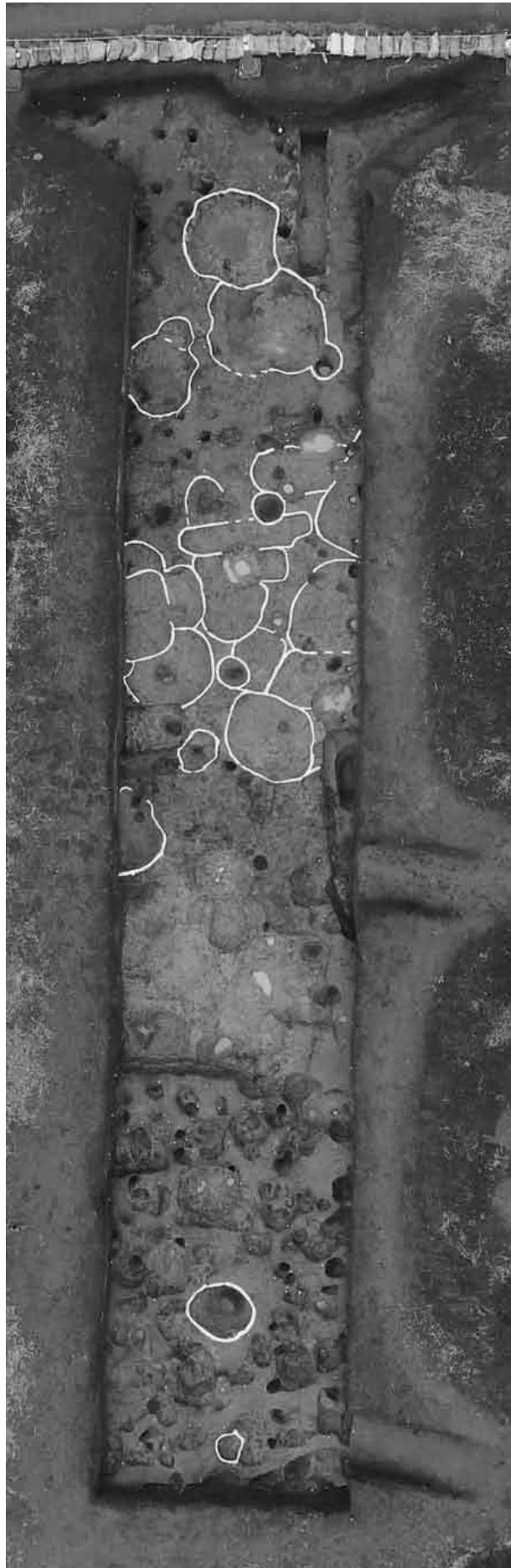
写 真 図 版



米軍航空写真に見える直線状地割り（国土地理院 1948年 USA-R1847-A-31/ 左上：1946年 USA-M165-A-6-5、縮尺任意）



劍崎稻荷塚遺跡4 空撮全景（上が北）



劍崎稻荷塚遺跡4 繩文遺構群 空撮全景（上が北）



調査区全景（西）



道路拡張区〔中央部〕全景（北東）



道路拡張区〔北部〕全景（南西）



道路拡張区〔南部〕全景（南西）



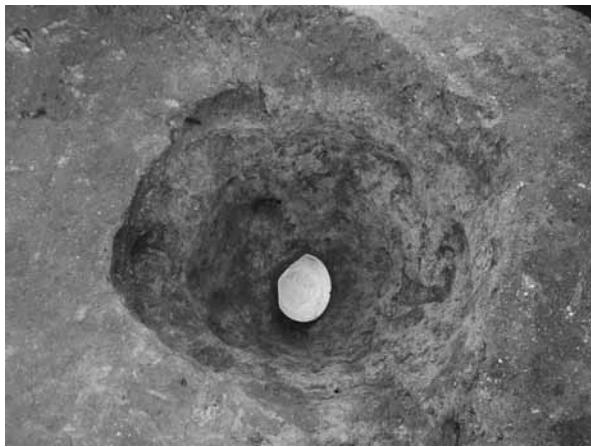
SI-6〔道路拡張区南部〕全景（北西）



SI-1 全景・遺物出土状況 (西)



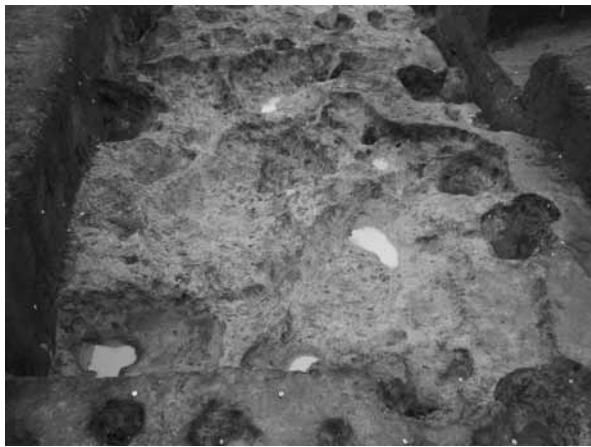
SI-1 土坑1 土層断面 (西)



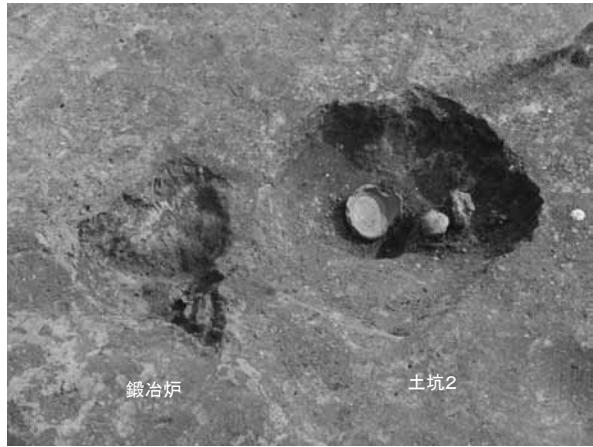
SI-1 貯蔵穴 遺物出土状況 (南西)



SI-3 完掘・SI-1 堀り方 全景 (西)



SI-3・SI-1 堀り方 全景 (西)



SI-3 鍛冶炉・土坑2(旧炉) 全景 (西)



SI-2 堀り方 全景 (西)



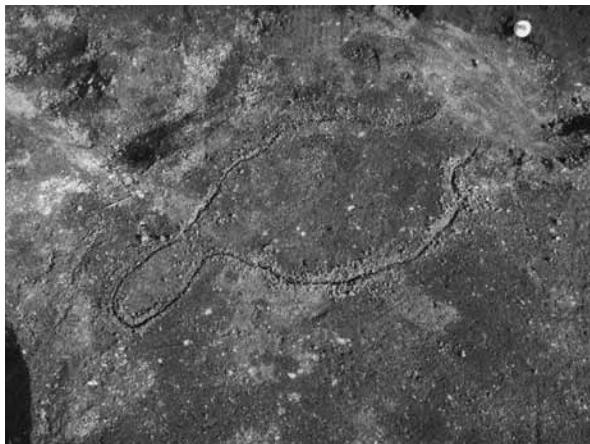
SI-2 土層断面 (北東)



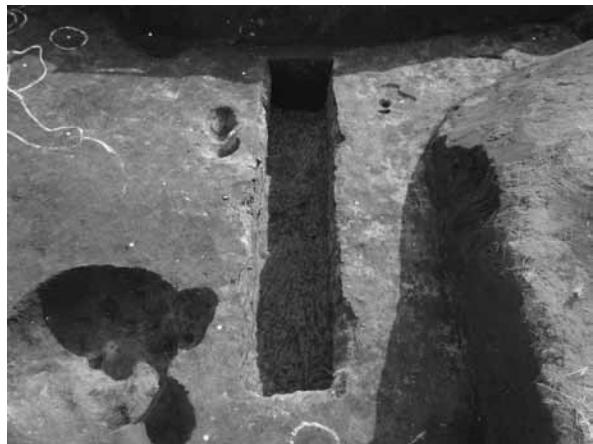
SI - 4 全景・土層断面 (北)



SI - 5・P -230 全景・遺物出土状況 (南西)



SL - 1 焼土検出状況 (西)



SK - 1 全景 (西)



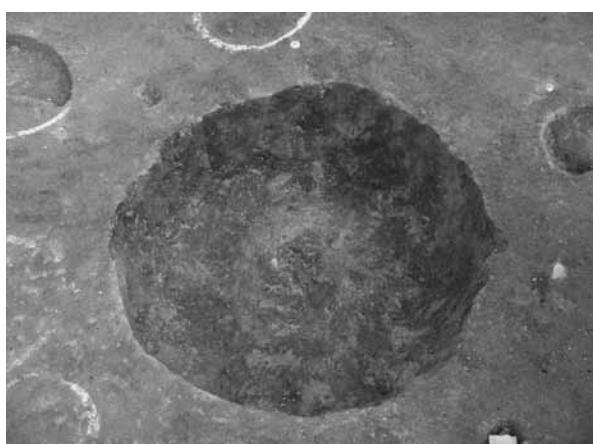
SK - 3 全景・遺物出土状況 (東)



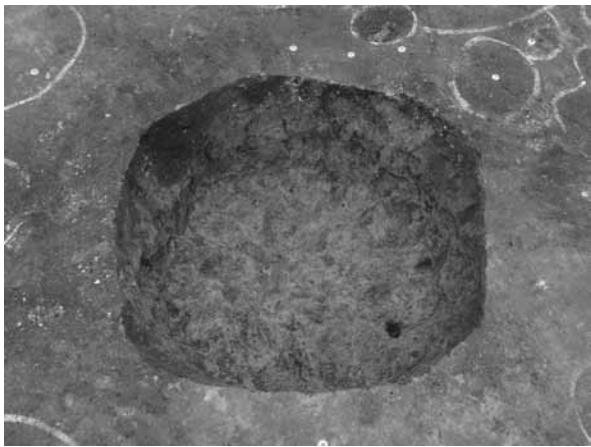
SK - 3 遺物出土状況近景 (南東)



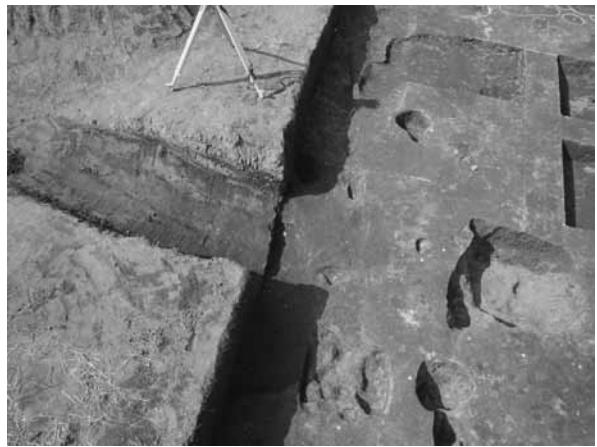
SK - 3・16 全景 (東)



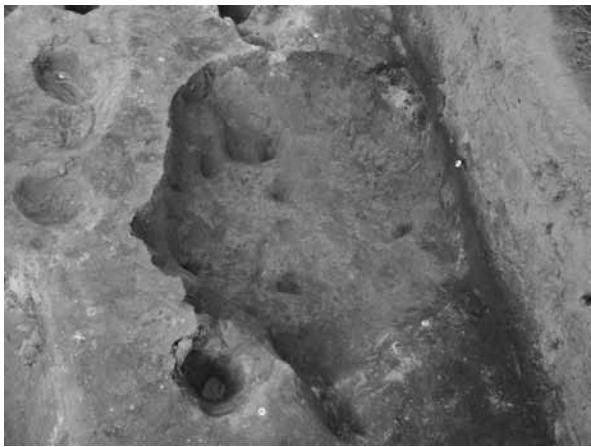
SK - 5 全景 (東)



SK - 9 全景 (南)



SK - 13 (奥) · 40 全景 (北東)



SK - 17 · 40 全景 (東)



SK - 25 全景 · 副葬品出土状況 (南)



SK - 25 土層断面 (東)



SK - 26 · SK - 27 · P - 45 全景 (北)



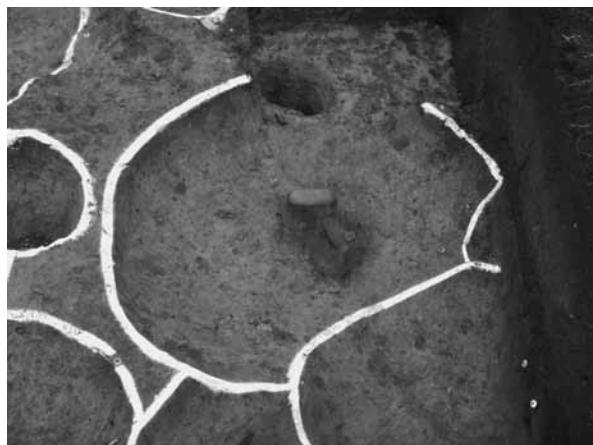
SK - 35 (柱穴) 土層断面 (西)



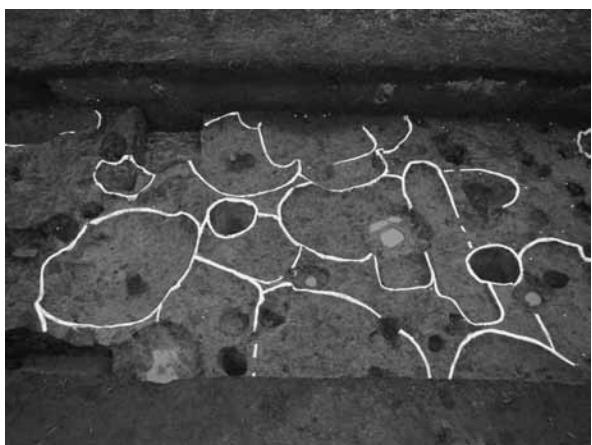
SK - 54 (柱穴) 土層断面 (西)



SK - 72 全景・遺物出土状況（南東）



SK - 81 全景・遺物出土状況（東）



縄文土坑群 全景（南）



中近世ピット群・SD - 1 全景（西）



P - 70 磚出土状況（東）



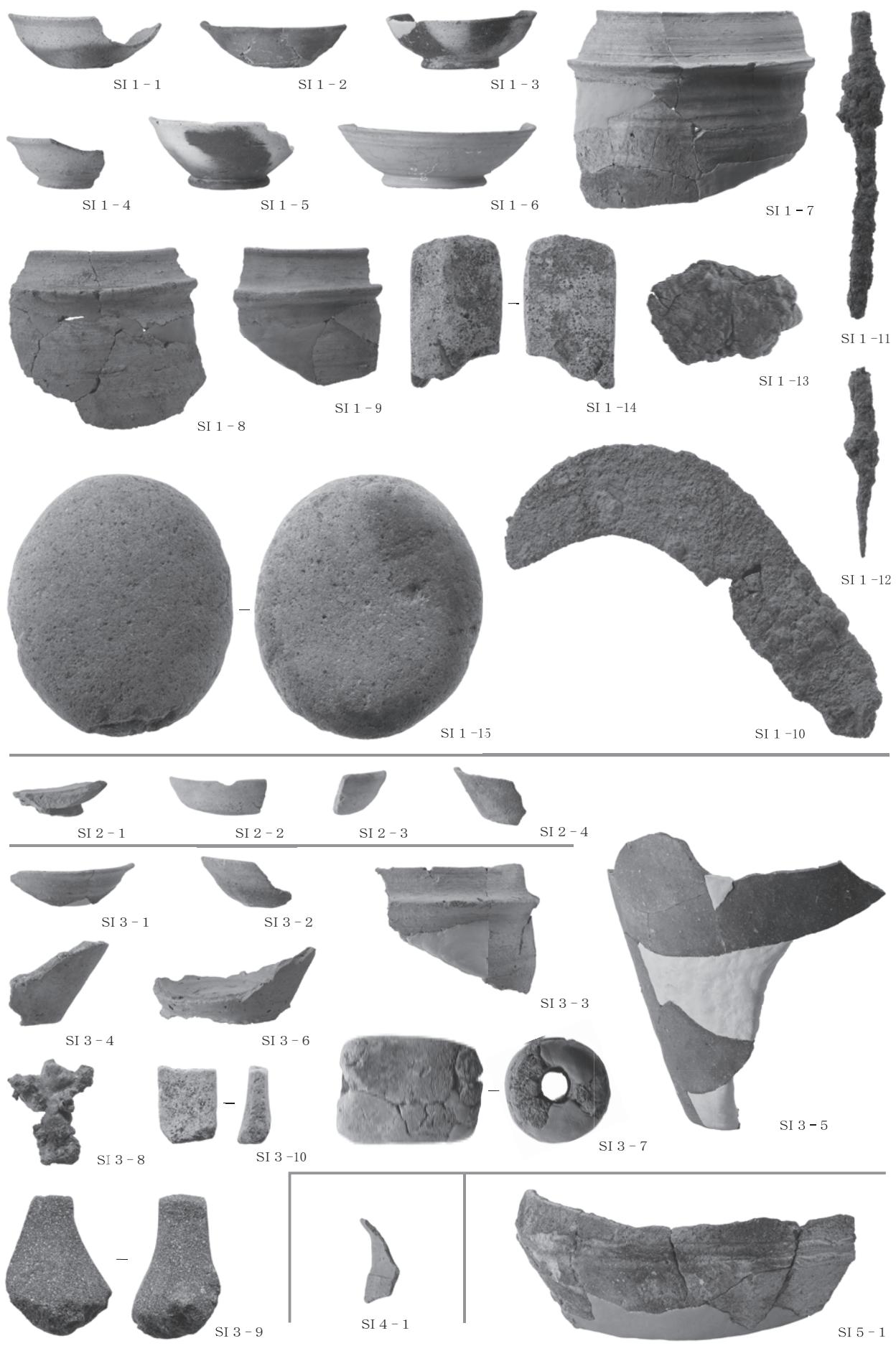
P - 121 全景・器台出土状況（西）



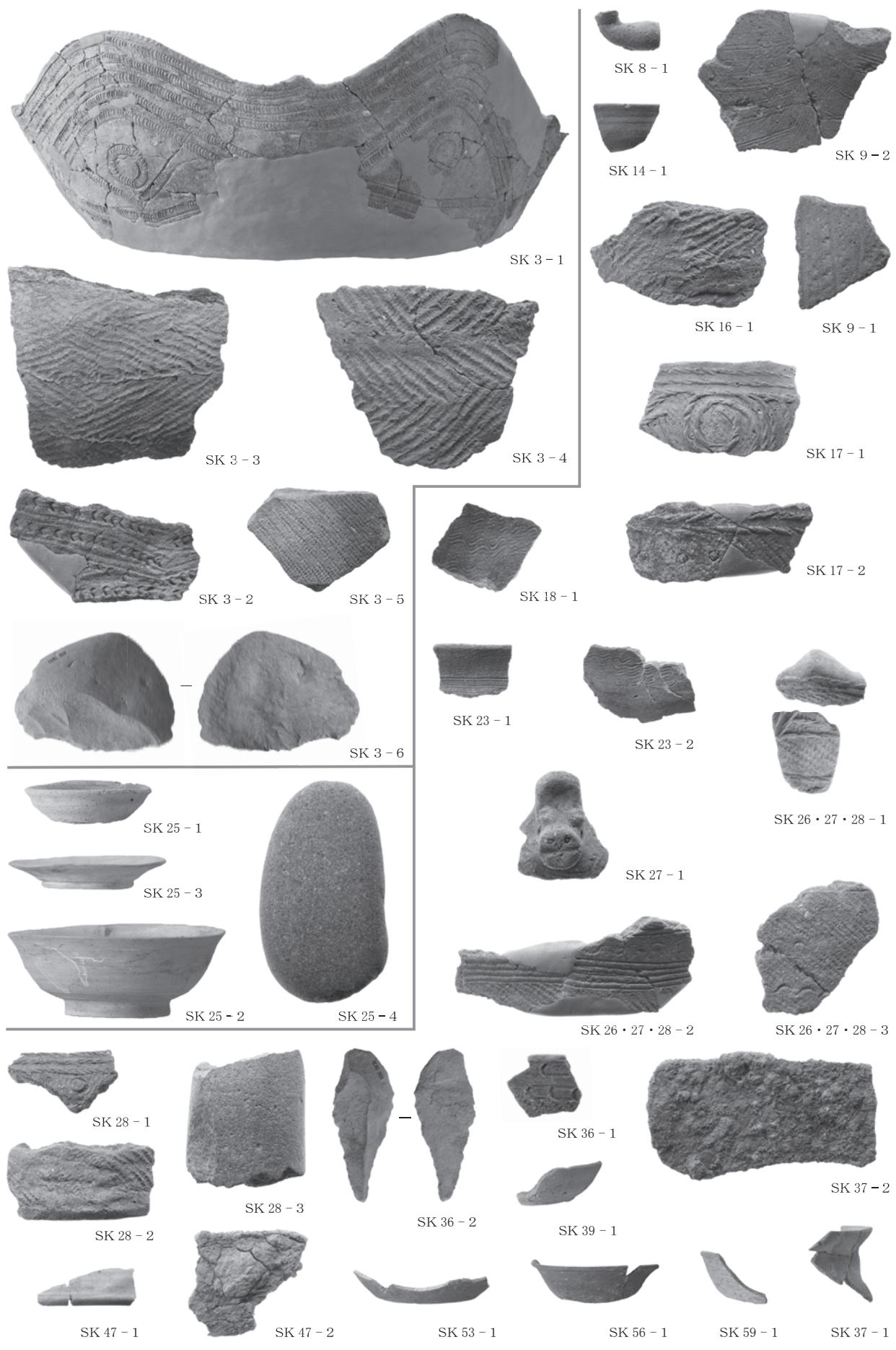
P - 155 磨製石斧・被熱磚出土状況（東）



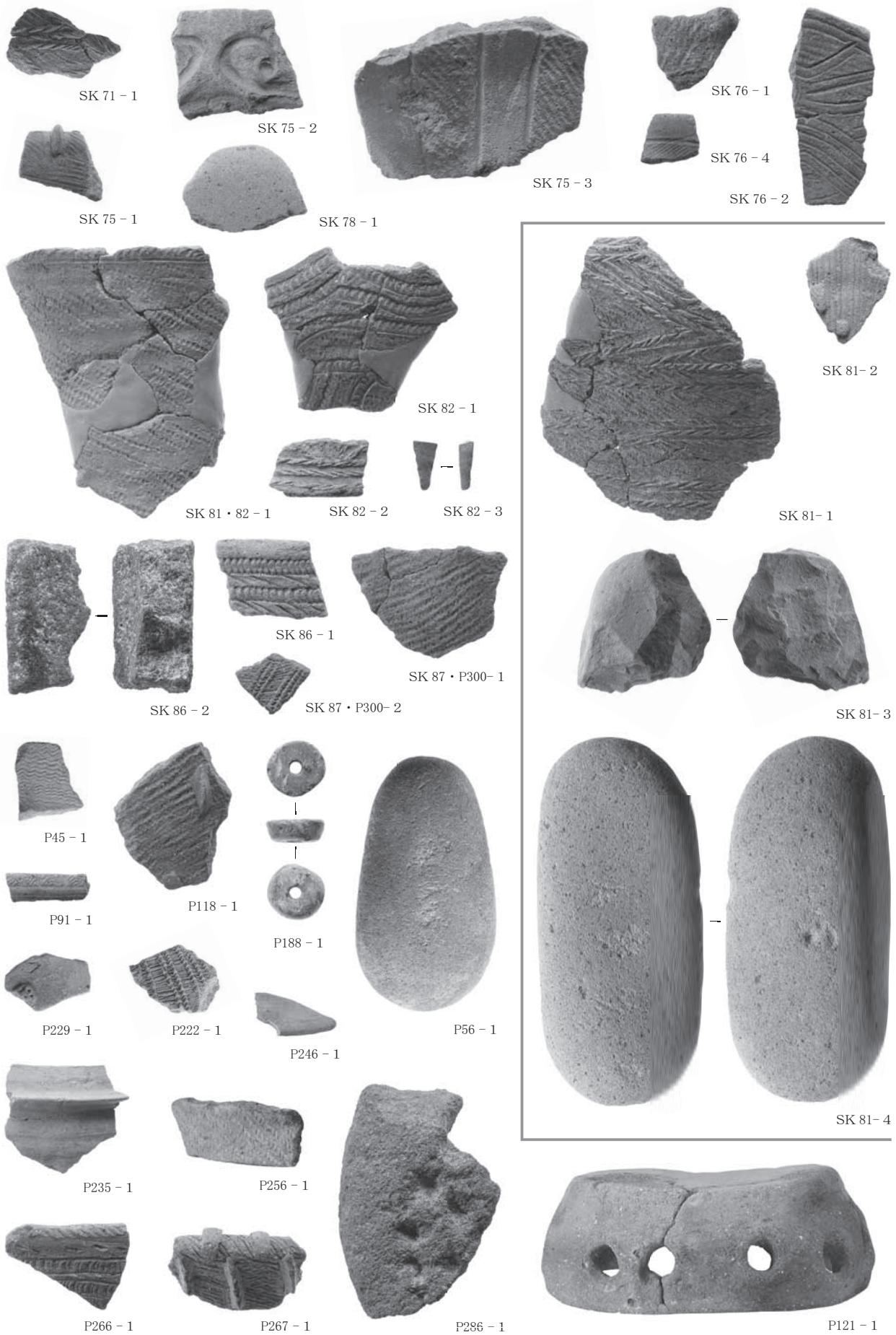
P - 226 馬歯検出状況（南）



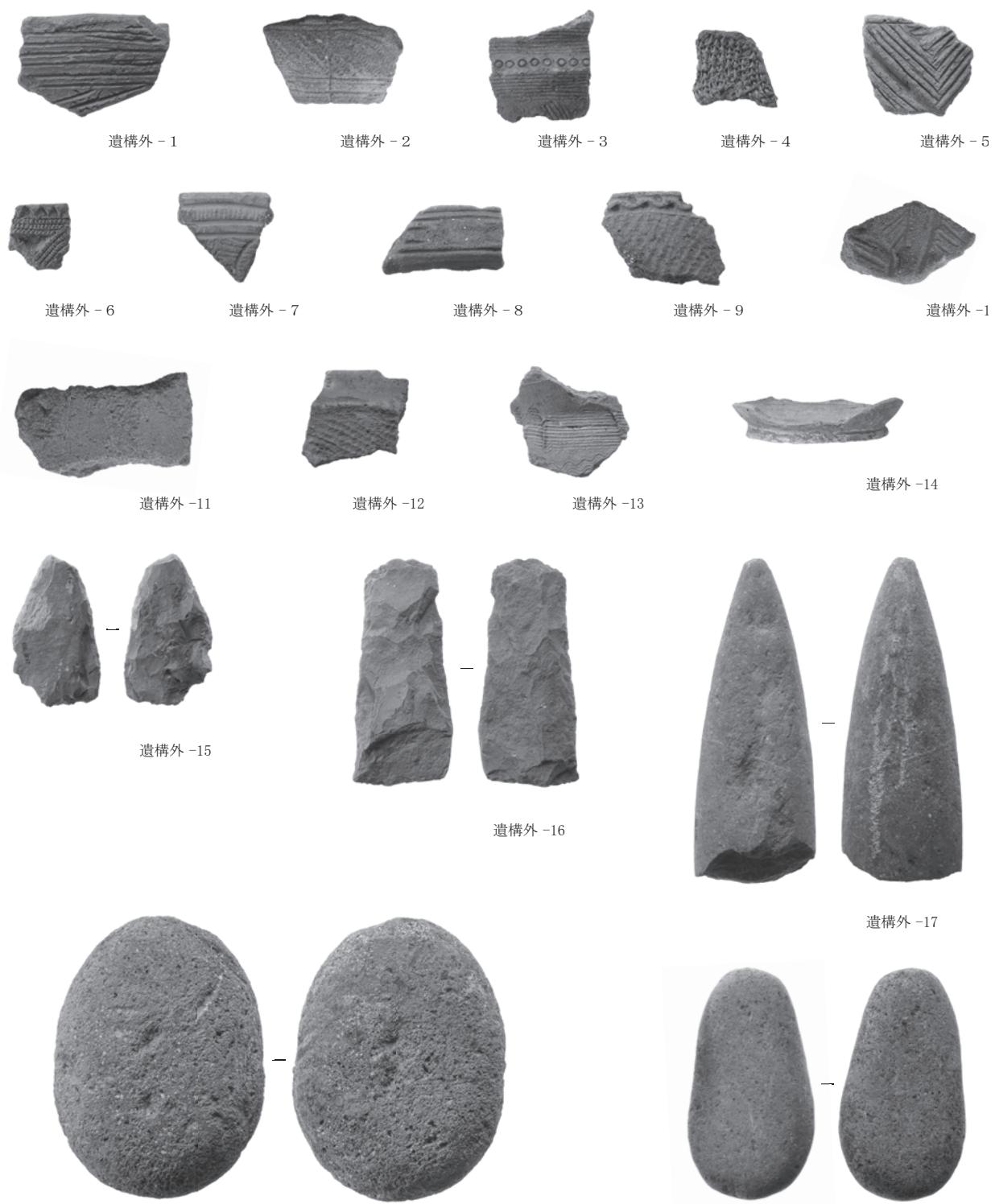
出土遺物（1）住居跡・竪穴状遺構



出土遺物（2）土坑①



出土遺物（3）土坑② / ピット



出土遺物 (4) 遺構外出土遺物

抄 錄

フリガナ	ケンザキイナリヅカイセキ 4
書名	剣崎稻荷塚遺跡 4
副書名	－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－
卷次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 373 集
編著者名	矢島 浩 南田法正
編集機関	有限会社毛野考古学研究所 〒 379-2146 群馬県前橋市公田町 1002 番地 1 TEL. 027-265-1804
発行機関	有限会社毛野考古学研究所
発行年月日	西暦 2016 (平成 28) 年 5 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
けんざきいなりづか 剣崎稻荷塚 いせき 遺跡	ぐんまけんかさきし 群馬県高崎市 けんざきちょうあざいなりづか 剣崎町字稻荷塚 766 番 1、766 番 2	102020	656	36° 20' 44"	138° 57' 19"	20150901 ～ 20151111	151	宅地造成工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
剣崎稻荷塚遺跡 (第 4 次)	集落跡	縄文 弥生 古墳 奈良 平安 中世 近世	堅穴住居跡 (鍛冶遺構 1 軒) 掘立柱建物跡 焼土跡 土 坑 ピット 溝	7 軒 9 棟 1 基 83 基 284 基 1 条	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶器 磁器 中近世土器 炻器 土製品 石器 石製品 金属製品 動物遺体 人骨 (臼歯)	縄文時代前期集落の土坑群を主体とする。前期中葉～後期前葉までの遺構を確認。 10世紀の堅穴住居跡は小鍛冶遺構を伴う。工房跡と推測。同時期頃の墓坑からはヒトの歯とともに副葬品の須恵器壊や灰釉陶器塊・段皿が出土。

高崎市文化財調査報告書第 373 集

剣崎稻荷塚遺跡 4

－宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成 28 年 5 月 25 日印刷

平成 28 年 5 月 31 日発行

編 集／有限会社毛野考古学研究所

発 行／有限会社毛野考古学研究所

前橋市公田町 1002 番地 1

TEL 027-265-1804

印 刷／朝日印刷工業株式会社